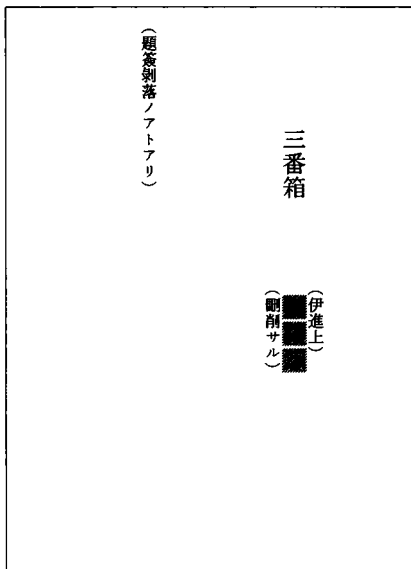


御犬手組拾考

(表紙)



(中表紙)

「(文) 政八年乙酉四月吉日

御犬手組拾考

漫不許他見事

伊地知季安艸寫

1 小序

此御犬手組は兩三本集覽いたし、互の詳略を考へ、年月の錯簡を正し繕寫して斯く一冊と成し置、重て他書を引き按據を得たる人くハ、朱もて其爵里のあらましをも旁註せんと、しかいふ、 平季安艸

2 「加治木鹿屋仁右衛門藏」

應永二年乙亥二月廿九日犬追物手組

伊東殿 嶋津又三郎

嶋津越前守 稲津弥次郎

伊東伊豆守 嶋津弥三郎

嶋津修理亮 野村源五

湯地五郎四郎 鹿屋周防介

嶋津殿 伊東遠江守

検見 嶋津上野入道「喚次 豊浦左近将監カク在シ」

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」五四三号ト同一ナリ、尚「正統系図」ニハ「在小林衆大脇民部左衛門」トアリ)

2の1 於日州飢肥各其家々を記、弓馬之道を嗜、御犬追物三

日御執行の場ニ令相出之趣、後代子孫為形見、筆紙ニ

記置所、弟他家之養子なる故、豊浦左近將監幸綱ト名

乘是也、惣領家者肝付なるべき者也、

鹿屋周防守伴氏朝臣

應永二年三月十七日書之、

兼詮

4

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」九四六号ト同一ナリ)

應永二年 亥 二月廿九日之六手組之事

伊東殿 十二疋 「イナシ疋付 皆おなし」 嶋津又三郎 五疋

嶋津越前守 十疋 稻津弥二郎 三疋

伊東伊豆守 同 嶋津弥三郎 四疋

嶋津修理亮 十二疋 野村源五郎 「ナシイ」 二疋

湯治五郎四郎 五疋 鹿屋周防介 同

殿 廿二疋 伊東遠江守 十一疋

検見 嶋津十郎左衛門入道 喚次「此所紙切れ不相見得候」

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」五四四号ト同一ナリ)

又手組

至徳元年閏九月廿三日

宮内太夫 十八疋 島津修理亮 十二疋

田豊前守 「本ノマ、」 二疋 長嶋伊豆守 一疋

伊東大和守 同 高木長門守 三疋

渋谷刑部少輔 一疋 伊東薩摩守 一疋

3 「全」

「朱カキ 此本書古き手組ニ而候」

犬追物手組事 應永廿三年 二月廿八日

殿 (⑩廿一) 十七疋 嶋津次郎三郎 九疋 十二疋

嶋津又太郎 七疋 吉田若狹守 四疋 九疋

蒲生美濃守 七疋 平田七郎 七疋 五疋

別府下野守 五疋 安樂七郎 五疋

肝付河内守 十三疋 柏原豊前守 七疋 三疋

嶋津近江守 九疋 市来備後入道 七疋

検見

嶋津上野入道

5

6

御犬手組拾考

【真本山田七郎右エ門家藏】
 犬追物手組 至徳元年 月十六日
 『氏久公時御年五十七』
 殿 十二足△
 『元久公老名重宗入道支親カ』
 平田新左衛門尉 五足△
 『新納氏二代越後守實久カ初名如此』
 嶋津修理亮殿 五足△

牛屎采女助 同

設樂掃部助 同

上津浦上総介 九足

渋谷近江守 一足

検見 益戸徳右衛門

喚次 曾賀二郎

又一組

宮内太夫 廿足

嶋津修理亮 廿二足

伊東薩摩守 一足

同 伊豆守 三足

長嶋伊豆守 三足

同 上津浦上総介 一足

牛屎采女助 五足

佐敷越中守 二足

渋谷近江守 四足

同 五後介 三足

検見 相良近江

喚次 志岐又二郎

7の2

【高本市来氏藏】イ
 犬追物手組之事 至徳二年 十二月十五日
 『氏久公』
 嶋津殿 十足
 『忠家子』
 市来千代太郎丸 十足
 『家親』
 日置肥前守 三足

此本書古キ手組ニ而候 『加治木鹿屋仁右衛門』

十二月十五日

『筑前守忠家時 氏久公ノ御増也トシ』

市来殿 九足

日置肥前守 三足

7の1

【見于市来小四郎家状、可追考】
 犬追物手組 至徳二年 十二月十五日
 『不用ナリ 次ニ出ツ』
 嶋津殿 十足
 『筑前守忠家』氏久公ノ市来殿 九足
 『御鞆トアリ』
 (以下コノ丁ニ記載ナシ)

【元久公ノ老名ニ縊殿助季豊后ニ 久安ト云アリ其幼名カ】 『應永記ニ此名見ユ』
 伊地知彦六 三足△
 『元久公時年御二十二』
 又三郎殿 七足△
 肥後法師丸 一足△
 『肥後久盛カ安國寺申状應永記等ニ 出タル老名ノ肥後此ナラン』

嶋津九郎左衛門入道殿

『山田家四代加賀守忠經コトナリ』

(本手組ハ『旧記雜錄前編二』四二九号ト同一ナリ) (足數ハ底本ニ欠クタメ『旧記雜錄』ニヨリ補フ)

鹿屋周防介 八疋
【忠家從兄】家廣
市来右京亮 二疋

伊集院右近將監 二疋
【元久公】
陸奥守殿 廿二疋

檢見

【川上二代】親久
嶋津上野守殿
【イニハ前ニアリ】

至徳式年十二月十五日
【本手組ハ「旧記雜錄前編二」四四二号ト同一ナリ、尚「正統系図」ニハ「在加治木衆市来太郎左衛門及高山衆市来主膳」トアリ】

【全】

犬追物手組之事 文安三年二月

【立久公】
又三郎殿

嶋津次郎

村田三河守

本田因幡守

嶋津下野守

島津三郎太郎

檢見

伊集院式部 ⑤少輔△九疋

伊集院次郎 八疋

伊集院七郎 八疋
【四イ】

伊集院助三郎 十二疋

嶋津次郎三郎

嶋津助三郎

指宿平次郎

嶋津十郎次郎

市来筑前守
【久家】

嶋津四郎左衛門尉

喚次

【忠国公】
陸奥守殿

平田美濃守

【志布志鹿屋氏家藏】

犬追物手組之事 宝徳三年九月八日

【忠国公】
陸奥守殿 十二疋

五嶋津四郎 四疋

九嶋津三郎左衛門尉 三疋

十肝付河内守 七疋
【兼元カ】

六嶋津遠江守 五疋

二嶋津薩摩守 十三疋

檢見

鹿屋周防介

【本手組ハ「旧記雜錄前編二」一三四六号ト同一ナリ】

三嶋津伯耆守 三疋

七龜房丸 「イ十一疋」
【久家】

十二市来筑前守 五疋
【兼忠カ】

十三加治木三郎 六疋

八嶋津金松丸 四疋

【立久公】
四又三郎 八疋

犬追物手組事

十一嶋津豊後守殿 十疋
十二
十三

十二嶋津次郎五郎殿 十疋
十三
十四

嶋津左近將監 八疋
【右イ】

嶋津備前守殿 三疋
【右イ】

島津源右衛門尉 三疋 嶋津四郎左衛門尉 五疋 嶋津治部少輔 十六疋 田北藤右衛門尉殿 十二疋 検見 大内左近太輔殿 嶋津淡路守殿	羽嶋新左衛門尉 三疋 嶋津助七 九疋 柏原助七郎 八疋 嶋津左馬助殿 十三疋 喚次
--	---

犬追物手組之事 宝徳四年 五月十四日

『忠国公』 陸奥守殿 嶋津四郎 嶋津遠江守 嶋津三郎左衛門尉 嶋津犬満丸 嶋津薩摩守 検見 嶋津下野守 『三代』 『家久』 『上』	嶋津美濃守 嶋津亀房丸 市来太郎 長野助五郎 鹿屋周防介 『立久公』 嶋津又三郎
---	--

〔本手組ハ「旧記雜録前編二」一三四八号トホボ同一ナリ〕

犬追物手組之事 宝徳四年 五月十五日

『忠国公』 陸奥守殿 嶋津四郎 嶋津遠江守 嶋津三郎〔左〕衛門尉 市来太郎 嶋津薩摩守 検見	嶋津美濃守 嶋津亀房丸 嶋津犬満丸 長野助五郎 鹿屋周防介 『立久公』 島津又三郎
---	---

犬追物手組之事 享徳三年 九月廿日

『忠国公』 殿 『立久公』 嶋津又三郎 嶋津助九郎 飢肥豊後守	嶋津四郎 嶋津美濃守 肝付河内守 餅原撰津介
--	---------------------------------

〔本手組ハ「旧記雜録前編二」三四八号中原注ニ示サレルモノノ省略サル、尚
 「正統系図」ニハ「寫在善入撰津介」トアリ〕

肝付七郎三郎 六疋
 吉田九郎右衛門尉 九疋
 吉田左衛門太輔 二疋
 肝付九郎右衛門尉 四疋
 嶋津次郎三郎 十五疋
 嶋津四郎 二疋
 喚次
 穎娃又九郎

大追物手組事

寛正五年五月十三日

嶋津三郎太郎 八疋
 肝付河内守 十二疋
 嶋津又十郎 四疋
 蒲生十郎三郎 六疋
 本田又次郎 六疋
 肝付助三郎 十二疋
 肝付七郎三郎 六疋
 吉田九郎右衛門尉 九疋
 吉田右衛門太輔 二疋
 肝付九郎右衛門尉 四疋
 嶋津次郎三郎 十五疋
 嶋津四郎 二疋
 呼次
 穎娃又九郎

『寛正六年三月五日 忠國公御授傳于時年二十八歳、川上十郎左エ門尉義久入道』

18 曩祖島津判官忠久下向于當國以來、我家弓馬之藝、於日

域無其隱者也、蘇茲代之揖讓之相傳、綿々連々而無不賞、然者彼流、或号鎌倉流、或号嶋津流、云恰云恰以無二之名也、併代之府君、專彼犬追物奥淵流、就中三之秘室、三之言事、并逃犬之沙汰、踏越之矢、三組之矢也、次妻妾從之矢、三身相應之矢、芒込之矢、彼十五ヶ条當家相傳之秘室也、相構々、不可疎放有壹第一也、併此外之矢沙汰、不違枚挙、若真実志之仁者、可守重々之起證文、而可相傳者也、仍状迄如件、

寛正六年三月五日

忠國御判

島津十郎衛門殿

『志布志鹿屋氏藏本』
 『写在新納久四郎入道宗心』
 大追物之手組 寛正七年丙戌二月晦日

殿「立久」十四疋
 「十七疋イ」
 嶋津次郎三郎「殿」八疋
 「四疋イ」
 嶋津助九郎「殿」十二疋
 「六イ」
 伊東次郎太郎「二」五疋
 「豆イ」
 伊東彦六「十二疋」
 「十二疋」
 蒲生十郎三郎「一イ」八疋
 野村玄蕃允 五疋

嶋津九郎左衛門尉 五疋

伊東主税助 『豆イ』『殿允イ』 七疋

伊東六郎『殿』 十二疋

嶋津又五郎『殿』 十疋

檢見

喚次

永享十年戊午生、此年二十九歳
嶋津十郎左衛門尉 『久勝』『道安』

伊地知又九郎

此犬追物 立久於櫛間伊東六郎方参候時之御手組也、其時色

く被申事有、射立百疋也、

『イニ』
於飢肥ニ張行之』

(本手組ハ「旧記雜錄前編」二四三三・一四三五・一四三六号トホボ同一ナリ、
尚「正統系圖」ト同ハ「四三五号ナリ」)

20 (前欠カママ)

蒲生十郎三郎

長野助五郎

二島津新三郎 十疋

四島津新次郎

檢見

喚次

島津十郎左衛門尉 『久勝后ハ』『義久』

天辰新六

21 犬追物手組之事 文正元年十月四日

一島津薩摩守 十三疋

三島津助九郎 八疋

五長野助五郎 六疋

七蒲生十郎三郎 六疋

九島津太郎左衛門尉 六疋

十二天辰新六 七疋

十三指宿平次郎 三疋

十四島津三郎四郎 七疋

十大寺千徳丸 三疋

十三高木孫太郎 三疋

六伊地知又九郎 六疋

八村田阿五三郎

二島津九郎左衛門尉 四疋

四島津孫太郎

檢見

喚次

島津十郎左衛門尉 『義久始名』『久勝』

島津三郎次郎

22 犬追物手組之事 文正元年十月七日

一島津十郎左衛門尉 『義久』 十一疋

三島津九郎左衛門尉 五疋

五大寺千徳丸 貳疋

七伊地知又九郎 八疋

九蒲生十郎三郎 八疋

十二島津太郎左衛門尉 四疋

十三高木孫太郎 三疋

十四島津三郎四郎 二疋

十島津新次郎 五疋

十三島津孫太郎 二疋

六村田阿五三郎丸 五疋

八長野助五郎 九疋

二島津助九郎 八疋

四島津新三郎 三疋

檢見

喚次

島津薩摩守

天辰新六

犬追物手組之事文明四年
二月五日

一 島津式部④大太輔
三 渋谷左衛門次郎

五 島津又次郎
七 島津十郎左衛門尉

九 島津犬五郎丸
十二 大寺七郎

十 蒲生十郎三郎
十三 長野助五郎

六 島津助九郎
八 伊地知又九郎

二 島津三郎左衛門尉
四 島津新三郎

検見
喚次

島津左京亮
島津犬次郎丸

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一四七七号ト同一ナリ)

検見
喚次

島津十郎左衛門尉「義久」
西牟田源右衛門尉

25 犬追物手組之事文明四年
十一月三日

一 島津十郎左衛門尉「義久」
三 島津兵部少輔

五 蒲生拾郎三郎
七 島津又八郎

六 伊地知又九郎
八 渋谷仁久丸

二 渋谷左衛門次郎
四 島津助九郎

検見
喚次

島津左京亮
渋谷次郎九郎

犬追物手組之事文明四年
卯月十日

「立久公也」
一 陸奥守殿
三 島津薩摩守
七 伊地知又九郎

五 島津修理亮
九 足
十一 長野助五郎
十二 肝付主税助

九 蒲生十郎三郎
十 足
十三 肝付主税助
十四 肝付周防助

十 大寺七郎
十一 足
十二 肝付主税助
十三 足

六 島津助九郎
八 足
十四 肝付周防助
十五 足

二 島津式部太輔
五 足
十六 肝付周防助
十七 足

犬追物手組之事文明四年
十一月四日

一 島津左京亮
三 島津兵部少輔

五 渋谷千代松丸
七 島津又八郎

九 渋谷左衛門次郎
十一 足
十二 大寺七郎

十三 島津平八丸
十四 足
十五 渋谷仁久丸

十 村田太郎次郎
十二 足
十六 渋谷次郎九郎

六 島津三郎次郎
八 足
十七 伊地知又九郎

二島津助九郎 十疋

三蒲生十郎三郎

検見

喚次

島津十郎左衛門尉「義久」

渋谷七郎左衛門尉

犬追物手組之事文明四年十一月六日

一島津助九郎 七疋

三渋谷千代松丸 十一疋

五島津十郎左衛門尉「義久」廿三疋

三蒲生十郎三郎 七疋

九大寺七郎 四疋

十島津又八郎 六疋

六村田太郎次郎 十二疋

八渋谷仁久丸 三疋

二島津兵部少輔 九疋

四島津三郎次郎 七疋

検見

喚次

島津左京亮「兼久カ」

渋谷七郎左衛門尉

島津平八丸 五疋

渋谷次郎九郎 四疋

犬追物手組之事文明五年三月廿六日
「立久公ナラン」
一殿

五渋谷左衛門次郎

七島津太郎

九島津三郎「川上忠頼カ」

十蒲生十郎三郎

⑩次

三式部大輔殿

十三伊地知又九郎

十四大寺七郎

十平田又七郎

十二長野助五郎

六島津帛千代丸

八島津三郎五郎「川上行久カ」

二薩摩守殿

四修理亮殿

検見

▽喚次△

島津十郎左衛門尉「義久」

鎌田次郎右衛門尉

(本手組ハ「旧記雜録前編二」一四八七号ト同一ナリ)

犬追物手組之事文明六年二月十一日

一又三郎殿

三島津薩摩守

五島津又次郎

七島津虎千代丸

九島津塩太郎

十二蒲生十郎三郎

十島津犬次郎

十三村田犬羆丸

六島津都之龜丸

八島津三郎五郎「川上行久」

二島津式部太輔

四島津修理亮

検見

喚次

「川上忠村カ」
島津因幡守

島津犬太郎

犬追物手組之事文明六年八月廿三日

〔忠昌公御代始〕

一殿 十三足

五島津又次郎 六足

九吉田次郎四郎 三足

十鹿屋三郎次郎 五足

六島津太郎 五足

二島津薩摩守 十二足

検見

島津十郎左衛門尉〔義久〕

〔本手組ハ「旧記雜錄前編二」一四九七号ト同一ナリ〕

長野助五郎

検見

喚次

島津十郎左衛門尉〔義久〕

東 又七

〔イナシ〕

上手三於出水相良殿参上之時

犬追物手組文明七年十月九日

一嶋津修理亮 十九足

五伊地知新左衛門尉 十足

〔イシ〕
九上原太郎次郎 四足

十市来左衛門太郎 四足

六島津彈正 七足

二嶋津薩摩入道 九足

検見

嶋津十郎左衛門尉〔義久〕

天辰新六

犬追物手組之事文明七年三月十日

〔イナシ〕

一殿 廿二足

五島津三郎左衛門尉 二足

九平田又七郎 三足

十肝付主税之助 一足

六島津四郎三郎 一足

二式部太輔殿 四足

三島津又四郎 一足

七肝付周防助 二足

十鹿屋三郎四郎 一足

十二隈江都之宮丸 一足

八蒲生十郎三郎〔拾イ〕 三足

四島津太郎〔イニ足〕

犬追物手組文明七年十月九日

一嶋津修理亮 十九足

五伊地知新左衛門尉 十足

〔イシ〕
九上原太郎次郎 四足

十市来左衛門太郎 四足

六島津彈正 七足

二嶋津薩摩入道 九足

検見

嶋津十郎左衛門尉〔義久〕

天辰新六

33 御當家十一代御屋形忠昌御不例之時、為御立願、文明十

五年八月廿一日、薩摩國於一宮新田八幡大菩薩神前〔ニ〕

有笠懸、奉行嶋津十郎左衛門尉殿江被仰付、射手本日記

者寶殿〔ニ〕被籠之間、其日記寫置處也、同年月翌日到高江

笠掛日記同書寫早、在別紙、
(⑩戀)

鳴薩 薩摩守國久 後者法名為圓

鳴彦 河上殿一男 假名彦三郎殿

伊左 伊地知左衛門尉方 後者被任周防守、

鳴源薩州被官阿多源左衛門殿殿

鳴又 河上十郎左衛門尉殿一男又十郎殿
「義久道安」

伊七薩州被官伊地知越前守方一男又七郎殿方

桑右 桑波田右馬介方 阿多領主

長弥 長谷場弥四郎方

鳴助 伊集院尾張守殿一男助九郎殿(⑩ナシ)

鳴又 河上左近將監殿一男又八郎殿被任
掃部介

吉治 吉田治部太輔後ハ被任三河守(⑩美)
(⑩助)

波右 東郷右馬允 後者被任隱岐守、

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一五五五号文書ト同一文書ナルベシ)

犬追物手組延徳元年
十一月廿六日

殿 鳴津刑部少輔▽十疋△

鳴津撰津守▽十疋△ 伊地知周防守▽七疋△

犬追物手組延徳元年
十一月廿七日

鳴津八郎次郎▽四疋△ 加治木又八郎▽五疋△

村田太郎次郎▽五疋△ 五代助五郎▽四疋△

鳴津三郎次郎▽五疋△ 伊地知又七▽三疋△

蒲生十郎▽七疋△ 鳴津八郎三郎▽五疋△

鳴津上野介「公久」▽七疋△ 吉田治部太輔▽七疋△

検見 鳴津十郎左衛門尉 喚次

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一六七二号ト同一ナリ)
(疋數ハ底本ニ欠クタメ「正統系四」ニヨリ補フ)

殿 鳴津上野介▽四疋△

吉田治部少輔▽十一疋△ 伊地知周防守▽九疋△

鳴津八郎次郎▽五疋△ 鳴津三郎次郎▽二疋△

五代助五郎▽三疋△ 村田太郎次郎▽三疋△

加治木又八郎▽八疋△ 伊地知又七▽三疋△

蒲生十郎▽七疋△ 鳴津八郎三郎▽六疋△

鳴津撰津守▽六疋△ 鳴津刑部少輔▽八疋△

検見 喚次

殿
鳴津撰津守

犬追物手組
延徳二年正月十八日

鳴津刑部少輔
蒲生十郎

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六七号トホボ同一ナリ)
(定數ハ底本ニ欠クタメ「正統系圖」ニヨリ補フ)

鳴津十郎左衛門尉

檢見

鳴津刑部少輔七疋 △

吉田治部少輔八疋 △

長野新右衛門尉 △

村田太郎次郎五疋 △

鳴津八郎次郎六疋 △

蒲生十郎七疋 △

殿
▽十五疋 △

犬追物手組
延徳元年十一月廿八日

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六七号トホボ同一ナリ)
(定數ハ底本ニ欠クタメ「正統系圖」ニヨリ補フ)

鳴津十郎左衛門尉

鳴津十郎左衛門尉

鳴津三郎次郎

鳴津刑部少輔
鳴津撰津守

鳴津三郎太郎

鳴津次郎四郎

鳴津八郎次郎

加治木又八郎

五代助五郎

伊地知又七

和泉孫太郎

鳴津三郎次郎

平田又九郎

鳴津刑部少輔

伊地知周防守

殿

鳴津次郎三郎

犬追物手組

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六七五号ト同一ナリ)

鳴津十郎左衛門尉

檢見

鳴津上野介

蒲生刑部少輔

吉田治部太輔

桑波田右馬助

鳴津三郎次郎

加治木又次郎

鳴津八郎三郎

伊地知又七

犬追物手組延徳二
二十四

殿 ▽十八疋△

嶋津八郎次郎 ▽一疋△

嶋津三郎次郎 ▽五疋△

村田太郎次郎 ▽一疋△

税所善左衛門⑩尉 ▽一疋△

伊地知周防守 ▽九疋△

嶋津次郎三郎 ▽十一疋△

檢見

嶋津十郎左衛門⑩尉

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六八〇号トホボ同一ナリ)
(疋數ハ底本ニ欠クタメ「正統系図」ニヨリ補フ)

嶋津三郎太郎 ▽十七疋△

加治木又八郎 ▽六疋△

五代助五郎 ▽三疋△

和泉孫太郎 ▽一疋△

伊地知又七 ▽九疋△

平田又九郎 ▽三疋△

嶋津刑部少輔 ▽十四疋△

喚次

十島津次郎四郎 十一疋

六島津次郎三郎 七疋

二島津撰津助 六疋

檢見

島津十郎左衛門尉「義久」

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六八五号トホボ同一ナリ)

十二島津三郎四郎 四疋

八島津又次郎 三疋

四島津安藝守 三疋

喚次

羽島新次郎「三イ」

犬追物手組之事延徳二年於飢肥二
度目也三月廿三日

一殿 十五疋

五島津安藝守 七疋

九伊地知周防守⑩分 六疋

十三五代助五郎 三疋

十島津源六 七疋

六島津兵部少輔 四疋

二島津左衛門尉 八疋

檢見

島津十郎左衛門尉「義久」

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六八六号トホボ同一ナリ)

三島津次郎三郎 七疋

七島津次郎四郎 十二疋

十二平田又九郎 五疋

十四柏原助七郎 四疋

十三島津源七 五疋

八島津藏人進「イナシ」 四疋

四島津刑部少輔 五疋

喚次

島津孫右衛門尉⑩左

【於飢肥イ】「イナシ」

犬追物手組之事延徳二年三月廿二日
於飢肥二度目之手組也「此行イナシ」

一殿 十三疋

五島津刑部少輔 五疋

九伊地知周防守 五疋

十三島津源次郎 三疋

十四鹿屋周防助「介イ」 二疋

三島津左衛門尉「川上兼久」 六疋

七島津徳三郎丸「イナシ」 五疋

十二島津兵部少輔 五疋

十五平田右馬之助「イナシ」 六疋

十六餅原彦九郎 四疋

犬追物手組 延徳二年三月廿六日

殿 〓十八疋 △ 嶋津撰津守 (④介) 〓九疋 △

吉田治部太輔 (④大) 〓二疋 △ 嶋津刑部少輔 〓八疋 △

舂肥又八 〓三疋 △ 嶋津四郎左衛門 (④尉) 〓五疋 △

嶋津助七 〓四疋 △ 羽嶋新左衛門 (④尉) 〓四疋 △

嶋津右衛門 (④尉) 〓三疋 △ 嶋津三郎四郎 〓二疋 △

嶋津左衛門 (④尉) 〓八疋 △ 嶋津次郎四郎 〓九疋 △

嶋津安藝守 〓三疋 △ 嶋津次郎三郎 〓六疋 △

檢見 喚次

嶋津十郎左衛門 (④尉) 餅原縫殿助

〓④於福嶋 延徳二二 △

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六八七号トホボ同一ナリ、尚「正統系図」ニハ「正文在餅原平右衛門惟長」トアリ) (正数ハ底本ニ欠クタメ「正統系図」ニヨリ補フ)

犬追物手組之事 延徳二年三月卅日於福嶋

一殿 廿三疋 三島津次郎三郎 四疋

五島津安藝守 三疋 七島津次郎四郎 十一疋

九伊地知周防守 (④介) 九疋 十加治木又八郎 四疋

十三平田又九郎 四疋 十三原次郎右衛門尉 (④上) 二疋

十平田右馬助 三疋 十長野初五郎丸 (④助) 二疋

六島津大和守 五疋 八島津徳三郎丸 三疋

二島津撰津助 (④介) 十三疋 四島津左衛門尉 五疋

檢見 喚次

餅原駿河守 平瀬三郎次郎 (④四)

〓④於福嶋 延徳二二 △

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六八八号トホボ同一ナリ)

44 『此本書古キ手組ニ而候』 『加治木 鹿屋仁右衛門』

犬追物手組之事 延徳二年四月朔日於福嶋

一殿 (④十九) 廿一疋 三島津大和守 (④四) 八疋

五島津安藝守 (④四) 七疋 七島津次郎三郎 (④十六) 六疋

九舂肥又八 (④五) 二疋 十平田又九郎 (④八) 三疋

十三梁瀬源五 (④ナシ) 二疋 十牧彦四郎 (④二) 一疋

十島津三郎四郎 (④二) 五疋 十三五代助五郎 (④四) 六疋

六伊地知周防守 (④五) 十五疋 八鹿屋周防守 (④十) 一疋

二吉田治部太輔 (④大) 四疋 四島津左衛門尉 (④十一) 七疋

検見

喚次

島津十郎左衛門尉『義久』

平瀬三郎四郎

〔本手組ハ「旧記雜錄前編二」六八九号ト同一ナリ、但シ「正統系図」ニハ「在松七右衛門」權利又在清水衆真木勘解由トアリ〕

45 『新納久四郎入道宗心有之イ』

犬追物手組『之』事延徳二年四月四日於志布志

一殿『忠昌』 十九疋

三島津二郎三郎 七疋

五島津安藝守 三疋

七吉田治部太輔 七疋

九鹿屋周防助『介イ』 五疋

十二五代助五郎 五疋

十平田右馬助『介イ』 十疋

十三加治木又八郎 六疋

六島津大和守 十二疋

八伊地知周防守 十疋

二島津四郎 二疋

四島津左衛門尉 十一疋

検見

喚次

島津十郎左衛門尉『義久』

隈江刑部少輔

『於志布志イハ此ニ』

〔本手組ハ「旧記雜錄前編二」六九〇号ト同一ナリ、尚「支流系図」ニハ「写在新納久四郎入道宗心」トアリ〕

46 『同上』

犬追物手組『之事』延徳二年四月六日於志布志

一殿『忠昌』 十六疋

三島津安藝守 八疋

五島津左衛門尉 六疋

七島津四郎 二疋

九鹿屋周防助『介イ』 一疋

十二伊地知周防守 十二疋

十三飲肥又八 三疋

十四加治木又八郎 五疋

十五五代助五郎 四疋

十三島津三郎四郎 三疋

六吉田治部太輔 五疋

八島津次郎四郎 十二疋

二島津二郎三郎 十疋

四島津大和守 八疋

検見

喚次

島津十郎左衛門尉『義久』

島津式部少輔

〔本手組ハ「旧記雜錄前編二」六九一号ト同一ナリ、尚「正統系図」ニハ「在山田七郎右衛門久通」支流系図ニ「写在新納久四郎入道宗心」トアリ〕

47 『同上』

犬追物手組『之事』延徳二年四月十八日於志布志

一殿『忠昌』 八疋

三島津四郎 一疋

五島津大和守 七疋

七肝付三郎四郎 一疋

九島津新四郎 一疋

十一島津三郎四郎 二疋

十三島津次郎四郎 七疋

十四飲肥又八 七疋

48 (ハリ紙)

「本書在大寺老帳家云」

延徳四年二月廿六日

犬追物□事

殿 十五疋

嶋津兵部少輔 五疋

嶋津徳三郎 五疋

嶋津撰津介 三疋

吉田治部少輔 十一疋

嶋津安藝守 九疋

十加治木又八郎 三疋

六島津左衛門尉 七疋

二島津次郎三郎 二疋

検見

島津十郎左衛門尉『義久』

『イニ於志布志ニ 延徳二』

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一六九二号ト同一ナリ)

十五代助五郎 五疋

八島津安藝守 四疋

四吉田治部太輔 四疋

喚次

隈江刑部太輔

「四疋」「二疋」「イ」

49

犬追物手組之事 延徳三年三月二日

一殿 十四疋

五島津美濃守 五疋

九島津三郎四郎 三疋

十三加治木又八郎 十一疋

十伊地知又七 三疋

六島津撰津守 十四疋

二島津二郎三郎 十疋

検見

島津十郎左衛門尉『義久』

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一七〇二号ト同一ナリ)

鉄肥又八郎 二疋

嶋津長門守 二疋

検見

嶋津十郎左衛門尉

「天正十一弥月九日書写之」

三浦新左衛門尉 三疋

嶋津左衛門尉 二疋

喚次

三浦新五郎

三島津左衛門尉 九疋

七渋谷左衛門尉 四疋

十一平田又九郎 五疋

十四村田太郎次郎 三疋

十二和泉孫太郎 五疋

八島津八郎左衛門尉 二疋

四渋谷又五郎 四疋

喚次

五代助五郎

文龜三年七月廿四日

犬追物手組 於肝付犬追物

殿 島津式部太輔

肝付周防守 平田又七郎

伊地知左衛門尉 肝付又八郎

長野新右衛門尉 鹿屋三郎二郎

蒲生刑部少輔 村田太郎左衛門尉

嶋津薩摩守 嶋津左衛門佐

檢見 喚次

島津十郎左衛門尉「義久」 別府因幡守

御屋形様忠昌御代

犬追物手組 永正十一年九月十四日

殿 嶋津又六郎 〓七疋△

伊地知縫殿助 〓二疋△ 加治木筑前守 〓五疋△

加治木又八郎 〓二疋△ 嶋津十郎 〓三疋△

竹田藤次郎 〓三疋△ 長野豊前入道 〓二疋△

嶋津塩鍋丸 〓一疋△ 本田刑部少輔 〓一疋△

嶋津宮房丸 〓九疋△

檢見 喚次

嶋津十郎左衛門入道「義久」 道安 大寺宗左衛門尉

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一八五一号トホボ同一ナリ) (疋數ハ底本ニ欠クタメ「正統系図」ニヨリ補フ)

犬追物手組之事 永正十一年十一月十九日

殿 嶋津三郎太郎殿

五吉田若狹守 七島津能登守

九竹田藤次郎 〓二〓 十二石井中務少輔

十平田右馬助 十二島津拾郎 〓十〓

六税所左衛門尉 八廻兵部少輔

二島津又六郎殿 四島津宮房殿 〓勝久公子時十二才〓

檢見 喚次

伊地知周防守 飛彈源次郎 〓二〓

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一八五三号ト同一ナリ)

犬追物手組之事 永正十一年十二月九日

殿 嶋津五郎丸 〓十一〓 (本手組)

嶋津左衛門督	嶋津塩鍋丸
税所左衛門尉	嶋津源左衛門尉
竹田藤次郎	石井中務少輔
本田三河守	伊地知新左衛門尉
嶋津尾張守	吉田若狹守
検見	喚次
嶋津豊後守 ^{①殿}	嶋津十郎
殿	嶋津又六郎殿
嶋津塩鍋丸	吉田若狹守
石井中務少輔	加治木又八郎
嶋津源左衛門尉	伊地知又七
税所左衛門尉	本田刑部少輔
肝付三郎五郎	竹田藤次郎
嶋津左衛門尉「朝久」	本田三河守
嶋津豊後守殿	嶋津尾張守

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一八五四号ト同一ナリ)

犬追物手組之事 永正十一年十二月十一日

嶋津十郎左衛門尉「義久」	飛彈源次郎
検見	喚次
殿	殿
加治木又八郎	伊地知又七
川上 ^{①拾}	島津十郎左衛門尉「義久」
島津十郎左衛門尉	大寺駿河守
殿	殿
加治木又八郎	伊地知又七
殿	殿
加治木又八郎「忠經」	八本田三河守 ^{①三足}
「イ五郎丸」 ^{①十四足}	「勝久」 ^{①三足}
二島津宮房丸 ^{①三足}	四伊地知周防守 ^{①四足}
三桑波田孫六 ^{①一足}	十四伊地知又七 ^{①五足}
十肝付三郎五郎「兼次」 ^{①十四足}	十三本田刑部少輔 ^{①五足}
六加治木又八郎	八本田三河守 ^{①三足}
九石井中務少輔	九足
五廻兵部少輔	二足
一殿「忠治忠昌公一男」	九足
三島津又六郎殿	十九足 ^①
七税所左衛門尉	十七足
十二島津塩鍋丸	五足
十三桑波田孫六	一足
十四伊地知又七	五足
十五伊地知又七	五足
十六伊地知又七	五足
十七伊地知又七	五足
十八伊地知又七	五足
十九伊地知又七	五足
二十伊地知又七	五足
二十一伊地知又七	五足
二十二伊地知又七	五足
二十三伊地知又七	五足
二十四伊地知又七	五足
二十五伊地知又七	五足
二十六伊地知又七	五足
二十七伊地知又七	五足
二十八伊地知又七	五足
二十九伊地知又七	五足
三十伊地知又七	五足

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一八五六号トホボ同一ナリ)

犬追物手組之事 永正十二年二月十二日

犬追物手組之事 永正十二年二月七日

税所左衛門尉

廻兵部少輔

本田三河守「親安兼親ノ子」

嶋津塩鍋丸

本田刑部少輔「親貞後因幡守
入道「怒カ」

肝付三郎九郎「系ニハ五郎トアリ」
「以安坎」
于時十八才」

嶋津筑前守

吉田若狹守

検見

喚次

嶋津十郎左衛門尉「義久」 鎌田勘解由左衛門尉

犬追物手組之事永正十二年
潤二月三日

嶋津四郎殿 十一疋

嶋津安藝「守」 七疋

嶋津又四郎 三疋

嶋津又二郎 十疋

嶋津二郎五郎 十三疋

安樂四郎三郎 五疋

恒吉勘解由左衛門尉 七疋

本田三郎次郎 五疋

嶋津又八郎 八疋

住吉平三郎 八疋

嶋津千代安丸 八疋

嶋津七郎四郎 二疋

嶋津十郎左衛門尉「十一疋イ」嶋津源左衛門尉 三疋

検見

喚次

嶋津近江守殿

嶋津孫左衛門尉

犬追物手組之事永正十二年
潤二月四日

嶋津近江守殿 十六疋

嶋津四郎殿 十五疋

嶋津源左衛門尉 五疋

嶋津千代安丸 八疋

嶋津又四郎 五疋

安樂四郎三郎 三疋

本田三郎次郎 二疋

住吉平三郎 七疋

恒吉勘解由左衛門尉 七疋

肥後彦七 十疋

嶋津又八郎 二疋

嶋津七郎四郎 二疋

嶋津安藝守 三疋

嶋津又次郎 十三疋

検見

喚次

嶋津十郎左衛門尉「義久」

嶋津又八郎

59 「自藤野久右エ門久防被召上内」

安永ニテ

犬追物手組事

近江守殿 七疋

嶋津八郎殿 七疋

嶋津兵庫丞 十疋

嶋津源左衛門尉 十疋

嶋津左衛門尉殿 十二疋

嶋津六郎 五疋

嶋津千代若殿 十二疋

嶋津左近将監 十疋

嶋津安藝守 四疋
 羽嶋越前守 五疋
 太郎左衛門尉殿 七疋
二
七疋

検見

豊後守殿

永正十二年四月一日

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一八五九号ト同一ナリ)

犬追物手組之事 永正十二年五月廿九日

嶋津太郎左衛門尉

吉田若狭守

嶋津助六

本田三河守

税所左衛門尉

本田刑部少輔

桑波田孫六

伊地知又七

加治木刑部少輔

平田五郎左衛門尉

廻兵部少輔

肝付三郎五郎

嶋津左衛門尉

嶋津又七郎

検見

喚次

加治木筑前守

伊地知四郎左衛門尉

嶋津氏部少輔 九疋

嶋津右衛門尉 五疋

犬追物手組之事 永正十三年六月廿日

「樺山」
 「嶋津」太郎左衛門尉「廣久」 三吉田若狭守
 「イニ」
 五島津助六 七本田三河守

九税所左衛門尉

十二本田刑部少輔

十四廻兵部少輔

十三桑波田孫六

十五石井中務少輔

十六伊地知又七

十六加治木刑部少輔「忠致」

十三平田五郎左衛門尉

「志和地」
 六嶋津源左衛門尉「忠亮」

八肝付三郎五郎「兼次」

「不」
 七島津左衛門尉「忠豊」

四嶋津又七郎

検見

喚次

島津十郎左衛門尉「義久」

伊地知四郎左衛門尉

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」一八七五・一八七六号トホボ同一ナリ)

犬追物手組之事 永正十三年丙子六月七日

殿「十三代忠隆公御代初而」 廿四疋

嶋津左衛門尉 十一疋

廻兵部少輔 三

本田三河守 四

加治木筑前守 八

肝付三郎五郎 四

伊地知又七 四

加治木刑部少輔 四

犬追物手組之事永正十三年八月廿九日

殿

- 平田五郎左衛門尉 五 桑波田孫六 三
- 石井中務少輔 三 本田刑部少輔 七
- 嶋津十郎左衛門尉 四 嶋津源左衛門尉 四
- 嶋津太郎左衛門尉 六 嶋津又七郎 四
- 吉田若狹守 大寺駿河守
- 肝付又八郎 本田三河守
- 北郷左衛門尉 嶋津豊後守
- 川俣左衛門尉 肝付三郎五郎
- 伊地知又七 本田刑部少輔
- 嶋津又七郎 竹内山城守コノ内イ
- 嶋津太郎左衛門尉 吉田若狹守
- 嶋津三郎左衛門尉 嶋津近江守
- 検見 喚次

(本手組へ「旧記雜錄前編二」一八七七号ト同一ナリ、尚「正統系図」ニハ「在山田七郎右衛門久通」トアリ)

犬追物手組之事永正十三年八月廿九日

- 殿 嶋津豊後守 七疋△
- 嶋津左衛門尉^⑩ 五疋△ 嶋津四郎^⑩ 六疋△
- 肝付又八郎 五疋△ 税所左衛門尉 三疋△
- 本田三河守^⑩ 二疋△ 伊地知又七 四疋△
- 嶋津太郎左衛門尉 二疋△ 吉田若狹守 八疋△
- 嶋津三郎左衛門尉 六疋△ 嶋津近江守 五疋△
- 嶋津十郎左衛門尉「義久」 大寺駿河守
- 嶋津殿 吉田若狹守
- 廻兵部少輔 石井中務少輔
- 本田三河守 伊地知又七
- 桑波田孫六 平田五郎左衛門尉
- 喚次

(本手組へ「旧記雜錄前編二」一八八〇号トホ同同一ナリ) (疋数ハ底本ニ欠クタメ「正統系図」ニヨリ補フ)

犬追物手組之事永正十三年「本ノまゝ」

税所左衛門尉

加治木刑部少輔

嶋津左衛門尉

〔本ノまゝ〕

検見

喚次

嶋津十郎左衛門尉〔義久 道安〕

加治木筑前守

(本手組ハ「旧記雜錄前編」二一八七九号ト同一ナリ)

66

殿

犬追物手組事〔之イ〕
永正十三年
九月一日

嶋津三郎左衛門尉 四疋

嶋津太郎左衛門尉 四疋

肝付又八郎 四疋

竹田山城守〔之内イ〕
V②二疋△
(頭注)「柏幾衛上代号武田居于伊集院云、此家カ」

加治木刑部少輔 五疋

本田刑部少輔 七疋

肝付三郎五郎 五疋

嶋津又七郎 八疋

税所左衛門尉 五疋

嶋津左衛門尉 十二疋

吉田若狭守 六疋

嶋津豊後守 六疋

嶋津四郎 六疋

検見

喚次

嶋津近江守④十郎左衛門尉

平田五郎左衛門尉

(本手組ハ「旧記雜錄前編」二一八八一号ト同一ナリ)

67

犬追物手組事〔兼頭〕
永正拾三年
霜月廿日

肝付修理亮〔兼頭〕 十三疋

鹿屋民部少輔 十四疋

岸良左衛門次郎 七疋

検見崎八郎四郎 四疋

藥丸中務丞 四疋

岸良四郎兵衛尉 五疋

松崎三郎次郎 十三疋

岸良左衛門四郎 二疋

安樂七郎次郎 七疋

大野又七 二疋

肝付四郎次郎〔兼親〕 十二疋

肝付新四郎 十二疋

検見

喚次

肝付又八郎〔兼興〕殿

肝付右京進〔兼能〕

68

犬追物手組之事〔兼興〕
永正拾三年
霜月廿一日

肝付又八郎〔兼興〕殿 八疋

肝付四郎〔兼親〕二郎 十二疋

肝付新四郎 十疋

岸良左衛門二郎〔イ六〕 二疋

検見崎八郎四郎 七疋

大野又七 五疋

石崎十郎右衛門尉〔九イ〕 五疋

中村源左衛門尉 六疋

藥丸中務丞 十二疋

松崎三郎二郎 十四疋

安樂七郎二郎 六疋

岸良左衛門四郎 四疋

一御着

辰房佐渡守

一射手奉行

猿渡源左衛門

同木六

一犬放御小者

世戸口弥七

有馬与五郎

一御撥副之人数

木脇源次

比志嶋彦四郎

辰房勘解由允

池上八郎九郎

野村新左衛門

山田弥九郎

鎌田又七郎

一若殿御カインへ御当(香カ)

伊集院孫太郎

御鑑

伊地知与二郎

一御弓引目之役

市来玄蕃左衛門

本田孫六

三郎左衛門殿貴久御代始而之時役者

一御撥副

鎌田又七郎

比志嶋彦四郎

木脇源次

池之上八郎九郎

山田弥九郎

辰房勘解由左衛門

野村新左衛門

一射手奉行

猿渡源太左衛門

青山越中守

一狼藉奉行

有川三郎四郎

辻孫六

74の1

一犬放役御小者

三嶋半九郎

有馬与五郎

世戸口弥七

一犬奉行

中馬助右衛門

野崎神右衛門

御座敷かさり物

一へいし 沓對 口クハてう

二鳥式ツ 臺におくなり、

三鯛式ツ 臺におく也、

折むしろ敷上座中に柱木也、掛物なし、於鎌倉前代より如此仕来ル也、別儀有之間敷者也、

右眞本在川上志磨家、

右之通見當申候ニ付、乍鹿筆書拔奉入 御覽候、以上、

文政九年戌六月廿日 大山次助

伊地知小十郎様

75 ▽ ⑩於伊集院△

犬追物手組之事天文九年十月廿一日

三三郎左衛門尉殿▽十一疋△ 三 相模守入道殿▽九疋△

五嶋津右馬守⑩頭殿▽四疋△ 七 嶋津三郎九郎▽二疋△

九比志嶋孫太郎▽二疋△ 十 嶋津伊賀守▽三疋△

十三原次郎左衛門尉▽三疋△ 十一 税所右衛門兵衛尉▽三疋△

六嶋津尾張守▽四疋△ 八 嶋津掃部助▽三疋△

二嶋津撰津守⑩殿▽四疋△ 四 嶋津三郎次郎▽三疋△

検見 喚次

嶋津武蔵守 本田民部少輔

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」二四〇号トホボ同一ナリ) (疋数ハ底本ニ欠クタメ「正統系図」ニヨリ補フ)

76

犬追物手組之事天文九年十一月廿二日

一相模守入道⑩殿▽十四疋△ 三三郎左衛門尉殿▽廿六疋△

五嶋津右馬守⑩頭殿▽五疋△ 七 嶋津尾張守⑩殿▽九疋△

九山田弥九郎▽二疋△ 十一 本田弥次郎▽三疋△

十指宿刑部少輔▽一疋△ 十二 鎌田又七郎▽三疋△

④河 川田飛彈守 一疋△
八伊地知民部太輔

二嶋津上野入道^{④殿} 八疋△
四嶋津撰津守^{④殿} 三疋△

檢見

喚次

嶋津武藏守
嶋津十郎左衛門尉

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」二四〇一号トホボ同一ナリ)
(足數ハ底本ニ欠クタメ「正統系図」ニヨリ補フ)

77 犬追物手組之事^{天文九年十一月廿三日}

一三郎左衛門尉^{④殿} 三三疋△
三嶋津上野入道^{④殿} 五疋△

五嶋津淡路守 一疋△
七嶋津尾張守 五疋△

九嶋津三郎九郎 一疋△
十嶋津掃部助 四疋△

十一税所右衛門兵衛尉^{④大} 三疋△
十二川田飛彈守^{④河} 一疋△

十三伊地知式部太輔^{④大} 十六鎌田刑部左衛門尉^{④大} 二疋△

十四本田弥二郎^{④次} 五疋△
十二鎌田圖書助 四疋△

十六嶋津伊賀守 一疋△
八村田越前守 一疋△

十七嶋津撰津助^{④介殿} 六疋△
四嶋津右馬守^{④頭} 七疋△

檢見

喚次

嶋津武藏守
比志嶋彦三郎

(本手組ハ「旧記雜錄前編二」二四〇二号トホボ同一ナリ)
(足數ハ底本ニ欠クタメ「正統系図」ニヨリ補フ)

78 犬追物手組之事^{天文十年正月十二日}

一三郎左衛門尉「貴久」 三嶋津三郎九郎「久定」

「北郷」 五嶋津尾張守「數久」 七本田民部少輔

九税所右衛門兵衛尉 十指宿駿河守

六村田越前守「經貞」 八山田弥九郎「有信」

二嶋津右馬頭「忠將」 四嶋津十郎左衛門尉

檢見

喚次

嶋津武藏守 本田下野守

「天正二年甲戌六月十二日、嶋津河上拾郎左衛門尉經久奉傳授于 義久 公云云」

79 犬追物手組之事^{天正二年三月十七日}

一嶋津兵庫頭^{「義弘」} 十二疋 三嶋津左衛門尉^{「經久」} 十三疋

「吉利」 二嶋津下總守^{「忠澄」} 十疋 七嶋津撰津守^{「喜久」} 八疋

九本田紀伊守^{「伊集院」} 七疋 十二嶋津右衛門太夫^{「忠棟」} 八疋

十肝付三郎五郎^{「兼次」} 五疋 十三本田因幡守^{「イ」} 二疋

六三原次郎左衛門尉 一疋 八平田左近將監 八疋

二嶋津兵部太輔^{「規久」} 十一疋 四渋谷彈正忠^{「入来院」} 二疋

檢見
「殿イニ御名ナシ」
義久様

喚次
本田信濃守

80 「天正三年三月上并覽兼日記」

一十五日、如常出仕申候、此日より御犬追物にて候、

太守様御打立之時、對面所ニ而御三献参候、常之加三

献にて候、御手長ハ上原長門守・拙者兩人申候、御宮

仕ハ新納兵部左衛門尉・村田与五郎にて候、御包丁人

者市成周防介ニ而候也、御檢制來御弓臺目者川上助七、

御行騰者本田三郎五郎・同名源太、御履御鎧押④候者伊

地知藏人・同名勘解由左衛門尉にて候、御庭にて御馬

ニ被召候、惣門より御打出候也、射手之人衆ハ馬場ニ

打入被等待候、④太太守様ハ御棧敷江茂無御坐、直ニ馬

場へ御打入候、御行騰ハ虎皮与熊皮はぎ合せニ而候、

御素袍ハかちんにて候、藤の御紋にて候也、

御手組之様躰「犬追物手組之事 天正三年三月十五日」

殿「義久様、廿九疋被遊候」
「川上殿也」④介 嶋津上野守「久隅」「七疋イ」

犬追物手組之事 天正三年三月十六日

本田紀伊守「三疋イ」
「昌宗之孫也」
平田左近将監「二疋イ」

鎌田刑部左衛門尉「四疋イ」本田因幡守「四疋イ」

税所新助④介「四疋イ」
④五 平田平次郎「八疋イ」

嶋津源三郎「意釣」
「川上」
孫也「四疋イ」 山田新助「二疋」
④介

嶋津撰津守「季久」
「喜入殿也」
「番目之御舍弟」
嶋津左衛門督「歳久」
「十一疋イ」
「十三疋イ」

檢見
嶋津武藏守「經久」
喚次
「武州之嫡子也」
嶋津十郎④左衛門尉

(本手組ハ「旧記雜錄後編」七八二号トホボ同一ナリ)

御犬過候て、於御棧敷御三献にて候、御座之衆河上上

野守・金吾様・喜入撰津介・河上武州、此衆にて候、

武州へ馬・太刀被下候、それより射手之衆召出候、御

酒ニ而候、手組之様ニ、次第④指に被差出候、御三献

之次ニ、雑煮参候、御幕之役者、三原右京亮・上原太

郎五郎にて候、筆者④ハ長谷場織部佐、ぬさ振之役④ナシ

為阿弥ニ而候、御三献④之包丁人ハ、市成周防介ニ而候、

86

近衛殿御下向之時為御會尺興行、手組之次第者圖也、

太守様者殿中^(④ナシ)、輿棧敷より上覽候、琉球人棧敷者犬
 之馬場乾之角、竹墻之涯^{ニテ候、④も}廣濟寺^(④より)此棧敷^(④候)ニ而見物之、
 琉球使僧詩被作進上候、▽^{④廣濟寺}其外東雲とて洛
 陽之人ニテ候、ケ様之衆彼是十首計被廣其音候、此方
 よりハ、^(後欠)

(④ニハ犬追物手組アリ)

85

「天正三年卯月廿一日
 一此日琉球人為會尺御犬追物ニ而候御手組次第

〔別紙〕
 〔喜入〕
 鳴津撰津介 十疋
 〔川上〕
 比志嶋式部少輔 六疋
 平田左近將監 三疋
 〔枕山〕
 嶋津上野介 三疋
 嶋津兵部少輔 六疋
 檢見
 喚次
 〔義久〕^{④殿}
 修理大夫、
 嶋津伊賀掾^(④守)
 (本手組ハ「旧記雜錄後編一」八四二号トホボ同一ナリ)

犬追物手組之事 天正四年 四月十二日

嶋津圖書助 十三疋
 嶋津左衛門尉 十疋
 比志嶋式部少輔 八疋
 〔河上〕
 本田紀伊介 三疋
 〔枕山〕
 嶋津兵部少輔 七疋
 嶋津上野介 五疋
 〔佐多〕
 嶋津常陸介 三疋
 嶋津右馬助 七疋
 〔吉利〕
 嶋津下総介 七疋
 肝付三郎五郎 一疋
 〔喜入〕
 嶋津三郎四郎 九疋
 嶋津小四郎 九疋
 檢見
 喚次
 〔義久〕^{④殿}
 修理大夫、
 〔④大〕
 平田左近將監

(本手組ハ「旧記雜錄後編一」八四二号トホボ同一ナリ)

87 「本田市郎左衛門文書」

▽^④於鹿兒嶋之馬場 御祈禱犬追物之手組
 犬追物手組之事 天正五年 十一月十三日

嶋津兵庫頭 九疋
 嶋津上野介 五疋
 嶋津左衛門督 十二疋
 嶋津中務少輔 六疋
 嶋津七郎 八疋
 嶋津下総守 五疋

嶋津小四郎 十三疋

村田又八郎 三疋

嶋津彈正忠 六疋

檢見

殿

〔本手組ハ「旧記雜錄後編」一〇九三号トホボ同ナリ、尚「正統系図」ニハ「写
在田中後藤兵衛入道龍淵」トアリ〕

88 二日二番 慶長十一年 八月吉日

一家久様

五吉田治部左衛門尉

十仁禮舍人佐

九山田民部少輔

〔川上〕
六嶋津式部少輔「久國」

二嶋津大膳允「忠榮」

檢見

家久様

嶋津源三郎 五疋

嶋津右衛門太夫 六疋

嶋津撰津守 十九疋

喚次

本田因幡守

〔豊後守朝久嫡子〕
三嶋津藤次郎「久賀」

〔入来院〕
七渋谷石見守「重國」

〔頼姓〕
十嶋津長左衛門尉「久政」

〔敷根〕
十三土岐中務太輔「立頼」

〔村田〕
八菊池刑部少輔

〔吉利〕
四嶋津李右衛門尉「忠弘」

喚次

90

大追物手組之事 慶長十二年 八月廿七日

一家久様 八疋

五比志嶋宮内少輔 三疋

〔寺山〕
九嶋津善四郎 三疋

〔頼景〕
六仁禮舍人助 五疋

〔常久〕
二嶋津又吉 五疋

檢見

嶋津十郎左衛門尉「久慶」

初日二番四角之外 關次第

大追物手組之事 慶長十二年 八月廿七日

〔⑩少將殿〕
一家久様 〽⑬十三疋

〔經永〕
五菊池刑部少輔 二疋

〔清次〕
九吉田治部左衛門尉 六疋

〔忠弘〕
六嶋津李右衛門尉 三疋

〔三郎二郎忠隣子〕
三嶋津又吉「常久」 九疋

檢見

嶋津十郎左衛門尉「久慶」

〔川上〕
三嶋津式部太輔 三疋

〔親正〕
七本田弥六 三疋

〔經兼〕
十二諏訪甚六 二疋

〔久林〕
八嶋津左京亮 五疋

〔新納圖書頭忠長二男〕
四嶋津近江守「久元」 五疋

喚次

〔川上〕
嶋津雅樂助「久徳」

〔喜入撰津守季久子〕
三嶋津撰津守「忠續」 三疋

〔山田越前守有信子〕有榮
七山田民部少輔 一疋

〔久國〕
十嶋津式部少輔 六疋

〔新納圖書頭忠長二男〕
八嶋津近江守「久元」 七疋

〔佐多太郎二郎忠二男〕
四嶋津又太郎「忠光」 三疋

喚次

〔川上〕
嶋津雅樂助「久徳」

初日一番四角之外 關次第

二日二番手組

一家久様
 「新納」
 五嶋津近江守「久元」
 「豊州朝久子」
 九嶋津藤次郎「久賀」
 六伊勢平左衛門尉「貞成」
 「川上」
 二嶋津式部太輔「久國」

検見「ナシ」

「吉利下総守忠澄子」
 三嶋津左右衛門尉「忠弘」
 「川上」
 七嶋津左京亮「久林」
 十渋谷三郎四郎「重将」
 八平田新三郎
 四比志嶋宮内少輔「國隆」

喚次「ナシ」

二日二番鬪次第

犬追物手組之事慶長十三年十一月十七日

「⑩少将殿」
 一家久様 七疋
 「佐多太郎二郎久慶子」
 五嶋津又太郎「忠光」 六疋
 「政朝」
 九鎌田玄蕃助 四疋
 「寺山」
 十嶋津善四郎 六疋
 「久豊」
 六三原次郎四郎 六疋

「敷根」
 三土岐中務少輔 六疋
 七嶋津下総守「常久」 四疋
 十二菊池刑部少輔「經永」 一疋
 十三山田民部少輔「有榮」 三疋
 八渋谷石見守「重高」 四疋

二日之卷番手組

一家久様
 「北郷」
 五嶋津掃部助「久林」
 「町田」
 九嶋津勝兵衛尉「久幸」
 六村田刑部少輔「經永」
 「喜入季久子」
 二嶋津振津守「忠續」

検見

嶋津十郎左衛門尉「久慶」

「三カ」
 「圖書頭忠長長子」
 嶋津河内守「忠倍」
 「川上」
 七嶋津十郎
 「諏訪」
 十上井神六「經兼」
 「頼娃」
 八嶋津長左衛門尉「久政」
 「入来院重時子」
 四渋谷石見守「重高」

喚次

「佐多越後守忠増子」
 嶋津六郎兵衛尉

(本手組ハ「旧記雜録後編四」三九〇号トホボ同一ナリ)

二番四角之外鬪次第

犬追物手組之事慶長十三年十一月十七日

一家久様 十疋
 五渋谷周防助「重清」 四疋
 九諏訪治部少輔「經兼」 三疋
 十嶋津六郎兵衛尉「忠利」 二疋
 「川上」
 六嶋津左京亮「久林」 三疋
 「寺山」
 二嶋津善四郎「久豊」 二疋

喚次

「義弘」
 侍従入道 本田大炊太夫「元親」

「有榮」
 三山田民部少輔 六疋
 七嶋津豊後守「久賀」 四疋
 「新納」
 十嶋津近江守「忠影」 三疋
 十二相良彦次郎「長景」 一疋
 「入来院重時子」
 八渋谷石見守「重高」 六疋
 四三原次郎四郎「重庸」 六疋

〔喜入季久子〕「忠續」
嶋津撰津守 二疋

〔川上〕
四島津左京亮 一疋

檢見

喚次

〔川上〕
嶋津十郎左衛門尉「久慶」

本田大炊太夫「元親」

〔本手組ハ「旧記雜錄後編四」五「七号トホボ同」ナリ、但シ「旧記雜錄」及ビ「正統系図」ニハ疋數ナシ〕

95

犬追物手組之事 元和七年十二月四日

〔家久公〕
宰相殿 七疋

岩松殿 三疋

仁禮信濃守 三疋

肝付長三郎 一疋

三原左衛門佐 四疋

上原大藏太輔 四疋

三原彦三郎 二疋

根占七郎 一疋

本田長七郎 二疋

〔市来〕
菊池刑部少輔 一疋

〔光久公〕
虎壽殿 十疋

〔川上〕
嶋津上野守「久貞」

檢見

喚次

〔川上〕
嶋津志摩守

本田弥六

96

四日二番

犬追物手組之事 元和七年十二月四日

岩松殿 三疋

嶋津豊後守 一疋

伊勢美濃守 二疋

土岐中務少輔 七疋

嶋津刑部太輔 三疋

〔市来〕
洪谷又六 一疋

三原彦千代丸 三疋

山田弥九郎 一疋

上原大藏太輔 三疋

〔市来〕
八文字掃部助 〔二疋〕
〔佐多〕

虎壽殿 二疋

嶋津又太郎 一疋

檢見

喚次

宰相殿

〔喜入〕
嶋津大炊助

〔本手組ハ「旧記雜錄後編四」一七五六号トホボ同「ナリ」〕

97

三日三番矢鬨次第

〔市来〕
下手論犬追物手組之事 元和七年十二月五日

〔新納〕
八文字掃部助 一疋

〔北郷〕
山田弥九郎 二疋

嶋津近江守

嶋津又次郎

嶋津中務太輔

仁禮信濃守 三疋「イ」

嶋津又十郎 五疋

〔頼桂〕
本田長七郎

相良丹後守 一疋

嶋津長十郎 二疋

伊勢美濃守「貞長」

洪谷周防守

檢見

喚次

99

「上手ニ於出水相良殿参上之時日記
〔本手組ハ三二号トホボ同一ニツキ省略ス〕

〔別紙〕

宰相殿

嶋津六郎兵衛尉「忠利」

岩松殿 二疋

嶋津長十郎 五疋

三原彦千代丸

嶋津志摩守

嶋津源七 一疋

肝付長三郎

〔市来〕
八文字掃部助 一疋

嶋津豊後守 一疋

伊勢大隅守 一疋

嶋津中務太輔

〔光久公〕
虎壽殿 三疋

嶋津又太郎 一疋

犬追物手組之事元和七年十二月六日
〔イナシ〕
〔佐多〕

98

六日二番一

〔本手組ハ「旧記雜録後編四」一七五七号トホボ同一ナリ〕

〔川上〕
嶋津十郎左衛門尉「久慶」 蒲池左八郎

101

六日二番二

犬追物手組之事元和七年十二月六日
〔光久公〕
〔佐多〕

虎壽殿 一疋

嶋津又太郎 一疋

〔市来〕
伊勢大隅守「貞豊」

嶋津中務太輔

〔市来〕
八文字掃部助 二疋

嶋津豊後守 一疋

〔阿多〕
嶋津源七

肝付長三郎

三原彦千代丸 二疋

嶋津志摩守 一疋

検見

喚次

宰相殿

嶋津六郎兵衛尉

岩松殿 一疋

嶋津長十郎 一疋

三原彦千代丸 二疋

嶋津志摩守 一疋

〔阿多カ〕
嶋津源七

肝付長三郎

〔市来〕
八文字掃部介 二疋

嶋津豊後守 一疋

〔市来〕
伊勢大隅守

嶋津中務太輔

虎壽殿 一疋

嶋津又太郎 一疋

犬追物手組之事元和七年十二月六日
〔佐多〕

100

六日二番二

岩松殿 一疋

渋谷又六 一疋

「家久公」
宰相殿 検見

「佐多」
嶋津六郎兵衛尉「忠利」
喚次

五日二番矢鬮次第

次手論犬追物手組之事元和七年十月七日

「頼桂」
嶋津長十郎 四疋

「新納」
嶋津近江守 一疋

仁禮小吉 四疋

諏訪治部少輔

伊勢大隅守 二疋

「本まゝ」
土岐中務少輔 四疋

相良丹後守

嶋津下野守 二疋

嶋津又五郎 二疋「イ」

嶋津中務太輔④大

山田弥九郎 一疋

「市来」
八文字掃部助④介

検見

喚次

「川上」
嶋津十郎左衛門尉「久慶」

「池」
蒲地左八郎

〔本手組ハ「旧記雜錄後編四」一七五八号トホボ同一ナリ、尚「正統系図」ニハ「正文在市来八左衛門」トアリ〕

初日一番四角之外鬮次第

犬追物手組之事寛永廿年九月十五日

「家久公二男」
嶋津兵庫守 三疋

「忠弘」
三嶋津東市正 六疋

五吉田長四郎「為清」

「新納」
嶋津弥七郎 六疋

九渋谷周防助「重堅」

「重肅」
十三原左衛門尉 四疋

「高橋」
十田原主膳正「種有」

「經固」
十三菊地藤兵衛尉 一疋

六鎌田又七郎「政由」

「兼清」
八諏訪左右衛門尉

「佐多丹波子」
嶋津又四郎 四疋

「入来院伯耆守重園子」
四渋谷石見守「重頼」 一疋

検見

喚次

島津十郎左衛門尉「久慶」

吉田休兵衛尉「清房」

〔本手組ハ「旧記雜錄後編六」三三八号トホボ同一ナリ〕

初日二番四角之外鬮次第

犬追物手組之事寛永廿年九月十五日

「久雄」
嶋津安藝守 四疋

「川上」
嶋津左近将監 三疋

「伊集院」
五嶋津源助 二疋

「親昌」
七本田六左衛門尉 三疋

「重時」
九三原遠江守 二疋

「長貞」
十一相良新右衛門尉 一疋

「二男」
「數根中務少輔立頼」
十土岐筑前守「頼喜」 二疋「イ」

「義時」
十三比志嶋左京亮 一疋

「久行」
六嶋津内記「大野」 〽六疋

「重永」
八根占七郎 二疋

寛永廿年九月十五日犬追物張行ニ付

諸役者

(一〇四・一〇五号ハ「旧記雜録後編六」三三九号中ニアリ)

川上 嶋津因幡守 「久国」

桂 嶋津外記 「忠守」

檢見

喚次

嶋津兵庫頭 「家久公二男」 「忠平」 (一〇三) 一足

東郷若狭守 「昌重」 一足

嶋津又十郎 「忠澄」 (一〇二) 三足

嶋津左近太夫 「久守」 四足

十平田豊前守 「宗直」 (一〇二) 一足

嶋津主膳正 「久国」 五足

九本田弥五郎 「盛親」 五足

三原五郎兵衛尉 「重英」 一足

嶋津上野助 「頼元」 二足

嶋津宗次郎 「久盛」 二足

五相良土佐守 「頼元」 五足

嶋津宗次郎 「北郷」 二足

犬追物手組之事 寛永廿年九月十五日

嶋津主計頭 「久延」 二足

初日三番四角之外闕次第

禪山 嶋津又九郎 「久尚」 三足

兼屋 肝付伴兵衛尉 二足

檢見

喚次

嶋津志摩守

桂 嶋津外記

一日記 烏帽子素袍 福屋伊賀守

一幣之役 素袍 慶阿弥

一御搔添 本田半兵衛尉

一御行騰 伊地知周防介 伊地知丹波守

一御太刀持 町田源左衛門尉

一御弓褭目 平山七左衛門尉

一御沓 伊集院彦左衛門尉

一御鞭 國府仲兵衛尉

一射手奉行 土持左馬權頭 相良主税助

一犬奉行 時之殿役奉行 北條善左衛門尉 同 税所小兵衛尉

一狼藉奉行 時之兵具奉行 右松安右衛門尉 同 藤崎六郎左衛門尉

一犬懸衆 陸侍衆拾人充 三原傳左衛門尉 同 平田藤右衛門尉

一犬放 御小者衆 兒玉四郎兵衛尉

泊大右衛門尉

同 神崎清右衛門尉

同 野添對馬掾

(本手組ハ一〇二号トホホ同一ニツキ省略ス)

二日一番四角之外圖次第

犬追物手組之事 寛永廿年九月十六日

一 嶋津東市正「忠弘」五疋

「頼姪長左門尉久政子」
三 嶋津主膳正「久国」一疋

五 三原左衛門尉「重庸」七疋

七 平田豊前守「宗直」二疋

九 仁禮左近将監「景頼」一疋

十二 肝付伴兵衛尉「兼屋」三疋
「佐多」

十 相良土佐守「頼立」一疋

十三 嶋津又四郎「忠孝」二疋

「入来院重時子」
六 渋谷石見守「重頼」七疋

八 本田弥五郎「盛親」一疋

「伊集院」
三 嶋津源助「久立」二疋

四 根占七郎「重永」三疋

検見

「イ伊集院 喚次
黒葛原」

「川上」
嶋津志摩守

嶋津新兵衛尉

一番(四角之)外圖次第

犬追物手組之事 寛永廿一年三月十三日

「(殿)
光久様 廿一疋

「入来院」
三 渋谷石見守「重頼」四疋

「樺山」
五 嶋津長門守「忠重」八疋

七 嶋津東市正「忠弘」三疋

「喜入美作守忠高子」
六 嶋津主計頭「久延」▽⑤五疋△

八 東郷若狹守「昌重」四疋

「新納」
二 嶋津四郎「久辰」二疋

四 嶋津中務少輔「久」十疋

検見

喚次

嶋津志摩守

和田次郎右衛門尉「正次」

嶋津新兵衛尉

(本手組ハ「旧記雜錄後編六」三八六号ト同一ナリ)

二番(四角之外)圖次第

犬追物手組之事 寛永廿一年三月十三日

一 根占七郎「重永」六疋

三 三原左衛門尉「(佐)重庸」八疋

五 伊勢兵部少輔「貞昭」五疋

七 二階堂城之助「(介)信行」二疋

六 福屋助左衛門尉「兼全」三疋

八 和田讚岐守「正貞」四疋

「樺山」
嶋津又九郎「久尚」▽⑤三疋△

「新納」
四 嶋津弥七郎「久正」九疋

検見

喚次

嶋津十郎左衛門入道「芳安」

嶋津新兵衛尉

嶋津志摩守

(本手組ハ「旧記雜錄後編六」三八七号ト同一ナリ)

111

武藏國於江戸芝御屋敷、御老中并御旗本衆・御大名衆・高家・物頭衆致請招御興(行)之御犬追物見、

初日「上手」一番四角之外鬮次第

犬追物手組之事 正保三年丙戌 卯月七日

「川上」

一 嶋津上野助

「比志嶋」

五 村上左京亮

「義時」

三 嶋津主計頭

「久延」

一 正

七 嶋津東市正

「忠弘」

二 正

九 本田六左衛門尉

「親昌」

三 正

十 嶋津又次郎

「忠昭」

一 正

十一 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

十二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

十六 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

十八 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

二十 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

二十二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

二十四 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

二十六 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

二十八 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

三十 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

三十二 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

三十四 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

三十六 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

三十八 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

四十 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

四十二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

四十四 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

四十六 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

四十八 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

五十 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

五十二 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

五十四 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

五十六 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

五十八 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

六十 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

六十二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

六十四 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

六十六 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

六十八 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

七十 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

七十二 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

七十四 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

七十六 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

七十八 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

八十 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

八十二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

八十四 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

八十六 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

八十八 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

九十 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

九十二 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

九十四 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

九十六 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

九十八 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百零二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百零四 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百零六 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百零八 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百一十 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百一十二 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百一十四 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百一十六 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百一十八 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百二十 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百二十二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百二十四 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百二十六 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百二十八 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百三十 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百三十二 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百三十四 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百三十六 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百三十八 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百四十 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百四十二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百四十四 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百四十六 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百四十八 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百五十 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百五十二 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百五十四 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百五十六 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百五十八 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百六十 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

一百六十二 嶋津又左衛門尉

「久正」

二 正

一百六十四 嶋津又左衛門尉

「新納」

二 正

113

寛明日記卷第三十一

正保丁亥四歳至十二月

十一月

一十三日、兼日島津薩摩守光久ニ犬追物御上覽可被遊之

由被 仰出、依之内々其用意ス、已ニ今日ニ日限定シ

カハ、先頃ヨリ於武州王子村、新ニ棧敷ヲ構テ馬場ヲ

令築、此所金城ヲ去事二里程、平原廣野之地ニテ、元

112

初日二番四角之外鬮次第

犬追物手組之事 正保三年 卯月七日

一 嶋津安藝守 「久雄」 二 正

檢見

喚次

「川上」 嶋津十郎左衛門入道 「芳庵」 種子嶋為兵衛尉 「時壽」

「此時七十五歳也、寛文五年乙巳正月十八日 卒、年九十三、心了芳安居士」

来御放鷹之御狩場御殿等依有之、此所ヲ被撰、御棧敷ハ御茶亭南ニアリ、東西四十六間・南北四十一間、南向ノ中央ニ構上壇ヲ御座所トス、棧鋪ノ南隔十二間有馬場、其廣サ東西四十二間・南北四十間、四方皆以竹結埒ヲ、埒ノ高サ四尺五寸、但地ノ高下ニ依テ五尺モ有之、埒ノ中央四方十八間ニ色砂ヲ蒔、馬ヲ立處トス、是ヲ勝示ト云、其廻リヲ勝示際ト云、其中央ニ長サ十八尋餘ノ繩ヲ以テ、方四五間許ノ圍ヲス、是ヲ大繩ト云、其圍ノ中央ニ長五尋餘ノ繩ヲ以テ方一間許ノ圍ヲナス、是ヲ小繩ト云、其内ニ砂ヲ入、砂ノ満ルコト繩ト等シ、埒埒ノ乾ノ方ニ戸有、是ヲ犬塚ノロト云、巽ノ方ニ戸有、是ヲ物陰ノロト云、皆轅門ニ象也、亦南ト東ト西トノ埒ノ上ニ粧養目ノ矢ヲ求ム、一方ニ十二桁アリ、一桁コトニ四緒ニシテ四所ニ掛ハ十六筋也、十二桁ニハ合テ百九十二筋也、三方合テ矢數五百七十六筋也、是ニ一手ノ犬追物ノ矢數三手ノ内ニ上手・次手・下手ノ名アリ、又埒ノ外良ノ方ニ副テ假役所ヲ構、日記ノ者ノ座トス、右大將家ノ舊禮ハ御座ノ次ノ席ニ

テ、日記ヲ沙スルコト古法也ト云モ、此度ハ御座近ヲ憚テ、光久新タニ此役所ヲ構ヘタリ、役所ノ内ニ器物一對ヲ双置、金銀ノ薄ヲ以濃、其上ニ青黄赤白黒ノ餅ヲ二重ニ高ク盛、一重コトニ幾等モ包、重テ作花ヲサシハサム、其下ニ五色ノ案ヲ備フ、其器ノ縁ヲ金紙ヲ以テ粧タリ、又木ヲ以瓶子一雙ヲ作設ク、是モ金銀ノ薄ヲ以濃、松ト鶴ヲ畫、蝶花形ヲ以其口ヲ包、但酒ヲ盛ニ不及、此外硯紙并二幣等ヲ此内ニ納置、此役所ノ前ニシテ、勝示ノ埒ニ又一ノ戸アリ、是ハ貴人出入ノ為ニ設ル口也、今日ハ開ニ不及、又埒ノ外西南ノ方ニ假屋ヲカマウ、是ハ装束ヲ調ル所也、巳ノ刻公方様御着、御棧鋪ノ上壇ニ入御、中根壹岐守正盛・牧野佐渡守親成・久世大和守廣之巳下近習并ニ小臣等伺候ス、御座ノ次ノ西ノ間ニ水戸中納言頼房卿・尾張宰相光義卿・紀伊宰相光貞卿・水戸中将光國卿之座トス、其次ニハ彦根中将直孝井伊掃部頭・若狭少将忠勝酒井謙高松侍從頼重京大夫・厩橋侍從忠清酒井雅樂頭・河越侍從信綱松平伊豆守・從四位下豊後守忠秋・永井信濃守尚政・朽

木民部少輔植綱等列座ス、其次ハ井伊靱負佐直茲・小笠原右近太夫忠貞(真)・松平美作守忠昌・本多内記政勝、其外御普代(譜)ノ御家人衆列參ス、西ノ方南ノ端ノ棧鋪ニハ越後少将光長松平越後守・長門少将秀就毛利長門守・備前少将光政松平新太郎・毛利宰相秀元毛利甲斐守・越前侍從光通松平越前守・因幡侍從光仲松平相模守・出羽雲州侍從直政松平出羽守・阿波侍從忠史(英)蜂須賀阿波守・土佐侍從忠義松平土佐守・肥前侍從勝茂(鍋島信濃守)・安藝侍從光晟松平安藝守・伊賀侍從高次藤堂大學頭・肥後侍從光尚(細川肥後守)・美作侍從長繼(森内)・松平刑部太輔頼元・同播磨守頼安・松平淡路守利次・織田出雲守信友・毛利和泉守光廣・立花左近将監忠茂・京極山城守忠國(高)・有馬中務大輔忠郷・黒田右衛門佐長之等大名列座ス、薩广守ハ其座ノ寶子ニ蹲踞ス、御座ノ東ノ方ハ旗本ノ歴々、其外諸役人等充満ス、座上ニハ大番衆并御歩行衆各誓固ス、依仰掃部頭・讃岐守・雅樂頭・伊豆守・豊後守等ノ老臣、御前ニ参リ、御座ノ西ノ障子ヲ開ク、水戸・尾張・紀伊ノ四卿有御礼、次ニ薩广守ヲ召ス、今日天氣快晴、年来ノ本望相叶、可為満足ト被 仰出、薩广

守拜伏シ畏ヲ申シ、御樽五荷・杉重三重・鮮魚五尾・折櫃物十台進上之、子息又三郎久平同御目見、御樽三荷・杉重二組・鯉魚五喉進献ス、厩橋侍從披露ス、犬追物可始被 仰出、薩广守奉テ本座ニ皈ル、次ニ諸大名并御譜代ノ御家人等已下有御目見、則障子ヲサス、依レ仰小笠原右近大夫ヲ御前ニ召ス、河越侍從奉テ召連、自東方縁出御前、是ハ累代弓馬之故實相傳ノ家ナレハ、御見物之間御物語可被為成之為ナルヘシ、近臣進テ御前ノ御簾ヲ揚ケ、阿部五郎三郎正義役ニ御腰物、日記之役者烏帽子素袍ヲ着、短刀ヲ指タル男、埒役所ヘ登ル、其次ニ白綾ノ衣服之上ニ童直衣(水干ニ似タリ)、ヲ着シ、末廣ノ扇ヲ持、其髪ヲ垂下、金薄ノハネ本結ヲ以テ結之、薄假粧ニ齒黒ク(肩カ)負作タル童子二人相従フ、是等ハ幣振ノ役人也、射手奉行二人烏帽子素袍・短刀ニテ、西南ノ戸外ニ徘徊ス、勇士四人同シ装束、二人宛相分レ、巽ト坤ノ戸ノ邊ニ立居、歩卒一人宛袴ニ上衣着テ相従フ、竹杖突タル者八人烏帽子小素袍・短刀ニテ、二人宛埒ノ間事也四方ノ隅ニ分居、是ヲ犬掛之

者ト云、此外同シ装束ニテ五人坤ノ戸ノ内ニ居、是ヲ犬放ノ者ト云、但此五人ハ小素袍之袖ヲ手纏ニ掛、背ニテ挾結フ、又綾ノ筋織タル衣服ニ素袍ノ袖取テ小袴着タル者二人坤ノ戸ノ外ニ居、犬下知ノ者ト云、輕卒八人半服ニ袴着テ相従フ、是ヲ犬牽ノ者ト云、此外埒ノ外西面ノ方ノ假屋ヨリ三手ノ射手三十六騎靜々ト進出、其裝束烏帽子ヲ被、染物ノ下襲ノ上ニ素袍ヲ着シ、短刀ヲ指、左ノ肩脱、弓小手ヲ付、弓ヲ持、曇目ノ矢一筋ヲ取副、又腰ニモ是ヲ差、或二筋或ハ三筋也、右ノ手ニ竹ノ根ノ鞭ヲ結付腕ニ掛持、左右ノ股ニハ鹿皮ノ行纏ヲ付、其緒ヲ腰ニテ結ヒ、足ニ沓ヲ履、或ハ行纏ノ左右ヘ総角ヲ付タルアリ、又不付モアリ、弓ハ滋藤ニ所藤、矢ハ鷲ノ羽或ハ鷹ノ羽、其藝ノ工拙ニ依テ差アリト云リ、馬ノ毛モ差々アリ、皆鬣ニテ紅ノ大総ヲ掛タリ、或ハ金絲ヲ交タルモ有、是ハ皆島津カ一族タリ、郎等ハ皆小總ノ鞆ヲ掛タリ、思々ノ鞍ヲ置、手綱ハ定タル古法ノ尺有口傳、射手ノ短刀ハ御前ヲ憚テ、外ノ拵柄鞘モ如常ニシテ、身ハ木ヲ以テ作、其餘

ノ役人短刀モ皆然リ、三十六騎ノ者モ十二騎宛南ト西ト東トノ埒ノ外ニ並立、此外檢見一人・喚次一人騎馬ニテ相加ル、檢見ハ法師武者赤頭巾ヲ被、或ハ又燕尾帽子ヲモ用、但有髮ノ者ハ各別ナレハ、素袍ヲ着シ短刀ヲ帶、末廣ヲ挾黒塗ノ鞭ヲ指、淺黄ノ厚總ノ鞆ヲ掛、喚次ハ烏帽子素袍ヲ着シ短刀ヲ指、竹ノ根ノ鞭ヲ持、兩人トモニ弓矢ヲ不帶、檢見埒ノ外ニ下馬シ、徒步ニテ巽ノ戸ヨリ埒ノ内ニ入、勝示際ニ至リ北面シテ跪、御前ニ向テ禮拜ス、此時埒ノ外ノ三十六騎喚次モ皆下馬ス、檢見埒ノ外ヘ出テ馬ニ乘、三十六騎并喚次モ騎馬シ、巽ト坤トノ二ノ戸ヨリ十八騎宛相分レ、埒ノ内ニ入テ十二騎宛南ト東ト西ト相分レテ立、南ヲ上手トシ、西ヲ次手トシ、東ヲ下手トシ、檢見・喚次巽ノ戸ヨリ入、凡一騎毎ニ矢取ノ介副一人宛、烏帽子小素袍・短刀ニテ相従フ、檢見・喚次ニハ籠一人宛有之、其裝束同前、檢見馬ヲ進ム、南ノ方ノ上手十二騎相従フ、其馬立ノ次第、一番二番ヲ相手トス、大繩ノ廻リ北ノ端ニアリ、三番四番ヲ相手トス、大繩ノ廻リ南ノ端ニ

立、五番六番ヲ相手トス、一番二番ノ南ニアリ、七番八番ヲ相手トス、三番四番ノ北ニ立、一番三番五番七番九番十一番ノ騎ハ馬ノ頭ヲ西ニ向フ、皆大繩ノ廻リニ並立、喚次ハ馬ヲ日記ノ役所ノ東ニ扣タリ、檢見ハ勝示際ニテ誰カ有ト喚、口付ノ者候ト答テ馬ノ口ヲ取、檢見下馬シ小繩際ニテ北面シ呪文ヲ唱口傳、此時十二騎并ニ東西ニ立二十四騎皆下馬ス、檢見立飯り馬ニ乗ル、大繩ノ内ヘ入、十二騎并二十四騎皆乘馬ス、此時犬下知ノ者兼テ相圖シ、犬牽ノ輕卒埒ノ外ヨリ犬共繩ヲ以縊リ、坤ノ戸ノ邊ニ置、檢見馬上ニテ鞭ヲ拔持、御犬ヤ有ト云、犬放ノ者候ト答時、二十二騎馬ノ頭ヲ立直シ、大繩ニ副矢ヲ番、檢見御犬引入ヨト云、犬放ノ者候ト答テ、犬二疋ヲ小繩ノ内ヘ引入、御犬迦候ト、三返唱、檢見早放シ候ヘト云、犬放ノ者鎌ヲ以索ヲ切、犬ヲ放ツ、此犬ハ射ニ不及、是故實也トゾ、射手皆矢ヲ迦、檢見重テ御犬ヤ有ト云、犬放ノ者答、射手皆矢ヲ番、檢見御犬牽入ヨト云、犬放ノ者犬一疋ヲ小繩ノ内ニ牽入、毎度ニ皆然リ、又嚮ノ如ク御犬逃候ト三反

唱、檢見早放セト云、時ニ則索ヲ切、犬ヲ放ツ、十二騎ノ者矢比次第ニ矢ヲ放テ射之、其矢中者馬ヲ步セ出ス作法アリ、檢見モ亦馬ヲ步セ出シテ矢答ヘ有、射手如元馬ヲ大繩ノ際ニ立、檢見馬ヲ進、勝示際ニ出レハ、喚次ノ者馳來、檢見ニ其射手ノ姓名ヲ告、喚次役所ノ前ニ至リ、馬ヨリ下、其氏其名ヲ喚フ、童子應諾之幣ヲ振、幣一本ヲ以テ兩童替々勤之也、執筆ノ者則記之、書記スル法故實有之、喚次馬ニ乘、元ノ所ヘ飯ル、檢見如元大繩ノ内ニ馬ヲ立、又御犬ヤト云、時ニ他ノ犬ヲ牽テ來、先ノ如ク次第有テ犬ヲ放ツ、十二騎矢皆次第ヲ追テ射之、其作法同前、中ル時ハ檢見又喚次ニ告テ聞シム、第二度ヨリ以後ハ喚次下馬ニ不及、役所ノ前ニ向ヒ馬ヲ扣、皆潛テ其射手ノ名ヲ唱筆記サセシム、但初度ノ時重テハ下馬ニ不及ト下知スル、其次ノ犬如前射之、其儀式異事ナシ、第三度之犬迄ハ勝示ノ内ニテ射之、中テモ迦テモ犬外ヘ出レハ追ニ不及、第四度ノ犬ヲ外ノ犬ト號テ、勝示ノ内ニテ矢中ト云モ、勝示ノ外ヘ追出ルヲハ檢見射手置ト云、四騎皆替々馳テ射之、毎度八騎ハ大繩ノ廻リ

ニ並立テ、其馬左右へ前却シ四騎ノ来路ヲ避、東西ニ相向ヒ立、次手・下手廿四騎、若其邊へ馳来レハ其心得有ト云、檢見毎度馳廻リ、犬ハ矢頃ヲ遁ヌト、或時ハ四隅ニ蹠、或時ハ埒ノ竹ニ寄添、或ハ又馬ノ腹ノ下へ逃入、犬掛ノ者竹杖ヲ以テ追之、埒ノ内ヲ四方堅横ニ追テ射之、介副各步行ニテ相從ヒ、落ル矢ヲ取授、其矢所繩際マテ弓手妻手月影ノ矢押戻等ノ射様ノ名有之、外ノ犬ニナレハ、弓手番妻手横物袖返等ノ名アリ、檢見其矢答ニ付其實否ヲ定、矢中ト云トモ檢見ノ心ニ不叶ハ射手置ト唱、又追廻リ數反ニ及ンテ不中犬疲時ハ、檢見犬檢ヨト云テ不令射之、其射畢テ犬トモヲハ大掛ノ者巽ノ戸ヨリ外へ出ス、又別犬ヲ呼テ射之、矢所能中、檢見ノ心ニ叶フ時ハ、喚次ニ告テ其名ヲ記サシム、若檢見ノ見所、射手ノ心ニ同カラサル時ハ、聞難ニ及事アリ、都テ七度ニ及ンテ終ル、此七度ノ内ニ落馬スル者一人有之、其儘起立テ沓ヲ脱、手ニ持捧テ謝ス、其相手又馬ヨリ下沓ヲ脱、手ニ捧テ相揖シテ後人同ク馬ニ乗、是落馬ノ上ノ手組犬七疋放之、其手組ハ

鬪ニテ定之、射手十二騎也、第三度ノ射手ハ下手組、犬七疋ヲ放テ射之、前方下手ノ十二騎ハ南ヨリ大繩ノ邊へ進、時ニ西ノ方ノ上手十二騎坤ノ方ヲ通南へ移リ、東ノ方ノ次手十二騎ハ巽ノ方ヨリ南ノ上手ノ後ヲ通、西ニ廻リ並フ、此ニ至テ下手十二騎射畢テ東ノ方ニ立、三手トモニ皆如此、初ノ檢見勝際ニ於テ御前ニ向ヒ退ク、巽之辺ニシテ下馬シ、三方ニ立ツ三十六騎モ皆弓ヲ杖ニ突下馬シ、沓ヲ脱、右ノ手ニ持ナカラ行騰ヲ引返シ、沓ヲ取添持之、左ノ行騰ハ弓ニ取副持之也、喚次モ同下馬ス、東ノ十二騎并ニ檢見・喚次巽ノ戸ヨリ相分レ出、皆其初入シ時ノ式ノ如シ、介副・櫛等馬ヲ牽、二之戸ヨリ同ク從ヒ出、已上三手之犬追物也、於是御簾ヲ下ス、小笠原右近太夫御次ノ間ニ退ク、其後薩戸守ヲ召テ、今一手組射サセヨト有御所望、畏テ本座ニ皈ル、御簾ヲ揚、又西南ノ方ノ假屋ヨリ十二騎進出、喚次・檢見相加ル、其裝束皆同前、南ノ埒ノ外ニ暫ク馬ヲ立雙、其内六騎ト檢見・喚次ハ巽ノ戸ヨリ埒ノ内ニ入、六騎ハ坤ノ戸ヨリ入、各南ノ方ニ並立、

檢見馬ヲ榜示際ニ進メ扣、十二騎馬ヲ静タト步セ、次
 第二大繩ノ廻リニ進寄、相手ノ次第同前、喚次ハ日記
 之役所ノ東ニア、其後犬ヲ喚出シ馳追テ射之、其儀式
 初三組ノ如シ、但十度ニ及ヒ終ル、其上第一度外ノ犬
 トス、四騎替々射之、初ノ三組ノ間ハ御前ヲ憚リ、御
 座ノ前場近所ヲ過ル時ハ、矢比ニ及ンテモ矢ヲ不放シ
 テ射ルコト無カリシ、此度ハ依御所望御免ヲ蒙リ、御
 目通計ヲ恐テ、其外ハ矢比次第放射、故ニ中リ矢多シ、
 馬ノ馳様、犬追物足鹿子足ノ故實、馬上ニシテ様々ノ
 射様目ヲ驚ス、射畢テ各下馬之礼如前、六騎ト檢見・
 喚次巽之戸ヨリ退出ス、殘六騎ハ坤ノ戸ヨリ退出ス、
 其儀式皆初ノ如シ、射手組犬十四匹ヲ放ツ、事畢テ日記
 ノ役人并ニ幣振ノ童子退出ス、已ニ申刻ニ及フ、近臣
 御簾ヲ下ス、御座ノ西ノ戸ヲ開ク、水戸・尾張・紀伊
 之四卿ニ御面謁、今日ノ見物ノ儀ヲ皆謝シ被仰、大名
 等不殘拜禮ス、犬追物ノ間モ御棧敷ニシテ饗應有之、
 唯今マテ駄駒ヲ献ス、御饗應過テ薩广守ヲ召ス、老中
 伺候ス、御盃ヲ薩广守ニ被下、頂戴ノ後御着ヲ賜ル、

讚岐守承リ御太刀ヲ被下、薩广守頂戴シテ退ク、御劔
 ヲ又献上ス、雅樂頭取之テ御披露ス、次ニ御盃ヲ又三
 郎ニ被下頂戴シ、御太刀ヲ賜リ拜領シテ退ク、又御劔
 ヲ献上ス、雅樂頭取之御前ニ献ス、其後兩人拜謝シテ
 退出ス、誠ニ薩厂家ノ面目ト謂ヘシ、其後 還御、諸
 大名モ各飯宿ス、

今日御留守之間御番衆

一御本丸ハ榊原式部太輔忠次 一大手御門ハ松平越中守
 定綱

一櫻田御門ハ内藤帶刀忠興 一西ノ御丸ハ松平丹波守光
 重

一二ノ丸東照宮ハ稻葉美濃守正則 一紅葉山東照宮ハ水
 野監物忠善 松平若狹守康信

右ノ外御門口々兼日ヨリ警固之大名自身人數ヲ引卒シ
 テ警固ス、老中ニハ皆供奉セラル、

一十四日、島津薩广守息又三郎其外一族家人随召登城ス、
 公方様御白書院ニ出御、上禮ニ御着座、大老執事近臣
 等伺候ス、薩广守御礼御太刀献上、
太刀定并御馬鞍置・利作

白銀二百枚・呉服三十領、太刀折紙雅樂頭披露ス、犬

追物備 上覽恐悦奉存之由讚岐守被言上、次ニ息又三

郎御禮白銀百枚・猩々緋十間ヲ献上、太刀折紙ハ雅樂

頭披露ス、讚岐守御札ノ儀言上ス、次ニ島津家人者

御目見有之、其輩者ハ所謂

家老 島津圖書久通 同断 新納右エ門久詮

島津安藝久雄

薩广守舎弟同市正忠弘 同断 同源介久立

同断 鎌田又七郎政由 同断 伊勢兵部貞照^(明)

同断^(大)

又三郎家老町田勘解由久則 薩广守家人鎌田源左エ門政有

右九人一同ニ闕ノ外ニシテ御目見申上退ク、次ニ御障

子ヲ開ク、下壇ニ出御、此度ノ射手役者トモニ四十一

人御次ノ間ニ並居テ一列ニ御目見、於是入御シ給フ、

其後松平伊豆守・阿部豊後守柳ノ間ニ出テ着座、奏者

番等相從之、時ニ薩广守カ家老并舎弟、其外射手役人

凡五十人、悉ク呼出之、呉服令頂戴、或ハ六領或四領

或三領、其人ニ依テ差アリ、其後皆退出ス、

十二月

一二日、大納言様ニノ御丸御殿上壇ニ御着座、掃部頭・

雅樂頭・伊豆守・豊後守・和泉守・酒井日向守已下伺

候ス、島津薩广守出仕、御札申上、進上ス御太刀長光・

御馬鞍置・白銀百枚・猩々緋十間、太刀折紙ハ酒井日

向守忠能披露ス、今度犬追物備 將軍家之御上覽恐悦

奉存申、老中衆言上ス、薩广守御次ノ間へ退ク、次ニ

又三郎御目見、進上御太刀・馬代黄金一枚・呉服十領

ヲ、太刀折紙披露同前、老中衆挨拶ス、御次ノ間ニ退

ク、次ニ召薩广守、御手御熨斗ヲ被下、頂戴ノ時御腰

物則光拜領、日向守取次之、拜受而退ク、進上御腰物

光^吉、日向守披露シテ後薩广守退去、次召又三郎、御手

熨斗ヲ被下、頂戴シテ退ク、御脇指ヲ被下兼光、日向

守持之授ク、拜領ノ後献上御脇指安吉、日向守請取扱

露ス、又三郎退出ス、次ニ御障子ヲ開、下壇^(壇)ニ下給フ、

薩广守家老舎弟ノ九人、闕ノ外ニテ一列ニ御目見、并

射手役人等四十一人並居テ同御目見、已後入御、次ニ

薩广守家老舎弟已下五十人ニハ呉服被下事、或二領或

三領有差別、松平和泉守乘壽等沙汰之事、畢テ各退出

ス、

(本文書ハ「日記雜錄追録一」一八三号文書トホボ同文ナリ)

114

犬追物記

羅山子撰

正保萬年之三年四月七日、薩州太守嶋津氏、招衆閣老於芝別墅觀犬追物、其儀設閣老席於南面、而庭上艾竹構埒以為防、其高可五六尺、東西五十步・南北四十步、其內為射場、張繩於其外如綿叢、其中央築土為圓圍、圍廣可四五步、其圍內築小埕、北埕上挾矢四十四束、每束乘矢、坤隅巽隅設二戸、以象轅門、良隅立假廐二人居焉、一人觀紙一人持鷹、持竹枝者八人分居四隅、凡防內宿視條、今晨閣老來時、太守出迎、而延之於堂有饗禮、海錯陸毛盛膳羹定賓主猷酬、散樂謠曲卒而衆賓入茶寮、遊後園登高臨池、以賞佳境之景也、然後升堂就席、於是騎馬者十二人出自西埕後斜向南埕外、相並北向而東西相分、六騎自坤隅戸、六自巽隅戸皆入場內、相並於南以面北、皆着烏帽服單袍、帶短刀彊杵其指措、二

(別紙)

「矢於腰間、左手執弓、右手持兩箭、以鏑為鏃、以木作而不統、雖袒其右袖、足纏行騰、以絹帛蒙馬背、以彩總中犬不傷、大總以別之、其餘裝具皆尽美、又檢者垂之、以及馬腹、隊頭者用紅、、

一人、俗謂之檢見、持朴、喚者一人、俗謂之喚次、共不带弓箭、

乘馬入自巽隅、相共向、南、凡十四人、皆有礮者一人、

各相副焉、既而十二騎及檢者、進馬軌塵候蹄、環其圍

外、喚者扣馬於假廐左、檢者獨馳入圍內、立小埕傍、

顧望呼曰、犬在乎、坤隅持枝者對曰、在焉、乃開戸、

牽一犬到埕、示檢者、以鎌斬其索、以放之、檢者曰、

犬跳焉、騎者四人拔其群、馳驅追射之、其圍內埕間自

西自東自北自南無不奔走、吠々唁々、或蹲伏四隅、攀

抱埕竹、或匿馬腹下、欲以免轂、則以竹杖毆之逐之、

其警控縱送進退周旋、可以觀焉、檢者走馬巡視、揚朴

指揮之、及矢中犬、而四人馬駐頽焉、檢者進到假廐邊、

時喚者馳迎之、檢者告之以其射犬者姓名并其矢中處、

喚者到假廐、下馬高呼曰、誰某矢中某犬處、或隅、或背、或離、或脾、

或離、或脾、乃筆記之、豫記十二騎名、至是加一点於其差而辨左右、名傍、以為其證、每回皆然、且揚

廳示之、第二回已後、喚次不
下馬、徑至告之、此間八騎、雖在圍邊、屢左右
其馬以避四騎之來路、至是四騎到圍邊、檢見入圍内、
如初牽一犬來放之、他四騎射之、其第三回之犬者、又
他四騎射之、其儀一是如初、第四回以下、凡每一犬出
場、十二騎内四騎相替、其序亦如初、及十五回而罷、
謂之一番也、犬十五頭中矢者十一頭、其四者幸免焉、
蓋馳逐數回而不及殿、則檢者監察以不射之、所謂過防
弗逐不從奔者乎、儀畢、十二騎及檢者・喚者共倚南埒、
而北面皆下馬、相揖鋪皮(後欠)

- 真犬追物手組但關次第
 - 一 禪山又九郎久尚養子 正保四年丁亥十一月十三日 日武藏於王子 御上覽
 - 二 嶋津諸右衛門尉「久廣」中矢
 - 三 鎌田又七郎殿「政由」
 - 四 本東郷昌重ナリ
 - 五 本田甚兵衛尉「盛親」〔藏方〕
 - 六 上井采女(正)「兼延」(◎ナシ)
 - 七 吉田長四郎「為清」〔士〕
 - 八 本田久左衛門尉(◎休)
 - 九 嶋津又右衛門尉(◎休)
 - 十 嶋津助左衛門尉「兼全」中矢
 - 十一 六福屋助左衛門尉一ツ
 - 十二 八肝付伴兵衛尉「兼屋」(◎送)
 - 十三 二嶋津四郎左衛門尉一ツ
 - 十四 種子嶋為兵衛尉一ツ
 - 十五 四種子嶋為兵衛尉一ツ

檢見
 嶋津十郎左衛門尉「久慶」(◎秀應)
 嶋津源右衛門尉
 執筆 福屋伊賀
 幣之役 福崎新三郎
 喚次

- 真犬追物手組但關次第正保四年丁亥十一月十三日
 - 一 嶋津東市正殿「忠弘」〔イ〕「イ犬七疋」〔伊集院〕「久立」
 - 二 嶋津源助一ツ「忠弘」〔伊集院〕「久立」
 - 三 嶋津源助一ツ「忠弘」〔伊集院〕「久立」
 - 四 嶋津七兵衛尉「忠昭」〔伊集院〕「久立」
 - 五 嶋津七兵衛尉「忠昭」〔伊集院〕「久立」
 - 六 九本田六左衛門尉「親昌カ」〔伊集院〕「久立」
 - 七 十仁禮左近(將監)「景頼」〔伊集院〕「久立」
 - 八 嶋津長門(守)「忠重」〔伊集院〕「久立」
 - 九 嶋津中務(少輔)「久茂」〔伊集院〕「久立」
 - 十 嶋津中務(少輔)「久茂」〔伊集院〕「久立」

喚次
 嶋津又左衛門尉「久正」四疋
 嶋津左太夫「久宣」〔川上〕
 執筆幣之役右同人
 真犬追物手組但關次第正保四年丁亥十一月十三日

- 一 嶋津安藝守一ツ「嶋津主計」(◎ナシ)
- 二 五平田兵十郎「イナシ」七 柏原弥太右衛門尉

〔北条〕
九種子嶋次郎右衛門〔尉〕中矢「イナシ」
「イ六」

十嶋津縫殿〔助〕中矢
「イ七」
十三本田右衛門〔尉〕

六嶋津又次郎
「イ八」(上野)
「イナシ」ハ菊地太右衛門〔尉〕

二嶋津下野助
「イ四」
四伊勢兵部少輔

検見

喚次

〔新納〕
嶋津又左衛門〔尉〕

〔芳庵二男〕
嶋津左太夫「久宣」
◎佐

執筆幣之役右同人

右之手組くじとりにて一立相濟、射手木屋迄被為引取候
處ニ追付御乞犬有之、

(一五号カラ一七号ハ「旧記雜錄追録」一七〇・一八二号中ニアリ)

御乞犬手組 犬十疋

嶋津東市正殿 中矢
一ツ

伊勢兵部殿「一疋」

種子嶋伊兵衛尉 中矢
一ツ

嶋津七兵衛尉 中矢
一ツ

嶋津主計 中矢
二ツ

村上左京

福屋助左衛門〔尉〕中矢一ツ

村上内記

嶋津上野

嶋津又右衛門〔尉〕中矢
一ツ

種子嶋次郎右衛門〔尉〕中矢
嶋津安藝守殿

検見 嶋津又左衛門〔尉〕
喚次 吉田休兵衛尉

執筆 福屋伊賀 幣之役 税所弥吉

右御乞犬殊外大出来仕 公方様御感不斜候、

射手奉行

新納刑部

伊東二右衛門〔尉〕

射手支度衆

伊集院堅吉

右松五右衛門

有川十右衛門〔尉〕

有川早之允

吉田喜兵衛尉

畠山主水佐

鎌田次右衛門〔尉〕

三原九兵衛尉

伊勢早左衛門〔尉〕

野村右馬

有馬郷兵衛尉

猿渡堅介

酒匂利左衛門〔尉〕

伊東元右衛門尉

三嶋林右衛門〔尉〕

本田九左衛門〔尉〕

木場猿右衛門〔尉〕

東郷六左衛門〔尉〕

伊集院弥左衛門〔尉〕

入部五右衛門〔尉〕

平瀬如兵衛

伊地知志賀

射手道具取喫役人

坂元少右衛門〔尉〕

木村平右衛門〔尉〕

射手木屋ニ而馬立〔立〕様下知衆

肝付彦兵衛尉 永山友右衛門〔尉〕

犬かき両口犬指引衆

三原内膳 川野弥太夫 弟子丸市之介

堀之内仲右衛門〔尉〕

犬かけ衆

加治木曾藤兵衛尉 丸野嶺右衛門〔尉〕津留六右衛門

長田弥左衛門 林仲之丞 堀之内造酒丞

中馬喜角 池田五角

犬放衆

泊太左衛門 隈元与右衛門 神崎清右衛門

野添對馬 羽山五左衛門

犬奉行

二見二左衛門 酒匂右馬介

御目見得并御小袖拜領手くたり

嶋津圖書 新納右衛門 嶋津安藝守殿 嶋津東市正殿

嶋津源介殿 鎌田又七郎殿 伊勢兵部殿

如此罷出、其後小袖三重ツ、拜領、

町田勘解由 鎌田源左衛門〔尉〕 嶋津上野

嶋津中務 嶋津四郎左衛門〔尉〕 嶋津矢一郎

嶋津諸右衛門 嶋津作左衛門 嶋津主計

嶋津又左衛門〔尉〕嶋津芳庵 嶋津助六

入来院石見 肝付半兵衛 山田弥九郎

本田六左衛門〔尉〕吉田長四郎 村上内記

菊池太右衛門

如此罷出、其後御小袖二重ツ、拜領、

新納刑部 伊東二右衛門 嶋津長門

嶋津縫殿 嶋津又次郎 嶋津源右衛門

嶋津佐太夫 嶋津又右衛門 嶋津七兵衛

村上左京 仁禮左近 柏原弥太右衛門

平田平十郎 上井采女 本田甚兵衛

本田久左衛門〔尉〕本田右衛門 種子嶋二郎右衛門

種子嶋伊兵衛 吉田休兵衛 福屋伊賀

福屋助左衛門 税所弥吉 福崎新三郎

如此罷出、其後御小袖三ツ、拜領、

(本文書ハ「旧記雑録追録」一八二号文書中ニアリ)

初日一番四角之外圖次第

犬追物^{④御}手組之事^{慶安元年戊子}九月廿六日^⑤戊子^⑥△

一光久様^{⑧殿} 六疋
三嶋津又十郎 一疋

五入来院石見守 一疋
七吉田休兵衛尉^{⑨久} 一疋

九三原遠江守 一疋
土村上内記^{⑩ナシ} 二疋

十嶋津又左衛門尉 五疋
十二吉田次郎兵衛尉 一疋

十一嶋津中務少輔 三疋
八山田弥九郎 三疋

川上^⑪ 一疋
三嶋津下野守^{⑫介} 二疋
四嶋津四郎左衛門尉^⑬ 一疋

檢見 喚次

嶋津圖書頭 蒲池新助^{⑭介}

初日二番四角之外圖次第

犬追物手組之事^{慶安元年戊子}九月廿六日^⑮戊子^⑯△

一嶋津大膳亮 二疋
三嶋津主計頭 三疋

五鎌田源五郎 一疋
七種子嶋為兵衛尉^{⑰時壽} 一疋

九種子嶋次郎右衛門尉^{⑱時貞} 四疋
十二仁禮左近将監^{⑲景頼} 一疋

十嶋津七兵衛尉^{⑳忠福} 四疋
十二嶋津助六^㉑ 一疋

六嶋津縫殿助 一疋
八菊池大右衛門尉^㉒ 一疋

二嶋津安藝守^{㉓久雄} 四疋

檢見 喚次

嶋津圖書頭 嶋津仲次郎

初日三番四角之外圖次第

犬追物手組之事^{慶安元年}九月廿六日^㉔戊子^㉕△

川上^㉖ 一疋
三嶋津上野助^{㉗久連} 二疋
七本田甚兵衛尉^{㉘盛親} 二疋

五本田六左衛門尉^{㉙親昌} 三疋
九嶋津又右衛門尉^㉚ 二疋
十一伊勢兵部少輔^{㉛貞昭} 四疋

十一上井采女正^{㉜兼延} 一疋
十二平田兵拾郎^㉝ 二疋

六嶋津長門守^{㉞樺山} 一疋
八肝付伴兵衛尉 一疋

二嶋津東市正^{㉟忠弘} 三疋
四嶋津諸右衛門尉^{㊱樺山} 二疋

檢見 喚次

嶋津又左衛門尉^{㊲新納} 一疋
岩切雅樂助

初日四番四角之外圖次第

犬追物手組之事^{慶安元年}九月廿六日^㊳戊子^㊴△

一嶋津圖書頭 三疋
三嶋津作左衛門尉 三疋

122

121

五 嶋津東市正 五疋

九 柏原弥太右衛門尉 一疋

十二 階堂城之助 ⑩二疋 △

六 本田休左衛門尉 ⑩一疋 △

二 嶋津又十郎 ⑩二疋 △

檢見

嶋津又左衛門尉

七 鎌田又七郎 一疋

十 本田右衛門尉 ⑩一疋

十一 嶋津市郎 ⑩二疋

八 福屋助左衛門尉 二疋

四 嶋津主計助 ⑩二疋

喚次

嶋津十郎

二日四角之外圖次第

犬追物手組之事 上手 慶安元年九月廿七日

一 嶋津安藝守 一疋

五 嶋津又右衛門尉 一疋

九 二階堂城之助 ⑩三疋

十 嶋津又左衛門尉 ⑩三疋

六 仁禮左近將監

二 嶋津弥市郎 一疋

檢見

光久様

二日四角之外圖次第

犬追物手組之事 慶安元年九月廿七日

▽ ⑩次手 △

一 嶋津東市正 四疋

五 伊勢兵部少輔 一疋

九 福屋助左衛門尉

嶋津縫殿佑三疋

種子嶋為兵衛尉二疋

嶋津主計頭三疋

喚次

嶋津又左衛門尉

十一 嶋津六郎兵衛尉 ⑩三疋

七 山田弥九郎 一疋

十 嶋津中務少輔 ⑩三疋 △

柏原弥太右衛門尉

本田右衛門佐一疋

嶋津圖書頭三疋

喚次

嶋津拾郎

喚次

嶋津拾郎

喚次

喚次

喚次

喚次

喚次

嶋津權兵衛

嶋津權兵衛

嶋津權兵衛

嶋津權兵衛

嶋津權兵衛

一番圖次第六十五放之、

稽古犬追物手組之事 延宝六年五月十四日

嶋津内匠 一疋

嶋津權兵衛

嶋津權兵衛

嶋津權兵衛

肝付三郎
新納主税助「島津イ」「イ」

平田孫三郎
種子嶋藏人 一疋

嶋津權七 一疋

嶋津主計

川上孫三郎 一疋

檢見

喚次

川上十郎左衛門「島津」

平山兵部左衛門

二番圖次第大拾五疋放之、

稽古犬追物手組之事延宝六年五月十四日

嶋津美作「嶋津イ」

喜入求馬「島津イ」

北郷惣次郎 二疋

衞寝八郎右衛門

川上伴平「島津イ」

鎌田源左衛門

山田弥九郎 一疋

比志嶋彦四郎「嶋津イ」

吉利左右衛門

穎娃左京「嶋津イ」

嶋津又五郎 一疋

嶋津助太夫 一疋

檢見

喚次

河上十郎左衛門「嶋津イ」

土持大右衛門

「右此人教延宝六年五月十四日於殿中平山氏本ニ
太守様御覽被遊候人教如斯御坐候」

127 天和元年辛酉十月十六日、網貴様・菊三郎様御犬追物

ニ付

一 網貴様御行騰之役

御左 伊地知彦七「后ハ秩父十郎兵衛」「重行」 御右 伊地知左右衛門「重倫」

一 菊三郎様御行騰之役

御左 伊地知勝八郎「后ハ助右子門」「重英」 御右 伊地知彦右衛門「重頼」

右之御手組可糺事、且諸役者同前可寫置也、

延寶二年より寶曆十二年迄
鎗流馬射手人数調

鹿府稻荷鎗流馬射手日記

延寶二年寅

御舊例方 上馬 椛山三郎兵衛 鎌田源左衛門「子孫當鎌田典膳」

御立願方 桂休次郎 平田孫三郎「當桂左右衛門家部屋栖」「子孫當平田平左衛門」

土持大右衛門「子孫當土持長藏」

高輪 御前様より御立願

上馬 伊集院吉右衛門「子孫當伊集院清右衛門」 本田次郎吉

「右本田次郎吉安親ハ
本田次郎左衛門弟ニ
而候処、白尾家へ養
子ニ罷成、白尾登五
右衛門と申候、射手
急ニ差支被勤候由申
出候」

169

延寶八年申

上馬

五代仁右衛門 乳人山元伊織

『子孫當五代孫次郎』 『子孫當山元五郎左衛門』

貞享四年卯

上馬

川上十郎左衛門 『右同』 『子孫相知不申候』
伊東源八

天和元年酉

上馬

川上傳十郎 平山兵部左衛門

『子孫當川上十郎左衛門』 『子孫當飯熊次郎』

元祿元年辰

上馬

川上十郎左衛門 『右同』 『大番』 『子孫當新納万口』
新納平内

天和二年戌

上馬

川上傳十郎 藤崎長兵衛

『子孫當川上十郎左衛門』 『子孫當藤崎六郎兵衛』

元祿三年午

上馬

川上孫八 谷山長右衛門

『子孫當川上孫五太夫』 『子孫當谷山孫右衛門』

綱貴公御厄年ニ付 光久公ヨリ御立願方

上馬

嶋津主水 入来院志摩之助

町田源六 平田藤右衛門

『子孫當町田源左衛門』 『子孫當平田五次右衛門』

綱貴公御厄年ニ付自分ヨリ申上ル 御立願

上馬

仁禮小吉 藤崎六太夫

黒葛原主左衛門 野村源六

『子孫當黒葛原周右衛門』 『子孫當野村右衛門』

元祿四年未

上馬

町田源六 平田藤右衛門

御舊例方 綱貴公御厄年ニ付 光久公ヨリ御立願方

上馬

川上伊織 鎌田采女

貞享三年寅

上馬

川上十郎左衛門 『子孫當川上十郎左衛門』 『子孫當菱刈八左衛門』

中江九右衛門 『子孫當中江長五郎』

光久公御不例ニ付 綱貴公より御立願方

上馬
新納次郎四郎
土持平右衛門
『子孫當新納次郎四郎』 『子孫當土持平太夫』

光久公御不例ニ付高輪 御前様ヨリ御立願方

上馬
川上十郎左衛門 伊地知少八郎
『子孫當川上十郎左衛門』 『子孫當伊地知助太郎』

光久公御不例ニ付嶋津筑後より御立願方

上馬
川上孫八 乳人美坂太郎右衛門
『子孫當川上孫五太夫』 『子孫當美坂宇右衛門』

元禄五年申

御舊例方 町田源左衛門 仁禮小吉
『子孫當町田源左衛門』 『子孫當仁禮仲右衛門』

光久公御不例ニ付 綱貴公ヨリ御立願方

上馬
川上十郎左衛門 中嶋七右衛門
『子孫當川上十郎左衛門』 『子孫當中嶋七郎左衛門』

乳人
山元慶右衛門
『子孫當山元喜助』

右者、稻荷神前之鎭流馬射手組書写可差出旨承知仕候

ニ付、私方江格護仕置候射手人数不残書記差出申候、
宝曆十二年七月廿八日 御記録奉行

川上独樂殿へも相尋申候也、
『元文五年』申四月廿四日 川上十郎左衛門
(親盈)

御記録所

右之外川上十郎左衛門方へ射手之人数書留所持不仕候、

十郎左衛門親十郎左衛門事、元禄六年酉十一月病死仕候、其節當十郎左衛門事三歳ニ而御座候、十郎左衛門

事享保十九年寅六月差引被仰付候、右式故元禄五年より上馬射手人数書記無之段承届申候、且又宝永七年寅

六月、當座より寶持院へ鎭流馬之儀ニ付問届候節、彼方より申出置候書付卷通、此節書写別番差上申候、以上、

『寶曆十二年』
午七月廿八日

御記録方稽古(政公) 市来瀬兵衛
川上大六
郡山次郎左衛門
吉田用右衛門

御記録奉行(清純)
御記録奉行(清純)
吉田用右衛門

犬追物稽古手組之事 天明六年 丙午正月二十六日

上手組

『四ツ免』 久郷 嶋津圖書
嶋津與十郎久美

久郷

嶋津圖書

二階堂千次郎 〔行都〕

相良弥千母 〔長丘〕

本田孫右衛門一疋 〔親良〕

種子嶋彈正 〔庸時〕

検見

嶋津出雲久良 〔九ツノ免〕

寺山四郎左衛門用儀 〔四ツノ免〕

鮫島四郎右衛門 〔盛峯〕

清水源左衛門一疋 〔盛峯〕

谷川長次郎 〔清興〕

喚次

西恰之介 〔六ツノ免〕

下手組

北郷宗次郎 〔久平〕

堀八百助一疋 〔貞起〕

鎌田源左衛門三疋 〔政興〕

伊勢 亘 〔貞喜〕

検見

論勝負之犬追物稽古手組之事 天明六年 丙午正月廿六日

嶋津出雲 〔九ツノ免〕

種子嶋彈正 〔庸時〕

木脇賀左衛門 〔祐明〕

堀 八百助 〔貞起〕

鎌田源左衛門 〔政〕

蒲生十郎兵衛 〔清將〕

汾陽八右衛門 〔盛昌〕

木脇賀左衛門三疋 〔祐明〕

相良仁右衛門 〔聰行〕

喚次

論勝負之犬追物稽古手組之事 天明六年 丙午正月廿六日

伊勢 亘 〔貞喜〕

種子嶋彈正 〔庸時〕

本田信次郎 〔相親〕

寺山四郎左衛門 〔用儀〕

汾陽八右衛門 〔盛昌〕

蒲生十郎兵衛 〔清將〕

次手組

嶋津美濃 〔久彌〕

伊勢平八郎 〔貞寛〕

家村彦七 〔住武〕

栗川弥七 〔用長〕

嶋津主税 〔久輔〕

検見

嶋津内匠 〔久壽〕

鎌田右門 〔政城〕

和田乘太郎 〔正苗〕

市来十郎右衛門 〔政峯〕

三原九兵衛 〔經武〕

本田信次郎 〔相親〕

喚次

川上四郎 〔親賢〕

下手組

北郷宗次郎 〔久平〕

堀八百助一疋 〔貞起〕

鎌田源左衛門三疋 〔政興〕

伊勢 亘 〔貞喜〕

検見

論勝負之犬追物稽古手組之事 天明六年 丙午正月廿六日

嶋津出雲 〔九ツノ免〕

種子嶋彈正 〔庸時〕

木脇賀左衛門 〔祐明〕

堀 八百助 〔貞起〕

鎌田源左衛門 〔政〕

蒲生十郎兵衛 〔清將〕

汾陽八右衛門 〔盛昌〕

木脇賀左衛門三疋 〔祐明〕

相良仁右衛門 〔聰行〕

喚次

論勝負之犬追物稽古手組之事 天明六年 丙午正月廿六日

伊勢 亘 〔貞喜〕

種子嶋彈正 〔庸時〕

本田信次郎 〔相親〕

寺山四郎左衛門 〔用儀〕

汾陽八右衛門 〔盛昌〕

蒲生十郎兵衛 〔清將〕

三三三

【四ツ】
島津圖書 久郷

【四ツ】
北郷宗次郎 【久平】

川上十郎左衛門

【親蔭】
【六ツ】
西恰之助 【純以】

【六ツ】
島津内膳 【久謙】
島津主税 【久輔】
佐多直左衛門 【直貞】
石川正左衛門 【長親】

【四ツ】
本田信次郎 【相親】
栗川弥七 【用長】
面高真之丞 【俊名】



神事犬追物手組之事 天明六年
丙午十一月廿八日

上手組

【九ツ】
嶋津出雲 【久良】

北郷賀門 【久定】

嶋津藤次郎 【久貯】

二階堂千次郎 【行都】

相良弥千母 長丘

三原九兵衛 【經武】

清水源左衛門 【盛峯】

家村彦七 住武

喜入右衛門 久欽

伊地知新太夫 季保

【四ツ】
種子嶋彈正 【庸時】

【六ツ】
川上四郎 親賢

検見

喚次

川上十郎左衛門 【親蔭】

【六ツ】
相良仁右衛門 聰行

【四ツ】
鎌田右門 【政城】
鎌田源左衛門 【政興】

伊勢平八郎 【貞寛】
寺山四郎左衛門 【用慎】

検見

喚次

【九ツ】
島津出雲 【久良】

【六ツ】
相良仁右衛門 【聰行】



下手組

【四ツ】
北郷宗次郎 【久平】

【六ツ】
西恰之介 【純以】

島津与十郎 【久美】

市来十郎右衛門 【政峯】

三原彦五郎 【經麿】

鮫島四郎右衛門 【高備】

和田乘太郎 【正苗】

本田孫右衛門 【親良】

高橋七次郎 【權實】

次手組

伊勢 亘 【九ツ】
【一】
【貞喜】

検見

川上十郎左衛門 【親馮】

蒲生十郎兵衛 【六ツ】
【清将】

喚次

相良仁右衛門 【六ツ】
【聽行】

三三三

論勝負之犬追物手組之事 天明六年
十一月廿八日

島津出雲 【九ツ】
【久良】

島津與十郎 【一】
【久美】

蒲生十郎兵衛 【六ツ】
【清将】

三原彦五郎 【一】
【經麗】

三原九兵衛 【一】
【經武】

鮫島四郎右衛門 【四ツ】
【高備】

堀八百助 【四ツ】
【貞起】

本田信次郎 【一】
【相親】

北郷宗次郎 【四ツ】
【久平】

種子嶋彈正 【四ツ】
【庸時】

高橋七次郎 【一】
【種實】

富山彌右衛門 【一】
【義輝】

和田乘太郎 【一】
【正苗】

家村彦七 【一】
【住武】

清水源左衛門 【四ツ】
【盛峯】

寺山四郎左衛門 【一】
【周慎】

本田孫右衛門 【一】
【親良】

伊勢 亘 【九ツ】
【貞喜】

検見

川上十郎左衛門 【親馮】

射手奉行

日記

幣「之役」 【見】
【川上翁助】
【親次】

大奉行 【同】
【寺山善四郎】
【周次】

岡元千右衛門 【定好】

高橋金左衛門

小倉仲之丞

三三三

論勝負之犬追物稽古手組之事 天明六年
十二月九日

高橋七次郎 【一】
【種實】

三原彦五郎 【一】
【經麗】

伊勢平八郎 【一】
【貞寛】

和田乘太郎 【一】
【正苗】

鮫島四郎右衛門 【一】
【高備】

島津藤次郎 【一】
【久貯】

相良弥千母 【一】
【長丘】

島津与十郎 【一】
【久美】

栗川弥七 【一】
【用長】

呼次

西恰之介 【純以】

島津内匠 【九ツノ先】
【久壽】

高橋金左衛門

小倉仲之丞

川上翁助 【親次】

寺山善四郎 【周次】

岡元千右衛門 【定好】

高橋金左衛門

小倉仲之丞

和田乘太郎 【正苗】

伊勢平八郎 【貞寛】

三原彦五郎 【經麗】

高橋七次郎 【種實】

和田乘太郎 【正苗】

清水源左衛門 【盛峯】

家村彦七 【住武】

佐多直左衛門 【直具】

富山弥右衛門 【義輝】

〔九〕 検見
伊勢 亘 〔貞喜〕
〔四ッ〕 喚次
寺山四郎左衛門 〔用慎〕

論勝負之犬追物初稽古手組之事天明六年十二月廿一日

〔九〕 島津藤次郎 〔久貯〕

〔九〕 島津出雲 〔久良〕

〔四〕 本田信次郎 〔相親〕

相良弥千母 〔長丘〕

和田乘太郎 〔正苗〕

〔九〕 島津内匠 〔久壽〕

島津与十郎 〔久美〕

検見

〔四〕 北郷宗次郎 〔久平〕

〔九〕 高橋七次郎 〔種實〕

〔四〕 三原彦五郎 〔経麗〕

佐多直左衛門 〔直貞〕

鎌田右門 〔政城〕

家村彦七 〔住武〕

富山弥右衛門 〔義輝〕

本田孫右衛門 〔親良〕

喚次

〔四〕 市来十郎右衛門 〔政峯〕

犬追物稽古手組之事天明七年未十月十七日

上手組

島津藤次郎 〔久貯〕

栗川弥七 〔用長〕

森 六郎 〔有甫〕

伊地知新太夫 〔季保〕

北郷宗次郎 〔久平〕

検見

川上十郎左衛門

次手組

島津主税 〔久輔〕

〔四〕 寺山四郎左衛門 〔用慎〕

三原彦五郎

タネガンマダンシヨウ 〔庸時〕

検見

カワカミ十郎左衛門 〔親馮〕

島津与十郎 〔久美〕

富山彌右衛門 〔義輝〕

清水源左衛門

鮫島四郎右衛門

本田七次郎

喚次

〔四ッノ免〕 瀬川作平次 〔亮央〕

〔九〕 伊勢 亘

堀 八百助

和田乘太郎

ホンダマゴエモン 〔親良〕

喚次

瀬川作平次

論勝負之犬稽古手組之事天明七年
未十月十七日

島津藤次郎

島津与十郎

北郷宗次郎

本田七次郎

三原彦五郎

堀 八百助

富山彌右衛門

伊地知新太夫

和田乘太郎

清水源左衛門

栗川弥七

寺山四郎左衛門

種子島弾正

本田孫右衛門

島津主税

伊勢 亘

検見

喚次

島津内匠

西 恰之助

納之犬稽古手組之事天明七年
十二月廿三日

嶋津圖書

一番

伊地知新太夫

伊勢 亘

伊勢平八郎

飯島四郎左衛門

和田乘太郎

左清水源左衛門

島津与十郎

右肥後七十郎

栗川弥七

喚次

検見

川上十郎左衛門

寺山四郎左衛門

二番

島津藤次郎

本田七次郎

富山弥右衛門

三原彦五郎

堀 八百助

相良弥千母

北郷宗次郎

本田孫右衛門

検見

呼次

島津内匠

寺山四郎左衛門

真之犬追物稽古手組之事天明七年
十二月九日

島津藤次郎

島津与十郎

和田乘太郎

富山彌右衛門

島津主税

堀 八百助

検見

喚次

伊勢 亘

本田孫右衛門

犬追物稽古手組之事天明八年
申三月十三日

一番

- 嶋津圖書 ¹⁻¹
- 伊地知新太夫 ¹⁻¹
- 和田乘太郎 ¹⁻¹
- 島津主税 ¹⁻¹

- 伊勢 亘 ¹⁻²
- 相良弥千母 ¹⁻¹
- 肥後七次郎 ¹⁻¹
- 伊勢平八郎 ¹⁻¹

論之犬稽古手組之事天明七年
未十二月廿三日

- 嶋津圖書 ¹⁻²
- 本田七次郎 ¹⁻²
- 和田乘太郎 ¹⁻²
- 三原彦五郎 ¹⁻¹
- 清水源左衛門 ¹⁻¹
- 富山弥右衛門 ¹⁻²
- 栗川弥七 ¹⁻¹
- 北郷宗次郎 ¹⁻²
- 伊勢 亘
- 伊勢 検見
- 汾陽八右衛門
- 呼次
- 島津藤次郎 ¹⁻²
- 本田孫左衛門 ¹⁻²
- 鮫嶋四郎右衛門 ¹⁻¹
- 堀 八百助 ¹⁻¹
- 寺山四郎左衛門 ¹⁻¹
- 相良弥千母 ¹⁻¹
- 伊地知新太夫 ¹⁻¹
- 島津与十郎 ¹⁻²

論之犬稽古手組之事天明八年
申三月十三日

一番

- 嶋津藤次郎 ¹⁻¹
- 伊地知新太夫 ¹⁻¹
- 市来十郎右衛門 ⁴⁻¹
- 島津主税 ¹⁻³

- 嶋津与十郎 ⁴⁻¹
- 相良彌千母 ¹⁻¹
- 清水源左衛門 ¹⁻¹
- 栗川弥七 ¹⁻¹

検見

川上十郎左衛門

呼次

市来十郎右衛門

- 島津藤次郎 ¹⁻¹
- 本田孫右衛門 ⁴⁻¹
- 森 六郎 ¹⁻¹
- 寺山四郎左衛門 ⁴⁻¹
- 島津与十郎 ⁴⁻¹
- 伊勢 亘
- 伊勢 検見
- 市来十郎右衛門
- 喚次
- 島津藤次郎 ⁴⁻¹
- 本田作左衛門 ⁴⁻¹
- 富山弥右衛門 ¹⁻¹
- 清水源左衛門 ¹⁻¹
- 堀 八百助 ⁴⁻¹
- 栗川弥七 ¹⁻¹

〔九〕 検見
島津内匠 〔久壽〕

〔九〕 呼次
伊勢 亘 〔貞喜〕

川上十郎左衛門 〔親馮〕

呼次
伊勢 亘 〔貞喜〕

二番

〔一〕 島津圖書

〔一〕 本田作左衛門 〔寶親〕

嶋津藤次郎

種子島彈正

〔一〕 寺山四郎左衛門

〔一〕 和田乘太郎

伊勢平八郎

清水源左衛門

〔三〕 富山弥右衛門

〔一〕 堀 八百助

森 六郎

市来十郎右衛門

〔二〕 伊勢 亘

〔一〕 本田孫右衛門

佐多直左衛門

肥後七次郎 〔十〕 〔盛福〕

検見

呼次

嶋津主税

鎌田源左衛門

川上十郎左衛門

〔九〕 島津内匠

〔九〕 島津出雲 〔久良〕

喚次

〔六〕 西 恰之助

大追物稽古手組事 天明八年四月十四日



上手組

〔一〕 嶋津美濃 〔久弼〕

〔一〕 秩父十郎 〔将盛〕

〔一〕 市来弥太郎 〔政堅〕

〔一〕 岡元千兵衛 〔定教〕

〔一〕 岸良弥九郎 〔兼實〕

〔一〕 面高真之丞

〔一〕 喜入善之助 〔久欽〕

〔一〕 伊勢平左衛門 〔貞固〕

下手組

〔一〕 嶋津圖書

〔左〕 和田乘太郎 〔四ツノ免〕

〔一〕 本田孫右衛門

〔右〕 島津与十郎 〔四ツノ免〕

〔一〕 富山弥右衛門

伊地知新太夫

〔一〕 伊勢 亘

〔一〕 本田作左衛門

犬追物稽古手組之事寛政元年
二月廿五日

上手組

島津藤次郎

市来十郎右衛門

面高真之丞

河野安郎右衛門

岩切六郎

大脇弥五右衛門為相

【通音】

【藤清】

嶋津内匠

下手組

島津与十郎

伊地知新太夫

伊地知新太夫

本田孫右衛門

岡元千兵衛

鮫島四郎右衛門

論之勝負犬稽古手組之事同八年
四月十四日

検見

島津内匠

西 恰之介

喚次

島津出雲

同 與十郎

本田孫右衛門

伊地知新太夫

種子嶋弾正

島津圖書【久郷】

島津藤次郎

鎌田源左衛門

富山弥右衛門

和田乘太郎

本田作左衛門

同 主税【久輔】

喚次

川上四郎【六ノ免】【親】

山田震九郎【有昌】

伊勢平左衛門【貞固】

島津右平太【久美】

検見

川上十郎左衛門

次手組

島津主税【久輔】

岸良弥九郎【兼宝】

相良彦八【種演】

肥後平右衛門【盛屋】

伊勢平八郎【貞寛】

検見

有馬源左衛門【經武】

南郷孫七【兼武】

山田諸三【久寶】

喚次

鮫島四郎右衛門

栗川弥七【用長】

平田俊藏【宗次】

木場休右衛門【貞頭】

清水源左衛門

秩父十郎【将盛】

呼次

和田乘太郎

肥後七次郎【十】

本田作左衛門

富山弥右衛門

検見

喚次

伊勢 亘

鮫嶋四郎右衛門

論之犬檜古手組之事寛政元年
二月廿五日

嶋津藤次郎

同 与十郎

本田作左衛門

富山弥右衛門

和田乘太郎

清水源左衛門

岡元千兵衛

肥後七十次郎

本田孫右衛門

伊地知新太夫

島津主税

伊勢 亘



草之犬追物御覽手組之事寛政二年
二月廿八日

上手組

【四ツノ免】

島津藤次郎【久貯】

【四ツノ免】

本田作左衛門【實親】

岩切六郎【壽清】

有馬源左衛門【經武】

平田俊藏【宗次】

岡元千兵衛【定好】

島津右平太【久美】

検見

川上十郎左衛門【親馮】

伊勢平左衛門【貞因】

木場休右衛門【貞顯】

上村四郎右衛門【正休】

岸良弥九郎【兼實】

栗川弥七【用長】

喚次

木脇賀左衛門【祐明】

次手組

喜入善之助【久欽】

山田辰九郎【有昌】

清水源左衛門【盛峯】

肥後七十郎【盛福】

後醍院喜兵衛【良株】

鎌田源左衛門【政興】

検見

川上十郎左衛門【親馮】

山田諸三【久實】

南郷孫七【兼武】

大脇弥五右衛門【為相】

谷山孫之丞【道徳】

鮫島四郎右衛門【高備】

本田孫右衛門【親良】

喚次

木脇賀左衛門【祐明】

下手組

島津与十郎 『久美』

富山弥右衛門 『義輝』

面高真之丞 『俊名』

家村彦七 『住武』

肥後平左衛門 『盛富』

高橋左門 『種盛』

検見

川上十郎左衛門 『親馮』

伊勢平八郎 『貞寛』

市来弥太郎 『政聖』

市来十郎右衛門 『政峯』

有川休右衛門

相良彦八 『種演』

寺山四郎左衛門 『用慎』

喚次

木脇賀左衛門 『祐明』

論之犬追物御覽手組之事 寛政二年二月二十八日

島津藤次郎 『久貯』

木脇賀左衛門 『祐明』

本田孫右衛門 『親良』

家村彦七 『住武』

岡元千兵衛 『定教』

鎌田源左衛門 『政興』

鮫島四郎左衛門 『高備』

市来弥太郎 『政聖』

肥後平左衛門 『盛富』

木場休右衛門 『貞頭』

肥後七十郎 『盛福』

富山弥右衛門 『義輝』

島津与十郎 『久美』

検見

川上十郎左衛門 『親馮』

射手奉行

日記

幣之役

犬奉行

大奉行

相良彦八 『種演』

寺山四郎左衛門 『用慎』

本田作左衛門 『寶親』

喚次

秩父十郎 『將盛』

島津内膳

津留八左衛門

讚良善四郎

伊集院郁次郎

岡元千右衛門

草之犬追物手組之事 寛政二年三月廿一日

島津藤次郎 『久貯』

市来十郎右衛門 『政峯』

相良彦八 『種演』

肥後平左衛門 『盛富』

有川休右衛門

伊勢平八郎 『貞寛』

南郷孫七 『兼武』

大脇弥五右衛門 『為相』

岡元千兵衛^一〔定教〕
島津右平太^一〔久美〕

川上十郎左衛門^一〔親馮〕

秩父十郎^一〔得盛〕
喚次^一〔九ノ免〕
倉山藤覺^一〔季武〕

三三三

次手組
喜入善之助^一〔久欽〕

木脇賀左衛門^一〔祐明〕
有馬源左衛門^一〔純武〕

面高真之丞^一〔俊名〕

山田震九郎^一〔有昌〕
高橋左門^一〔種盛〕

川上十郎左衛門^一〔親馮〕

下手組
島津与十郎^一〔久美〕

山田諸三^一〔久實〕

市米弥太郎^一〔政聖〕
肥後七十郎^一〔盛福〕

木場休右衛門^一〔貞顯〕
本田孫右衛門^一〔親良〕

喚次^一〔九ツ〕
倉山藤覺^一〔季武〕

栗川弥七^一〔用長〕

清水源左衛門^一〔盛峯〕

家村彦七^一〔住武〕
平田俊藏^一〔宗次〕

岸良弥九郎^一〔兼寛〕

本田作左衛門^一〔實親〕

三三三

論之犬追物手組之事^{寛政二年三月廿一日}

島津藤次郎^一〔六ツ〕

山田震九郎^一〔四ツ〕

木場休右衛門^一〔貞顯〕

相良彦八^一〔常演〕

家村彦七^一〔住武〕

肥後七十郎^一〔盛福〕

木脇賀左衛門^一〔祐明〕

島津与十郎^一〔久美〕

富山彌右衛門^一〔義輝〕

寺山四郎左衛門^一〔用俱〕

鮫島四郎右衛門^一〔高備〕

岩切六郎^一〔壽清〕

本田作左衛門^一〔實親〕

寺山四郎左衛門^一〔用俱〕

岡元千兵衛^一〔定教〕

肥後平左衛門^一〔種盛〕

鮫島四郎右衛門^一〔義輝〕

市来弥太郎^一〔政聖〕

富山弥右衛門^一〔義輝〕

本田孫右衛門^一〔親良〕

検見

川上十郎左衛門「親馮」^九 倉山藤覚「季武」

喚次

射手奉行

島津内膳

日記

津留八郎太

長崎甚左衛門

幣之役

讚良善四郎

伊集院郁次郎

右御内證様御覽被遊、雨天六ツ時揃、着用麻袴、四ツ迄早目御出、直ニ相始ル、支度と云^{トフ} 太守様御覽ニ無替事、八ツ過相濟、御重之内御酒拜領被仰付候、於弓場頂戴仕候事、

犬追物稽古手組之事^{寛政二年十二月七日}

上手組

島津藤次郎^一

山岡齋宮「久芳」

岡元千兵衛

山田諸三

秩父十郎一疋

大脇弥五右衛門

谷村与平次「純苗」

肥後七十郎^二

検見

川上十郎左衛門

喚次

鮫島四郎右衛門

次手組

高橋左門

町田監物

岩切六郎「信昌」

検見

伊勢平八郎「二疋」

喚次

市来十郎右衛門

下手組

島津右平太

樺山采女「久徴」

南郷孫七

本田作左衛門「二疋」

検見

川上十郎左衛門

富山彌右衛門「三疋」

有川休右衛門^七

平田俊蔵「二疋」

呼次

鮫嶋四郎右衛門

論之犬追古手組之事寛政二年十二月七日

島津藤次郎〔二〕 本田作左衛門〔二〕

秩父十郎〔一〕 岡元千兵衛〔一〕

肥後七十郎〔二〕 市来十郎右衛門

平田俊蔵 有川休右衛門

本田孫右衛門〔三〕 富山弥右衛門〔二〕

島津右平太 山田諸三〔一〕

検見 喚次

川上十郎左衛門 鮫島四郎右衛門〔四〕

152 犬追物稽古手組之事寛政四年十月十一日

上手組

島津与十郎 川上直記〔久富〕

後醍院喜兵衛 大脇弥五右衛門

町田監物 秩父十郎

検見 喚次

川上庄八郎〔親駕〕 相良仁右衛門〔馳行〕〔六ツ〕

次手組

嶋津主税 岩切六郎〔一〕

上村四郎右衛門 市来十郎右衛門

島津右平太 家村彦七〔一〕

検見 喚次

川上庄八郎 相良仁右衛門

下手組

島津圖書 山田諸三〔一〕

木場休右衛門 南郷孫七〔一〕

平田俊蔵 本田孫右衛門

樺山采女 喚次

検見

川上庄八郎 相良仁右衛門

153 論之犬稽古手組之事寛政四年十月十一日

島津圖書 樺山采女〔一三〕

秩父十郎 家村彦七〔一〕

〔一三〕南郷孫七

〔一三〕岩切六郎

〔一三〕本田孫右衛門

島津右平太

検見

川上庄八郎

〔一三〕木場休右衛門

市来十郎右衛門

〔一三〕平田俊蔵

〔一三〕山田諸三

喚次

〔六〕相良仁右衛門

154 (重考) 太守様 中將様 雄五郎様御覽手組左之通、

犬追物手組之事 寛政五年 八月十二日

上手組

〔九ツノ免〕

島津出雲〔久良〕

〔六ツノ免〕

〔一三〕山村彦七〔武定〕 〔住武〕

〔一三〕寺山太郎左衛門〔老定〕 〔用香〕

〔一三〕川上翁助〔親常〕

検見

喚次

〔一三〕後醍院喜兵衛〔良株〕

〔一三〕岸良弥九郎〔兼實〕

〔四ツノ免〕

〔六ツノ免〕

〔一三〕鎌田源左衛門〔政興〕

川上十郎左衛門〔親馮〕

〓〓〓

次手組

〔六ツノ免〕

〔一三〕島津与十郎〔久美〕

〔九ツノ免〕

〔一三〕木脇賀左衛門〔武定〕 〔祐明〕

〔六ツノ免〕

〔一三〕岩山半兵衛〔直徴〕

川上十郎左衛門

〓〓〓

〓〓〓

下手組

〔四ツノ免〕

〔一三〕樺山采女〔久徴〕

〔九ツノ免〕

〔四ツノ免〕

〔六ツノ免〕

〔一三〕川上四郎兵衛〔親賢〕

〔一三〕川上庄八郎〔親篤〕

〔一三〕富山弥右衛門〔武定〕 〔義輝〕

〔四ツノ免〕

〔一三〕南郷孫七〔兼武〕

〔一三〕平田俊蔵〔宗次〕

〔四ツノ免〕

〔一三〕秩父十郎〔将盛〕

喚次

高橋左門〔種盛〕

〔四ツノ免〕

〔一三〕種子嶋左門〔政城〕

〔四ツノ免〕

〔六ツノ免〕

【四ツノ免】
山田諸三「久寶」

検見

島津出雲

【六ツノ免】
本田孫右衛門「式正
親良」

喚次

高橋左門

三三三

論之犬追物手組之事寛政五年
八月十二日

島津出雲

秩父十郎

木脇賀左衛門「式正」

平田俊蔵

南郷孫七「一疋」

本田孫右衛門「一疋」

樺山采女「一疋」

検見

川上十郎左衛門

一射手奉行

倉山藤覚
本田六左衛門

鎌田源左衛門

寺山四郎左衛門「式正」

川上翁助「式正」

家村彦七「一疋」

木場休右衛門「一疋」

富山弥右衛門

山田諸三

喚次

川上四郎兵衛

一日記

津留八郎太
岩切佐平次

一幣之役

塘万十郎

岩下新之丞

山本壯四郎

一犬奉行

三三三

犬追物手組之事寛政九年
正月十八日

上手組

【九ツノ免】

島津和泉「一疋」

三木原勇次郎「廣器」

讚良猪三太

川上庄八郎「式正
親屬」

検見

川上十郎左衛門

【六ツノ免】

同 右平太「久美」

伊勢八右衛門

面高真之丞「俊名」

郷原勝五郎「久富」

喚次

鮫嶋四郎右衛門

三三三

次手組

島津助之丞

同 新八郎

太守様御晴厄ニ而神事犬追物興行御覽手組雄五郎様御出
左之通、



榊山民次郎一疋「實朋」
岩山半兵衛三疋「直徴」
北郷作左衛門一疋「久平」

検見

川上十郎左衛門



下手組

榊山權左衛門一疋「久克」
関山新六一疋「金當」
木脇賀左衛門一疋「祐明」
北郷宗次郎

検見

川上庄八郎

本田孫右衛門一疋「親良」
川上翁助一疋

宮之原主膳

喚次

鮫島四郎右衛門

榊山權十郎一疋「武疋」
木場休右衛門一疋「久徴」
上村四郎右衛門一疋

喚次

鮫島四郎右衛門一疋

神事犬追物手組之事寛政九年十二月十五日

上手組

島津和泉一疋「久良」

平田平太右衛門

木脇賀左衛門一疋「祐明」

伊集院郁五郎一疋

山田諸三一疋「久賢」

島津栄之進

検見

川上十郎右衛門一疋「親馬」



次手組

島津助之丞一疋

宮之原甚五兵衛

讚良猪三太一疋

堀八百助一疋「貞起」

三木原勇次郎一疋「廣器」

川上庄八郎一疋「親駕」
北郷權十郎

寺山太郎左衛門一疋「用香」

岩山半兵衛一疋「直徴」

本田孫右衛門一疋「親精」

島津右平太一疋「久美」

喚次

鮫島四郎右衛門一疋「高備」

島津守右衛門一疋「久白」

鎌田藤次郎

種子島後藤兵衛

上村休左衛門一疋

三原次郎四郎一疋

北郷作左衛門『久平』

検見

川上十郎左衛門

鮫島四郎右衛門

郷原勝五郎『久富』

喚次

〓〓〓〓〓

下手組

樫山權左衛門『式正久美』

義岡十郎五郎

関山新六『金當』

大熊左右治

上村四郎右衛門『正休』

町田八郎太

伊勢八右衛門『貞純』

木場休右衛門『貞顯』

樺山民次郎『資朋』

川上翁助『親常』

北郷宗次郎『三正』

樺山權十郎『久徵』

検見

川上十郎左衛門

鮫島四郎右衛門

〓〓〓〓〓

論勝負之犬手組但四ツ角之外
關次第

沓番

川上庄八郎『三親駕』

上村四郎右衛門『正休久美』

関山新六『金當』

二階堂陽之助『一正』

鎌田藤次郎

島津右平太『久美』

検見

川上十郎左衛門

山田諸三『久實』

島津守右衛門『式正久美』

北郷宗次郎『一正』

伊勢八右衛門『一正』

平田平太右衛門

樫山權左衛門『三正久美』

外之検見

木脇賀左衛門

〓〓〓〓〓

二番

本田孫右衛門『一正親精』

岩山半兵衛『一正直徵』

三木原勇次郎『廣器』

讚良猪三太

島津助之丞

樫山權十郎『久徵』

検見

外之検見

宮之原甚五兵衛

寺山太郎右衛門『一正用香』

樺山民次郎『資朋』

木場休右衛門『貞顯』

郷原勝五郎『久富』

川上翁助『親常』

外之検見

外之検見

外之検見

外之検見

外之検見

外之検見

外之検見

外之検見

外之検見

外之検見

外之検見

159
(別冊袋綴「犬追物記 全」アリ、省略ス)

川上千郎左衛門

【九ツノ免】
島津和泉

一 射手奉行

蒲生十郎兵衛

一日 記

津留八左衛門

一 幣之役

萩原孫平次
木脇靄次

一 大奉行
(大カ)

鮫島弥二郎

同

川上直記
面高真之丞

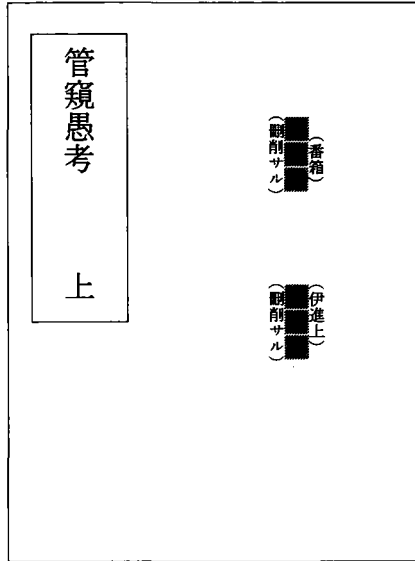
文政十三年寅十一月四日書之、

本本田親良

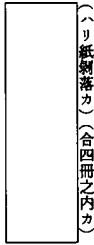
主伊地知小四郎平季澄

管窺愚考

(表紙)



(中表紙)



管窺愚考 卷之上 稿

1 管窺愚考叙

於乎赫矣我島津氏之隆盛也、維昔

皇家分_二支子_一、以干_二城

王室、錫以_二源姓_一、子孫繁殖、威嚴以張、以攘_二却寇賊_一、

〔鎮_二護_一〕社稷、大哉武之德也、維德累積、爰暨_二

鎌臺、霸業大成、以號_二令天下_一、於是肇命_二孳子_一、為_二

宗藩、封以_二薩隅日三州_一、稱之島津氏、是我

高祖得佛公所_レ創_レ業也、爾來六百有餘歲、賢主相繼、

封疆益大、武威仁德、曜々奕々者、天下何人不_レ仰焉、

而其稱呼之權輿、固有_レ由矣、雖然秘府之書、國機所_レ

係、苟非_二其人_一、不_レ得_二與親_一焉、流俗之傳、誕妄附會、

正偽無_レ辨焉、是以若_二宿儒荒井氏_一、猶妄意疑_二國系_一、

其藩翰譜之撰、頗弘_二無稽之說_一、水府之日本史亦爾、

是則史家所_レ病、而今有_二子靜氏者出_一、大闡_二先世幽埋

之說_一、以為_二來哲之正鑑_一、豈不_レ愉快乎、蓋子靜於_レ學、

亡_レ論_二精覈廣博_一、而史學其所_二最長_一、是以我

國家紀載典籍、無_レ不_レ投究_二焉_一、苟值_二其隱微晦沒者_一、

深考遠鑒、不_レ究_二其原_一不_レ措也、故所_二撰述_一、議論辨

駁、先覺未發之說、悉論定焉、識者無二間然、偉矣業也、近為二肝屬氏二撰二家譜、其搜索探討之際、適得二島津之稱所二首基、隨而研二究之、

高祖開國、國姓之所二起、大得二其說、不二留二絲毫之疑、雖然子靜以下往年坐二事禁錮、今雖二禁弛、猶畏二其忌諱、不二欲二顯然論二次之、附二之肝氏譜中、以具二它日之考索、余之宗家久仰君、有二好古之癖、與二子靜善、是以得二其稿、與二余按二譬之、余慨然告二子靜曰、夫名者實之賓也、是以孔子欲二正二之、況我

國家赫々威嚴、衆民所二具瞻、而其稱呼之原由、瞭然無二辨知二焉可耶、而此書一出、衆盲始披、瞭然見二其明、實千古之一大快、宜二公二之于世、以備二國史之考據也、而沒二之肝氏譜中、豈不二惜乎、且夫肝氏雖二古之名家也、其先割二據封域、抗二衡于

國家者、非二一世也、而屬二之其譜中、以見二其志、雖二出二子之謙讓也、

先公之靈、恐有二所二不安焉、奈二之何其忍二為二之、子靜默然曰、噫吾豈不二之思、一旦獲二罪於

國家、畏敬攝伏、尚恐加二其罪責、唯吾癖性之所二得、積年考究之勞、憾二泯二滅之故紙中、是以託二之肝譜中、以欲二與二二同志二研尋二耳矣、而公然擬二筆於太史、不二願二忌憚二者、非二吾志二也、而何為行二之于世、以累二吾餘罪二乎、余愍然曰、至矣哉、子之恭謹也、吾豈間二然于此、雖然物不二得二兩全者、舍二其小者輕者、從二其大者重者、所謂春秋者天子之事也、孔子不二得二撮土、筆二削之、不二以為二潛除二也、史記者萬世之龜鑑也、司馬子長以二刀鋸之餘、纂二輯之、不二以為二不恭二也、今子獲二罪於

國家、固連累之餘波、非二有二怙終所二惡也、況禁已弛、國家之優待亦可知也、而懷二匹夫之小諒、以廢二萬世之大業、恐非二志士之所二為歟、而此撰也、雖二以二子之該博、躬處二宦途、事屬二紛擾、豈得二成二此大業、或則先公之靈、欲二令二其赫々之威嚴、輝二之來世、託二之禁錮幽靜之士、以成二其業、亦不二可知也、何必區々秘二之、埋二沒

國家之盛事、子靜猶不二肯、然聊錄二其考、名二管窺愚

考以藏_二巾箱、供_二同志之攬撫、余再謀之久仰君、強索_二其稿、以公_二于世、庶有_レ志_二於國史_一者、傳_レ之以為_レ信、文獻可_二以足_レ徵耳矣、恭惟我

日東姑舍焉、夫周家之大國、齊集_二於田氏、晉斃_二於三卿、魯衛雖_レ存、困_レ於削小、其它沿革盛衰、孰若我國家明威無疆、易曰、自_レ天祐_レ之、吉無_レ不利、我國家之謂與、而其基本、得_レ此書、以昭_ニ乎來世_一者、子靜之功、其何如哉、於是書_二之卷端_一、子靜、伊地知氏、名季安、自_レ幼好_レ學、曾_レ自_レ受_レ禁錮、不_レ出_二一室、隣里無_レ知_二其面_一、其為_レ人可_レ知耳矣、

天保甲午春三月

清水新納時升伯剛撰

2 管窺愚考序

夫聖主雖_レ明、博采_二芻蕘、故其視益明矣、若_二良史之於_二筆削、亦其如_レ斯乎、竊聞、我藩史乘、多取_二諸逸簡殘策_一、馳_二騁古今、探_二朝索野、靡_レ所遺漏、既能彬々成_二其文焉、而藏_二秘府、自_レ非_二史職、不_レ得_二遍讀_レ之也、

是以學士大夫、生長乎藩、識稱_二精博、亦於_二藩史、則寥寥乎、默_レ口焉已、故如_二荒井氏、心抱_二非毀、猥規_二我史、義雖_レ淺近、猶鮮_二辨斥、苟齒_二土列_一者、孰無_二遺憾焉乎、余性頗迂、好讀_レ書、年二十七、被_二坐_レ事廢錮、而絕_二世交、省_レ愆內訟者、二十六年于茲矣、其益就_レ閑也、雅愛_二古編、凡於_レ所聞、苟有_レ路_レ假、極_レ力搜索、恆_レ臆殺青以秘_二帳中、時與_レ之娛、以忘_二其憂、然世人或間聞_二余如_レ是、誤以為_二余能言_二古事、動叩_二茅廬、請為_二譜乘、余雖_レ非_二其人、僻質坐因_二亦以廣_二吾聞識、未_レ嘗不_レ為_レ之竭_二愚材_一也、其諸稿而竣_二史裁_一者、大率數十百篇、近脩_二伴氏譜、主人頗富、屢給_二紙筆、所_レ援群籍、亦至_二購示、於是乎、所_レ嘗疑_一者、渙然水釋、怡然理順、則有_レ合_二於膠投_レ漆、如_レ下島津御莊所_二以權輿_一之類、是也、乃粗演述、註_二之伴譜、以示_二新納久仰君、質_二諸其族人伯剛及相良翁等、翁嘗居_レ史、伯剛精_レ學、皆時名士也、翁視稱_レ之、伯剛亦左袒焉、乃為_二之評_一云、引證正確、議論精蜜、古人備考亦所_レ未_レ至、悉發_二明之、真

國史第一之考證、應亦藏諸秘府、必為來世之按據焉、

而今具乎伴氏譜、雖本因撰其譜所得說也、要

國姓之所由來、不可沒佗家譜中、況伴氏世寇

國家、而以此大公論、具其譜中、似遺憾焉、今如

其有與伴氏者、存而可也、其它刪之、別撰島津莊

考一篇、供國史之備考、如何、余對之曰、如三子評、

則我藩有自古史官存焉、而責諸余、余〔列士

班、亦〕遭廢逐、妻饑子寒、情不忍棄、為人撰譜、

聊有所見、故註端緒、以俟後來有太史氏幸顧而

正焉、愚分所宜也、若細說之、雖著短篇、非中能

所畢、豈敢當乎、伯剛曰、理則然矣、子不聞乎、若

夫遷史、遂罪叙述、今子潛思、既有所見、而默於

胸、不畢其說、恨子所見復徒沈沒、卒無集太史氏

久仰君亦勸曰、公族蕃衍、辱纘旁裔、而蒙乎

宗國所自出、則於心未安、願子詳述、吾儕之幸也、

於是乎、季安不能固辭、乃忘愚管、遂探帳中、研

核衆說、粗叙異同、起艸於壬辰十月、脫稿於癸巳三

月、分為三卷、但說御莊、述之詳覈、必有闕涉於

太祖事、而妄致吾喙、以瀆紀傳、實冒忌諱、雖所

恐懼、難離為說、不得已而敢及之、不說則已、

說又思審、故編年月、以分遠近、繫之遺事、述愚

所見、姑備遺忘、不以投火、則有待乎尚就博

識更辨愚惑而已、恐世之君子不解愚意、而謂季

安擅易、藩之舊說、故諸秘本所援證者、別為一卷、

亦附其後、然於題名、不敢竊僭曰島津莊考、題曰

管窺愚考、是無佗矣、本草莽陋愚、雜取什一於仟佰

故也、抑藩之史乘、深藏秘府、非季安等在草野而

所得窺、則不知其說合管見否、何足以塞君等責、

庶幾幸遇來哲不棄芻蕘、卒有采益明焉、

天保四年癸巳四月穀旦

本府 伊地知季安子靜謹序

(朱角印、印文「伊地知氏珍藏」)

管窺愚考卷之上

魔府 潛隱 平季安 謹撰

謹按、

本藩公室、世以_二島津_一為_二國姓_一、蓋島津者、故日向地名、而自_二上古_一、謂_二之島津御莊_一、則萬壽中、平季基自請_二其所_レ墾田_一、為_二宇治_一治_一、關白頼通殿莊園、置_二之莊衙_一、而祠_二

伊勢宮、以準_二其神領_一故也、自萬壽元年迄天保四年八百十年〔按黃白問答、凡在國皆私邑、而今_レ〔付箋〕

園按黃白問答、則「是私領、而」俗所謂知行所也、

故稅斂薄而無_レ貢_二於國衙_一、是以、日隅薩之諸墾」而

佃者、皆願_レ耕_二於殿下之莊_一、地進墾長、匪_二畜蠶_一、食

乎我三州、延及_二七道_一、其流弊、則遂至_レ降_二寬德_一、遍

害_二國務_一、於_レ是、

七十後三條帝立、延久元年、詔正_二券契_一、禁_二新立莊_一、

然如_二島津_一、俗尚_レ開墾、立券特著、而非_二制限_一、以

傳_二六世_一、至_二基通公時_一、殆并_二三州_一、當_二是時_一也、

天下兵權、多歸_二

右幕府、賴朝乃以_二我

得佛公_一為_二御莊總地頭_一、下_二文御莊_一、為_二薩隅日之總

稱_一、故迨_二

公就_二封於島津_一、遂以氏_レ焉、語在_二後章_一、原夫、薩

隅日三州、其在_二神世_一、謂_二之建日別_一、或曰_二熊襲國_一、

或省_二熊字_一、惟曰_二襲國_一、則

〔竊込異筆〕

景行帝十二年、書_二熊襲國_一、或書_二襲國_一、古事記、

書_二熊曾國_一、國造本紀、書_二隼人同祖初小_一、〔初小亦襲云〕

蓋皆此也、〔然神代紀鈔、謂熊襲為薩摩國、神皇正統記、

為在日向國、大八洲圖說、兩分其地、熊為薩摩、襲為大隅、而本居氏、則自

日向南半國許處、併之薩隅、總為熊曾、而日半地、時雖肥云、於是乎併之熊

曾及筑與豐、以為四國、古事記所謂、筑紫嶋有四面云、是也、扶桑略記、以

古事記所謂、筑紫嶋有四面者、則是也、〔扶桑略記、

為佐渡國、邊幅廣遠、所自_レ古傳、涉_二多岐_一、亦宜焉

哉、〕十七年

帝幸_二子湯_一云々

帝幸_二子湯_一、今日州有

得_二日向名_一、明年、帝至火國、遙視火〔光〕、聞而

成務帝時、詔定_二國郡_一、然如_二襲及隅薩_一、尚隸_二日向_一、

〔初小亦襲云〕

則神代卷、書日向襲、今隅州、有郡名、曾於蓋遺名也。或書日向吾

田、今薩州、有郡名、亦薩州有郡名出、阿多亦遺名也。或古事記載日向泉、水、其遺名也。

之類、可併知也、又火闌降命六世孫、曰薩摩若

疑君、相樂、事見姓氏錄、所謂阿多御手養、阿多

軍人、大角軍人、日下部等其屬類也、

廿六 應神帝時、以豊国別之三世孫老男、為日向国造、時

薩隅等、蓋猶屬焉、魏国造、本紀、又

廿九 允恭帝時、遣額田部等來薩摩國、伐隼人、以平

之、〔亦〕見姓氏錄、據此、當時薩摩、雖似建

國、恐追書誤、抑三州人、強猛勇悍、傳神古藝、

執弓獵山、垂綸釣海、〔付箋〕其疾如飛隼、〔纂疏曰、

後世為官風、土記云、日向大隅薩摩、其猛如熊虎、因稱建日

摩俗皆隼人、猛烈如隼、此也。〕

別、或稱隼人國、或世為畏、稱熊襲國、〔風土記所

謂、日向大隅薩摩俗皆隼人、猛烈如隼云、是也、纂疏曰隼人氏也、後世為官

世稱、而實非國名、因号未建時、假又釋紀註、襲字〕為

以為國名云、見較島宗恒古事集略、又其襲字、釋紀註、則

山嶽襲重之義、凡三州地、層巒疊嶂、連繞斷續、實

有下襲三重於其間者、則亦通焉〔耳〕、〔其稱薩摩、按冠

辭考等云、則〕薩之為言、幸也、訓曰佐伎、或曰〔云

々〕佐知、而伎與知、則橫音通、且知與都亦五

音通、則安房風土記有之、漁獵之幸、〔白鳥、社傳、而萬

葉所謂、薩男、薩人、薩弓、薩矢、義與此同、又

白尾氏云、摩之為言島也、訓曰志麻、約志為摩、

例最不少、故轉幸島、謂之薩摩、〔下總有郡名猿島、

語轉也、見國史略天〕本出乎神代山幸海幸之遺響云、

此說得之、猶下總國有郡名猿嶋、後稍語轉、書相馬

例、〔見國史略天慶二年、而我藩、中古猶書薩州方薩摩郡、或薩

洲住人忠景、〔見入院氏藏書建保五年八今按字書、海中

有山、可依止曰島、又水中可居曰洲、倭訓並

為志麻、故神代卷曰洲者、古事記多作島字、

則約洲為摩、可亦証焉、於是乎、今尚有地名

薩摩山、〔在薩薩摩迫、〔在鹿島與日置接界處、又薩摩渡、在市

等、皆非由水中、竝由獲幸以得〕〔名者、可併

落白鳥、亦可類知也、又或說云、熊襲人之世稱、而襲字、未建國時、假為國號、故

知焉、後〕循三方域、稍如州名、則

廿七 雄略帝時、遣使來率大隅阿多隼人等、搜聚秦族、

亦見姓氏錄、或

廿八 孝德帝紀白雉四年、載薩麻之曲、或

七十五

〔三〕安閑帝二年五月、書置阿娜國膽殖屯倉甲寅、〔或〕

四十天武帝紀、書大隅隼人與阿多隼人、相撲於朝

廷、或

〔付箋〕
〔四十〕持統帝紀、書賞賜隼人大隅阿多魁師等、三百三十

七人、有差、或遣沙門於大隅與阿多、以傳佛

教之類、其竝稱大隅阿多〔猶今〕、可併觀

也、然當時其所謂薩摩・大隅・阿多等、尚未建

國、皆隸日向、何以証之、

四十二文武帝紀、大寶二年四月、書筑紫七國、據是、以

數今九策、則二國不足、可_レ以知焉、然按續紀、

是歲薩摩・多楸叛、朝廷乃發兵征討、八月丙申、

遂按戶置吏、前此、薩摩・多楸等、尚日向屬郡、

而無二國司、地廣令弛、動逆、朝化、以故、置吏

於薩摩與多楸、使率_レ繇戍以鎮兩國、而其繇戍、

則迭戍邊卒、而唱更此也、唱更字、本出史漢註、

蓋取_レ諸斯、而唱更國司等、乃有所議、請柵三要

嶮置戍以戍焉、於是十月丁酉、詔許之、其

置戍戍柵、則唱更事耳、所謂國司亦前此〔丙申〕為

六十、所置吏、而後八年、和銅二年六月、書薩摩・多楸兩

國司、當_レ即是也、但續紀註於其唱更國司等下、

為今薩摩國、然拾芥抄改名部、則據其註、遂以

唱更為薩摩舊名、近本居氏亦從之、且演釋曰、

隅隼人、一年一更、番直朝廷、〔職員令隼人司義〕

大隅薩摩等國、而番直朝廷、分番上下、一年為限云、又古事記、

隼人、為晝夜守護人、而仕奉公云、又神代一書、隼人等、至今不

離天皇宮牆之傍、代吠狗而奉事者云、史記正義所謂唱更、

義與此同、則隼人亦作唱更、我白尾氏亦從

其說、舊事記說云、唱更與譯同、而其譯則與番通事、本作

與譯異、今季安、據國司等所請事、以推其義、蓋

唱更戍卒、及國司等、上言所謂議爾、所謂唱更

恐非國號而後改為薩摩也、據和銅二年書薩摩・

多楸兩國司、則如國號、以薩摩為其名者、似

有明證矣、但其定之、據新田宮緣起、則昔三

州同名日向、或記〔云〕、和銅元年立薩摩云、

〔今季安按〕、在乎大寶二年置吏、以後至和銅二

年、凡為之間者明矣、則所謂或記、亦有其所承、

〔從可^レ知^ル〕也、^{〔可以知〕}自其阿多隸^{〔多隸〕}薩摩、為郡名、而大

隅尚隸^{〔隸〕}日向、亦為郡名、何以知^レ之、則和銅六年、

割日向國肝坏・贈於・大隅・始權四郡、^{〔行權〕}始置^{〔置〕}大

隅國、而後四年、靈龜二年^{〔五月〕}、書^{〔書〕}薩摩大隅二

國、又經^{〔經〕}七年、養老七年^{〔四月〕}、書^{〔書〕}日向大隅薩

摩三國之類、是其明証也、^{〔三十四〕}後^{〔後〕}天平實字元年、尚言^{〔尚言〕}西海道七

國、則非^{〔非〕}舉九州之語、蓋有^{〔蓋有〕}為而言耳、又多稱國、自^{〔自〕}大寶二

年後百二十餘年、至^{〔至〕}天長元年十月丙午、停隸^{〔停隸〕}大隅國、詳見^{〔詳見〕}文

粹及^{〔及〕}其^{〔其〕}為^{〔為〕}地也、層巒襲重^{〔襲重〕}、自^{〔自〕}神古時、所謂^{〔所謂〕}齊完

空國、^{〔空國〕}言^{〔言〕}不毛地、觀^{〔觀〕}仲哀帝八年、而田野未^{〔未〕}闢、如^{〔如〕}二隅

薩民、建國以來、未^{〔未〕}曾^{〔曾〕}班^{〔班〕}田、其所^{〔其所〕}有田、悉是^{〔悉是〕}墾

田、相承^{〔相承〕}為^{〔為〕}佃、不^{〔不〕}願^{〔願〕}改^{〔改〕}動、乃^{〔乃〕}太宰府奏^{〔奏〕}於^{〔於〕}朝

廷、若從^{〔若從〕}班^{〔班〕}授、恐多^{〔恐多〕}喧^{〔喧〕}訴、隨^{〔隨〕}舊^{〔舊〕}不^{〔不〕}動、各令^{〔各令〕}自

佃^{〔佃〕}焉、事見^{〔事見〕}

五十聖武帝紀天平二年^{〔辛卯〕}、後二十六年、大隅浮浪九百

三十餘人、^{〔雄略帝時、大隅阿多隸人等、奉詔搜集秦氏徒一萬八千六百七人、遂養蠶織絹、以納朝貢、事見姓氏錄、則今秦原郡、蓋于斯始、而此云浮浪、亦疑其類也、請建菱刈村、以為郡家、有詔許之、見〕}

六十孝謙帝紀天平勝寶七年^{〔五月〕}、其後又四十六年、收^{〔收〕}大

隅薩摩兩國百姓懇田、以授^{〔以授〕}口分、見^{〔見〕}

五十桓武帝^{〔延曆十九年十二月〕}、其稍闢^{〔其稍闢〕}地、以建^{〔以建〕}郡邑、

如^{〔如〕}此類也、自^{〔自〕}是後載、剩^{〔剩〕}百廿七、為^{〔為〕}延長五年、

六十醍醐帝乃勅^{〔忠平等〕}、酌^{〔酌〕}酌弘仁及貞觀之格式、撰^{〔撰〕}延

喜式、於^{〔於〕}是時也、定^{〔定〕}驛馬於大隅薩摩日向等、而

於^{〔於〕}日向、則曰^{〔則曰〕}長井・川邊・刈田・美禰・去飛・兒

湯・當磨^{〔廣次〕}・田^{〔廣次〕}・救麻・救貳・亞椰^{〔廣次〕}・野

後・夷守・眞祈・水俣・鳴津、各五疋之類、此也、

所^{〔所〕}謂^{〔謂〕}鳴津、見^{〔見〕}乎古書、蓋于^{〔蓋于〕}斯始、自^{〔自〕}延長五年延喜式

九十後一條帝年號也、迨^{〔迨〕}至^{〔至〕}其時、尚餘^{〔尚餘〕}齊完^{〔註之風、〕}

若^{〔若〕}夫水俣・鳴津^{〔亦多荒蕪、而未盡為一人有焉、〕}

當^{〔當〕}是之時、宇治關白賴通公、攝^{〔攝〕}政于

帝、而時之政柄、無^{〔無〕}事鉅織、出^{〔出〕}由^{〔由〕}此公、威權振^{〔世、〕}

朝野敬重、謂^{〔謂〕}宇治殿、或呼^{〔或呼〕}一ノ所、^{〔凡宣旨執柄、則賜一ノ所、稱一ノ所、或稱一ノ所、見職原抄等、今世兒女子所能解也、事見愚管抄、慈鎮所著、續古事談等、凡大臣以下諸公卿、則多所給官、而各請任之、如大宰大少監、亦此也、事見職原抄、〕}

各請任^{〔之、〕}如^{〔如〕}大宰大少監、亦此也、事見^{〔職原抄、〕}

參議

于時有姓平名曰季基者、乃為大監、居任於宰府、延曆二十五年五月、增加大宰府大小監、蓋願（監大小典各一員、見〔日本〕後紀）、因稱平大監、蓋願（蓋願）通公所請而任焉、〔而〕

按大系圖、頼通△公則御堂道長公男、而近衛基通公之六世祖也、寬仁元年三月攝政、三年二月關白、後此八年、為萬壽三年、（※次二取也）〔則鹿屋氏〕所世△藏島津御莊官等上疏所謂、宇治關白家當此公（而）明矣、且道長、薨于萬壽四年、歷事 一條

三條 後一條三朝、權傾內外、政在父子兄弟之間者三十餘年、子男繁多、榮貴最盛、公卿六人、女子立后者三人、其餘為妃嬪、遂至世相家一不_レ斷、宮媛赤染衛門著榮華物語四十卷、使讀者如目見其富貴也、而道長薨後、頼通相繼專權、治曆三年、請 後冷泉帝、幸宇治平等院、頼通年既七十、構山莊于此地、世稱宇治關白、朝政無大小、取決于此、（亦）事見國史略（※亦可併証矣、）

如三州、則宰府所管領也、（自宰府都督九國二島、見鴨原抄等、）於是乎、萬壽中、季基及其弟平判官良宗等、巡_レ察所

部、而抵斯地、周視原野、各相土地所_レ宜、季基乃拓艸菜於日之三侯、得墾田若干頃、而築館於益貫、（即今梅北、詳見下註、）邑而居之、良宗亦闢荒蕪於隅

之始良、亦自家焉、既而季基乃以下其所開墾田、皆請頼通公、受之券契、永為其莊園、（王臣家自多サレ、後紀大同四年九月〔庚午〕、開墾事、見〔日本〕）於是、殿下置莊衙於島津、蓋乃使富山氏祖等為之別當、掌其莊園、（說見下註、）因謂其莊曰島津莊、（據在官上疏、鹿屋支兼自記、得丸氏古系圖、愚管抄、續古事談、大系圖、國史略△等、）

按建久八年日向國圖田帳、則延喜式所謂、眞研水保・島津等、雖置驛舍、皆各地名、而並在諸縣郡、則曰三侯院七百町・嶋津院三百町・眞幸院三百廿町之類、此也、（長井、疑為村、在相模郡、川邊柔詳、或在肥後、疑柔詳云、刈田、在香取郡、圖田帳作刈田在三宮崎郡、）貳亞在柏杵郡・圖田帳則載三（美禰、今在土原領、有日美禰藥師者、去來、疑今加江田八十町、〔新名五十町、而美禰、日州有去川、在諸縣郡高岡郡、蓋昔通名也、兒島、郡名、當疑、疑今美禰、在兒城名峯者、野後、今諸縣郡野尻郡也、夷守、今湯郡、為三十町云、田字、說上疑、字、圖田帳、載吉田二十町者、小林郷、有嶽名夷守、又祠、難守權現、疑當其地、當磨未詳、一說、田字上下、疑有關字、宮崎郡有吉田三十町〕）疑當之、（救麻亦同郡、救麻野八十、若其然則、救麻）

町者、疑近之、救貳、諸縣郡數二鄉百六十町、救二院九町者、亦似之
應限野也、亦在三宮崎郡、為二十八町、而救貳、

在諸縣郡、曰救仁鄉、百六十町、救仁院、九十
町者、疑當此也、亞椰、疑今綾鄉、然「今」雲

州侯本、則椰字下、空闕一字、故又一說、讀

亞字連上貳字、以為貳亞、圖田帳柏村郡、載新名

五十町者、蓋當之云、未レ知孰是、〔去飛、今高

岡守、疑今小林郷、而檢・野尻・小林、並在諸縣郡、且小林、則有地名美

岡郷有地名去川、蓋皆遺名也、其餘未レ考、」

守、又阿羅守、據現、亦其遺証也、按續紀和銅六年五月令、凡古名郡屬山

〔但〕眞辛字、延喜式則作眞研、〔其撰眞研字〕蓋

野等、必擇所由、取其自古傳聞異事云、而〔去川字〕作去飛、蓋古

取諸霧島神或為三乘持三十握劍、眞研三魔石為二

義也、種諸社傳、霧島神

三段其一片飛去、在宮崎郡大島嶋平村、而其二片、今尚儼然、在諸

縣郡高城東霧島村、皆土人敬為神云、而今去川、則當去飛方、由是、撰名

島村、然阻眞幸、而隸三侯、蓋後世濫界爾、

去川亦式作去飛、其所截石、一片飛去、今亦

在宮崎郡大島平原村、土人敬為神云、而今去川、
則當去飛方、故得其名、可以知也、三侯、
亦式作水侯、〔亦〕蓋取諸今高瀬川有水派、而
今都城南郷梅北村等、古係三侯、事見玄兼自
記、與今三侯、則阻其界、蓋亦後世戰爭稍濫

界爾、按白尾氏名勝考、今都城、則往古呼為霧

海、或名都島、而到于今、謂高瀬川、尚呼水

海、皆採口碑云、荒鴻之世、洪水逆行、汎濫

於原野、廣遠渺茫、如水海然、則書記說

皇孫天降事、云立於浮渚在平處、亦應此也、

迨下季基等周視原野、關此地之時、蓋掘地而

注諸水路如今高瀬川、然後水由地中行、斯地

可因而居、亦足概知焉、而島津院三百町、蓋

其地、多在霧島麓、因得其名、取諸降自島

門、其撰島字、蓋本乎所謂浮渚、而配門字、

則所出入、而與戶通、或轉為津、夫津與門、

和漢相通、則古事記、泊舟津港、書某水門、或

三秦記、河津名龍門類、此也、是以、〔或書島

門〕或書島津、或書嶋戶、皆有上下出入之

義、萬葉、人磨赴築紫道所作歌、有島門語、

亦與此同、可併考也、但圖田帳、院本作破、

園田實好云、院破草體、微茫難辨、恐傳寫誤、

此說得之、今按二字書、有垣牆者曰院、又稱

官廨亦曰院云、蓋以官廨必有垣牆故也、又按續紀、延曆十年二月癸卯、令於諸國、新造倉庫、各去其間險乎十丈、曰、諸國倉庫、比近相接、一倉失火、合院燒盡、於是改建、隨處寬狹、量宜置之、又按後紀、十四年閏七月、申令諸國、新建倉院、宜須每鄉改置二院、曰、諸國建郡、多置二處、百姓之居、僻遠去郡、跋涉山川、有取納責、且倉覺近接、有失火憂、故令改之、今年租稅、輸納新院、但其郡家、於動物、依舊莫動、漸遷新院、置倉之法、依十年制、又其九月亥、更令諸國、建正倉院、曰、諸國每鄉、建倉院、追尋此事、頗乖穩便、今須彼此相接比近之鄉、於其中央、同置二院、村邑遙阻絕隔之處、宜量地便、每鄉置之、餘依前制、據此觀之、我藩凡曰院者、如水俣・島津等、亦皆首于此、可_レ以知也、而諸倉院、必置掌吏、令各治之、所謂某院司者、此也、故郡廣者、必分二院司、而自郡家言之、猶曰

郡司、蓋其實一也、何以言之、則如牛屎院、安元年八月府牒、元光之先世補郡司、知行郡務云、而建久八年圖田帳、則書院司元光、又文永二年十二月下知狀、書牛屎院司、而元亨元年十月下知狀、則載牛屎院司、此類尚多、可概知也、今據衆書參考之、則島津等地、勅建倉院、以稱院者、肇於

桓武帝延曆十四年也、而建驛家、莫詳其始、何年、然據延喜式、既立驛處、則知在以其以前矣、而至萬壽中、賴通公乃奏為莊園、蓋使季基等即其院、而置莊衙、以建莊號、繇是、島津自〔莊而〕言之、曰島津莊、自官廨言之、曰島津院、而當時為都會地、何以証之、安元二年下文所謂莊衙、則知其為莊衙矣、而其下文、今藏都城富山氏、亦按字書、所謂衙字、諸聚府而為所治名、則觀夫安元三年俊寬等赴謫亦先至于斯、可_レ以証其為都會矣、事見平家、所謂至日向國西方嶋津莊是也、而

速後世、其治之者、東鑑所載、元曆元年富山

義良應必是也、義良稱二郎大夫、當時右族、

詳見下章、夫所治府、必有官廨、而官廨必有

垣牆、凡有垣牆者、謂之某院、故如島津、雖

立莊號、猶或時而曰島津院、應亦依舊、

則按揖宿氏藏書、元弘三年、于島津院、有曰

右衛門五郎者、恣劫掠、至刈入田毛、於是十

月、嶋津莊日向方富山義道者、以聞乎我

道鑑公、是年二月、勸解由次官行智、奉後醍醐帝綸旨、以公為守護、十三日、

公乃命揖宿郡司入道成榮及土持入道掃部左位以督之、

居守護故也、義道稱七郎左衛門尉、〔蓋上所

圖、無義道者、蓋上所載富山義良之族也、義良之先、出自藤族、祖名宗義、

載、富山義良之後也、按富山系圖、義良姓藤氏、

稱藤大夫、以辨濟使居任於中郷、生男三人、長名義俊、稱藤次大夫、次義

祖曰宗義、稱藤大夫、為辨濟使於中郷、生男三人、

兼、稱藤四郎大夫、次清宗、義兼有男六人、長即義良、次義行、稱富山三

長義俊、稱藤次大夫、次義兼、稱藤四郎大夫、是

郎大夫、次義忠、稱長谷四郎大夫、法名行念、次義光、稱福屋五郎大夫、

為義良父、次清宗、義良蚤死、次弟義行嗣、稱富

山三郎大夫、又按市來系圖、富山二郎大夫藤原義

良、亦為日向國中郷弁濟使、有女、嫁鷹島郡藤內

良、此也、蚤死、弟義行嗣、今郡被臣富山氏、其後云、所謂中郷、固保島

康友、生康兼康村一名、友久等云、義道無見、疑疎漏

也、而中郷固係島津庄内、自頼通公創置莊

衙、于茲至元弘中、剩三百年、〔蓋〕在

其間、則富山氏世居莊衙、遙聽命於近衛氏

政所、以掌島津莊、安元年間下文所謂、別當

藤原朝臣等、應此屬也、而無世不順乎守

護者、亦足概知焉、然其明年為建武元年、天

下大亂、九州分裂、戰爭無期、則如日向之島津

莊、悉為足利氏屬郡、事見比志島氏古書、於

是、蓋尊氏乃遣若林左兵衛尉秀信等來、別建

惣政所於東日向地、以掌嶋津莊、由是、秀信

以島津莊惣政所、振名于世、而尊氏又割御莊

地、以穆佐院為御臺所湯沐邑、如新納院、則

以島津時久為之地頭、莊内北郷等、以島津資

忠為之地頭、語在後章、自是以後、島津莊惟

存其名、至如政刑、出自尊氏、則近衛氏之

失莊、亦應在此時、而富山氏所治莊衙、亦

繇是哀替、從可知也、秀信等所居惣政所址、

詳見_(卷)下註、而古莊衙址、今尋其地、則應永十五年所造佛像、書日向國島津院安養寺云云、又文明十六年所奠佛銘、亦有日向州島津院圓福寺阿彌陀云云之語、又天文十四年島津稻荷上梁文、有日向州島津御莊郡本之文、而圓福寺遺址、今在郡城中郷郡元村上之坊、又安養寺址、今為同村農民所居門名、又島津稻荷社、亦今尚儼然在同村、而里人相傳、今郡元村舊名鳴戸、然避國姓改郡元云、按上井日記、天正十一年猶書山之口與鳴戸之間云云、其改之亦在近古耳、據此、郡元則古之所謂鳴津驛、而同三侯・眞幸等、倉院建焉、至萬壽中、置之莊衙、新開一府、遂為殿下之莊號、亦應以知權輿乎斯也、愚嘗聞諸肥後盛賢、曰、嘗以刀筆吏、給事山本_(教授)〔先生〕於陽秋堂、頗廣聞識、如樺山氏_(所食)〔領〕島津、莫詳其地云、愚迨稿之、以為島津必當郡元、惜乎不告先生以其來歷、故亦併註焉、

先是、隅之正宮、每有興事、輒照和銅例、必募工料於三州田租者數百年矣、然長元中、季基乃奉神託、創伊勢及宇佐於其莊內、以祠兩神、為莊祈福、闔莊協然尊奉之、兩神謂之宗廟、而君臣咸無不敬奉者、(事)見神社傳所謂、御莊之惣鎮守、而世以三莊入一辨其修造、蓋乃殿下以奏於

朝廷、逾神所告、賜之宣旨、以號其社、曰三神

柱太神宮、如宇佐、猶仍其舊號、而使季基為大

宮司、世領其祀事、長久四年、弟良宗亦祠八幡於始良、事見神鏡銘及文明十二年肝屬兼連所新建文、但兼連(只)書承聞耳、而近季安聞諸始良息正田野邊甚感者、曰、願奠古鏡、自古為神、近及寺僧、聞而拜(之)鏡陰所出、實以圓(鏡)鏡陰所出

板、乃恭披之、(板)有文、則書長久四年平判官、加以花押、無常開者、尚能可讀、如近年事云、季安實得丸氏古采圖、所謂判官、為良宗明矣、而長久四年、至今茲天保五年、(文)久三癸亥迄八百九十年也

按莊官上疏、創兩社、則為長元中、而關荒

野、言萬壽中、明驗莫善焉、但雖由神告曰

號神柱、不言季基事、然鹿屋玄兼亦著是事

云、三侯神柱、則平大監夢謁伊勢、奉其神勅、

所_レ以創_レ焉也、因梅北氏、為_レ之社司、（稱）而略二年

月、今參證而併記_レ之、又寬文中、社司梅北兼相

稱_レ正演三世所承、以為社傳云、萬壽三年、季

基既關_レ梅北、將_レ建_レ家門、擇_レ材於大吉山、正月

二十日、召_レ役五百、雖_レ輸_レ其柱、重大（難孝）不_レ動、

季基有_レ女、時年六歲、往而觀_レ之、乃外宮託_レ女

而宣曰、祀_レ余於此、季基懼諾、乃遣_レ人報_レ實、

在_レ伊勢亦託_レ三七歲兒、宣以_レ是事、故遣_レ使告、

道遇_レ于縣、（延岡、）語則相符、（今延岡云）自古_レ所謂、伊

勢與日向之物語、此云、自_レ此別還、其年九月九

日、遂祀_レ于茲、（此）因到_レ于今、為_レ例祭日、又當_レ此

時、內宮亦現_レ於出羽之莊內、而祭_レ祀之、則及_レ

神柱二三分（本邦）、各鎮_レ其半、故謂_レ日本二柱

神云、（季安聞）諸本田親標、親標聞_レ之山澤禪枝、曰、禪枝

之嘗在_レ武也、過_レ出羽人、其人有_レ問、曰、聞_レ貴藩

有_レ地名莊內、而地甚廣、出羽亦同地名莊內、原野廣平、自

古相傳、兩地災殃、必同_レ其時、為_レ兄弟國云、若使_レ禪枝、誠

來由、應_レ必拍_レ手以對_レ之、惜乎無聞_レ其

及_レ之否、故註_レ于此、以_レ俟_レ來哲（焉已）、其所_レ託狀、與_レ

玄兼說_レ異、然大較同_レ焉、（則三代格所）謂郡領等

寄言神事、廢_レ公務類、（日本）後紀延曆十七年、亦

國造郡領職員有別、各守其任不敢違越、慶雲三年、（云）此云神託、

以來、令國造帶郡領、寄言神事勳廢公務（云）、

亦應_レ此類也、又大永七年募緣疏、日向州南鄉益貫

村神社宮、則平大監末基、萬壽三年、謁伊勢宮、

請兩分垂迹以祠莊內、巫祝許之、乃尊奉還創_レ之廟、

世謂日本二柱、即其一社云、又天文四年棟札、則

書島津御莊惣鎮守神社宮、皆_レ△_レ而_レ今都城梅北

村〔益貫之〕神社、是也、（而隣近有宇佐宮、在東宮許、

內等疏、則宇佐宮亦在_レ益貫、距_レ神社一東可_レ壹

町、而相馬勝善坊、為_レ之社司、自_レ古相傳、（以

為_レ末基所創建、而社今廢獅子）

為_レ平大監末基所創建焉、今歲獅子於社內、實

古、木像、書正應辰〔年〕七月、綾小路佛師定圓

〔按當正應〕五年壬辰、（廣）而莊官等△事也、（後）天

正十年、北鄉一雲〔又〕新_レ之〔云〕、（廣）事見祠官

疏等、又有春日社、在西可_レ二町、蓋領家氏神故也、

△莊官上疏所謂_レ謂_レ神社宮及△宇佐八幡、則指_レ此

明矣、凡_レ祭_レ兩社、歲十二次、其春冬仲所_レ祭二

次、行_レ於宇佐、餘〔皆〕祭_レ神社、而每_レ〔行_レ祭〕（有事）

自_レ古必使_レ富山氏攝_レ守護位、以世與_レ之、如_レ其

案牲、皆取諸都城云、詳見祠官疏、

而莊號亦準伊勢神領、特加御字曰嶋津御莊、
令勿關正宮等事、遂為永例、

據鹿屋氏藏島津御莊官等上疏、而按其引下領家
所世下文、陳所_レ以名_レ莊之狀、姑書于此、

凡加御字、稽諸東鑑等、自非「帝王」三宮
帝之祖母、及母與
妻、(謂之三宮)
領等、多係太神宮領、則遠江有

鎌田御厨、信濃有麻績御厨、又有仁科御厨、伊
勢有沼田御厨等、皆太神宮領也、
疑須可御莊
亦(係之)
又

宮領、則源氏所謂宇治御莊、東鑑所謂高陽院鳥羽后宮
御莊、或皇嘉門院崇徳后宮御領之類、此也、若夫近
衛領、非闕此類、無稱御莊、則如信濃大田

莊・越後紙屋莊・越前鮎川莊・法性寺領小橋莊之
類、是也、然稱御領有之、則東鑑註於大田莊・

紙屋莊等下、曰殿下御領、或丹波栗村莊為崇徳
院御領、亦見東鑑或日向國富莊為八條大院御領、見建久圖

帳之類、是也、兩院竝為鳥羽帝子而島津御莊、則按莊官
疏等、萬壽年間〔中〕、平大監等、以其所墾田、屬

疏等、萬壽〔中〕、平大監等、以其所墾田、屬

宇治閑白家、祠太神宮(宇佐兩色)〔等〕、而飭其事、以建

莊號、爾來、本莊二百餘歲、無佗貢稅、事見下
文、承元二年九月、建曆三年六月廿七日等數通云、然其疏久藏鹿屋氏、

未聞獨有表章乎世也、於是、季安乃忘固
陋、務稽古籍、原之終始、則所謂宇治殿時、

以宣旨官符、多掠公田於諸國、為己莊園、天
下書莫大焉、事散見平愚管抄〔抄〕・續古事談・

百鍊抄等、(而)又慶雲三年以來、令國造帶郡領、
寄言神事、ヤマシ動廢公務亦見類聚三代格、據此
衆書以考莊官疏、則實皆確說、而於其意、雖

有矛盾、(其必)有然、如合符節、以是觀之、
島津御莊、(之)其有御字、蓋本乎祀太神宮於其莊
內、而非當初承宣旨、必不可至私加御字

以廢公務、亦可推知也、又後治曆三年七月、
賴通公至準三宮、食邑三千戶、事見補任、或忠實

公、亦陞準三宮、封三千戶、受高陽院御莊五十
餘所、而高陽院乃公之女、イナ內為

鳥羽帝后宮、迨后宮薨、公受其御莊、以併家

領、事見東鑑・大系圖等、〔則藤定基答源君美亦而問答則曰〕述此事曰、后妃湯沐田、〔授之〕〔既界〕外家、不可稱湯沐田、又如功田、施入寺家、不可稱功田〔所謂莊號、自斯始云〕、應此類也。然今我藩所遺古簡、往往書島津御莊、或書殿下御領、則自二公之為二準后時、因循稱御亦似有謂焉、竝書所疑、以俟博識、但如白尾氏名勝考、則採三里人說〔文化中著須久塚記〕云、島津之為地也、舊係高千穗宮址、故加御字、則雖云爾、猶似未安、今也先生既已逝矣、嗚呼惜乎、不_レ起諸九原與質前說以考究焉耳、

由是、三州自墾而佃者、往往聞殿下薄其稅歛、皆願耕於其莊、累月積歲、地進界長、匪啻三州、遍及七道、遂至以流毒於諸國、迨寬德二年

距萬曆三十二年正月十六、
七十後冷泉帝立、乃下令七道、罷新立莊園、後二十四年、為治曆三年、十月五日、

帝幸宇治院等、七日、詔賴通公陞準三宮、封〔之〕三

千戶、如忠仁公故事、四年、

帝傳太子位、〔公卿〕補正是為〔皇大弟〕

七十後三條帝、

帝親聽萬機、多革前弊、〔延久元年五月改元四月、〕詔申敵令、停止自寬德後所立莊園、匪但限此、

雖在以前、立券不晰、而害於國者、亦悉罷之、以故、閏月、置記錄所、令正券契、天下大悅、

宇治殿威權於是摧衰、〔延久四年四月、〕遂削髮事佛、更名蓮覺、五月、

帝亦削髮、〔時年三十九歲〕、在位未幾、十二月、傳太子位、是為

七十白河帝、〔時年八歲〕

〔百鍊抄五〕

後三條天皇〔諱尊仁〕延久元年己酉二月十日云、廿三日、可停止寬德以後新立莊園、縱雖彼年以往、立券不分明、於國務有妨者、同停止之由宣下、閏二月十一日、始置記錄所莊園券契所、定寄人等、〔於官朝所始行之〕

帝立三年、賴通公薨於六年二月三日、〇八月二十八年八十

二月、〇八月二十八年八十

二、據百鍊抄・愚管抄、是則島津莊領家之開祖也、明續古事談・大系圖等、年十一月、補任、為十月十五日、男師實公、代叔父教通、為三關白、亦執三政柄、是為三領家二世、抑薩隅等、建國以來、各佃所墾、未三曾改班、事見續紀、天平二年、是以、如三島津莊、亦自三萬壽中、以三所墾田、隸三宇治殿、之私邑△〔特〕立^為御莊、券契昭晰、而非下新掠三公田類、則雖三延久後、尚立三御莊、如故、觀三莊官上疏引三世下文所以陳三之狀上可三以証三焉、

按三東鑑、至三鎌府治三鎮西、亦以三遠方故、不下與三餘國三同其例格、從三世下文、特處三治之、事見三寬元二年、又按三比志島氏藏書、凡開三墾荒野、如其租、則減三斗代云、見三天福元年執達狀、皆天平遺風、而〔猶〕治之、如在三制外、亦可三併知也、又源平際、(時)諸莊司者、尚多三乎世、則島山莊司二郎重忠、澁谷莊司重國、工藤莊司景光、下河邊莊司行平之屬、是也、疑皆島津莊類、而愚管抄等所謂、宇治殿〔所〕掠之遺莊也乎、(之遺莊、亦應在此等中也)

前此、季基有女、無男、可嗣△追伴兼貞將謁

鵜戶、而過三益貫、玄兼自記、作梅北、追書誤、季基乃迎、延坐與語、兼貞居之月餘、季基曰、余有三女、〔無三男可〕嗣、請使^(之)〔其女〕為三足下三侍執巾櫛、足下若諾、欲傳三足下三以我三侯耳、兼貞乃諾、遂娶三其女為妻、而享三其邑、如三季基意、玄兼自記、按三社傳、季基女、於三萬壽三年為三六歲云、〔推三量〕

之、長元九年得三十六歲、據此、兼貞娶之、則應三在長元・長曆間也、自是、季基別營三舍於箸野、以老焉、玄兼所謂其屋形址、在梅北與都城接三堺原野、到三于今三炳焉、亦應此也、神往傳則曰、季基御所、為其址云、應亦指此原也、距春日社可十町、今俗曰御所原云△△今、都城有地名屋形原、然其所、在與此合否、

(註考)而其創開三島津御莊、則在三平季基等、可三以知焉、兼貞既嗣、▽本姓伴氏△其先出、自三伴善男、因仍三本姓、無三易三平氏、伴善男、本大伴氏、其先出之子祖父廣、而至三父國道、避三淳和帝諱、改三父伴宿禰、為伴宿禰、事見國史、然▽兼貞後裔、所世藏△肝屬氏系圖、則為三智皇子大友之後、率合附會、特為三甚矣、故近季安、卒三於益貫、為三其後人、博稽三史籍、改正別為三譜、今不三贅焉、

即今梅北、生三男女各五人、長名兼俊、遷三辨濟使於隅之肝屬郡、因稱三肝屬太郎、是為三肝屬氏宗、今肝

大夫兼明、次名兼任、稱三次郎、是為萩原氏宗、次名其正曹云、

俊貞、稱三郎、是為安樂氏宗、次名行俊、稱四郎、

是為和泉氏宗、次名兼高、稱五郎、為齋宮介、

領祀神柱事、是為梅北氏宗、各以莊官、分異其門於島津莊之地、

事見玄兼自記及肝屬氏・和泉氏・梅北氏等藏書、

但梅北系圖、則以梅北氏為伴正曹、

為伴正曹、

※(頭注)

(實島幸日)

「近(訪里人云)、屋形原、在益貫村△春日華表坤位六町

餘、(而今無地名御所原、或本名御所云、箸野在末吉與梅北云、據此、屋形原與御所原、似非一所、尚標柱塚考耳)

接堺處距神柱坤位」

按兼貞妻、長元九年當十六歲、事如辨前、以

是推之、延久元年、則年四十九矣、凡女產子、

齒限七七、多為常數、據此、兼貞諸子、大抵

皆應生於延久以前、然稽事証、兼任則見文治

二年、兼高見仁安二年、而延久元年、距仁安二

年、九十九年、文治二年、為百十九年、且古系

圖云、和泉行俊曾孫成房、娶兼貞女、按兼貞則

行俊父也、據此、兼貞之於成房、為族曾祖、而

成房於兼貞、為曾姪孫、且兼貞女於成房、為

族祖姑、無配偶理、以是考之、則知悉非兼

貞親子也、故如行俊、非溯為兼貞祖兼行子

弟、則其曾孫成房、不可娶兼貞女、兼高等亦

後於兼貞大抵百年、多皆當其孫若曾、蓋古籍

闕漏、既無可考、後世為譜者、強雖追考、

〔難審〕叔姪、只賴後人各傳其別祖於倫為次

郎、或為三郎、為四郎之類、採載系圖、姑

如兄弟、故其有乖、如上所疑、然今也尚悠

邈、而莫由考究、姑從舊說爾、

嘉保元年、寬治八年十月改元師實公上表、讓男師通(續政)

関白、

七十堀河帝乃勅許之、師通公、則領家第三世也、未幾、

先父、薨于康和元年、年三十八、而后三年、師實

公薨、年六十四、補任則為六十、法號法覺、自厥五年、

為長治二年、忠實公為關白、十二月廿五日、乃師通公子、

而領家第四世也、初師實公第六子出為浮屠、名曰

覺信、嗣法賴信、陞大僧正、己為願主、創一乘院於南都、領祀春日事、春日乃殿下遠祖、而所謂△氏神也、覺信寂于保安二年二月八日、年五十七、乃以其弟玄覺僧正為一乘院別當、亦師實公第七子、而於忠實公皆叔父也、是年三月、

※(願注、㊦ナシ)

「公卿補任云、天永三年壬辰三月忠實公從一位、十二月任太政大臣、四年癸巳四月辭太政大臣、十二月停撰政為閑白」

七十鳥羽帝以忠通公為關白、乃忠實公男、而領家第五

世也、三年、忠實以隅之帖佐郷、為正八幡神田、

(據平山氏家狀)

「事見平山氏家狀、又」覺信之創一乘院也、蓋忠

實公等、割島津莊、以日之飫肥等為其寺領、

使長谷場氏・野邊氏等之先各就其地、皆領收納

辨濟事、

據貞和二年沙彌純阿等盟書及其明年執達狀長谷場氏藏書

文保三年伊作莊下司高純等上疏、而執達狀則曰、

春日兼一乘院領島津莊日向方飫肥云云、上疏亦曰、

本家近衛殿領家一乘院(領)之類、可併証焉、

四年正月、

帝傳(位)、七十崇德帝位△以忠通公為攝政、

如忠仁公事、而二月、

「七十崇德」帝即位、納忠通公女聖子為皇后、是曰

皇嘉門院、見長承二年、

鳥羽上皇納忠實公女奉子、亦為皇后、此曰高陽院、

亦見保延四年、僧行玄為天台座主、亦師實公第十一

男、而忠實公叔父也、六年五月六日、

崇德帝勅給忠實公年官爵、官乃據目史生、爵從五位下云、為準三宮、

而封三千戶、(亦)皆如忠仁公故事、忠仁公、名良房、乃忠實公九世祖也、清和

帝幼而即位、奉先帝遺詔、始為攝政、我大隅之深川院百

伍拾餘町、財部院百餘町、多福島五百餘町、新立

御莊亦在此時明矣、

據公卿補任・大系圖及圖田帳等、則帳所謂新立

莊七佰陸拾町、保延年中以後、新府不隨國

務、可証焉、

康治元年、初師實公第九子、亦出為僧、名曰仁

源、為天台(山)座主四十、亦忠實公叔父也、至

是、忠實公受_レ戒於東大寺及天台山、二年、忠通公

亦歸_レ佛、更名_二圓觀_一、〔據大〕久安三年〔丁卯〕、初

御莊政所下文、以_二伴信房_一為_二薩摩郡入来院辨濟使

別當、爾後信房、克懋_二厥職_一、輸_二〔任料〕_一於京師、

莫_レ敢懈_二焉_一、故_レ下文、補_二地頭於郡之山田村及高

城郡車内村、既而迨_二右衛門尉某_一、〔原姓中〕莅監_二莊務_一、

兼領_二車内地頭_一、於是二月九日、信房上解有_レ請、右

衛門尉乃使_二信房仍領_二山田地頭_一、如_レ故、信房_レ與

兼貞同其祖_レ高城郡司伴信章之第三子也、〔入来院〕

四年〔戊辰〕閏六月、忠實公獻_二〔西海所產綠毛龜〕_一

於

法皇、〔台記・百練〕所謂〔西海〕、亦疑〔御〕莊也、六

年、先是、忠通公辭_レ職、至_レ是復為_二閔白_一、父忠實

公愛_二次子賴長_一、而憎_二〔忠通〕_一、乃奪_二朱器臺盤_一、悉

授_二賴長_一、為_二氏長者_一、尋_レ忠通宅地莊園、絕_二父子

義、_レ於是_レ忠通惟_二〔有_二三備前采邑_一、不_二以_レ為_レ意_一、大日本史〕

仁平三年、島津莊_レ大隅寄郡、上_二御莊檢注帳_一、

亦見_二圖田帳_一、而寄郡解、詳〔見〕_二下建久八年_一

六月_レ註、

〔久壽元年十一月、

近衛帝勅、奪_二右衛門尉源為義官_一、坐_二子為朝在_二鎮

西_二橫暴_一也、〔台〕二年四月、勅_二太宰府_一捕_二源為

朝、保元元年七月、復_二忠通氏長者_一、賴長兵死、_レ

世所謂惡左府也_レ平治元年

七_レ二條帝立、以_二基實公_一為_二關白_一、〔補任、為前年八月〕乃

忠通公男、而領家第六世也、納_二平清盛之女_一、為_二北政

所、號_二白河殿_一、

〔保元元年忠通公復_二氏長者_一、有_二惡左府亂_一故也〕永

曆元年三月、清盛流_二源賴朝公於伊豆州_一、〔據大系圖〕

公之乳母比企尼_一、〔按時非尼、為〕及其夫掃部允遠宗、

往而仕_レ之、〔事見〕蓋尼之女丹後局_一、〔時年〕亦隨_二父母_一、俱

仕_二配所_一、語在_二後章_一、是歲、蓋領家薦_二惟宗廣言_一、

遷_二大宰少監_一、乃日向守基言之子也、

按_二作者部類_一・職原抄等、而載_二于此_一、則部類曰、

惟宗廣言、日向守基言子也、為_二筑後守_一、所_レ作和

歌、五首載_二千載集_一、一首載_二玉葉集_一、自_二承曆元

年、至壽永元年、少監・式部云、文雖甚微、
〔今按壽永溯承曆〕、壽永元年、距承曆元年、為二百六
 年、而永曆元年、得二十年、〔據是觀之、承永〕
〔則承永、草體字畫〕
 相似、傳寫必誤、可_レ以知_レ也、〔其〕據是觀之、而
 拜少監、在永曆元年、〔又其〕式部、終于壽永
 元年、亦可_レ推知_レ〔也〕、故置_レ于此、姑備考耳、
 其居_レ任也、巡_レ察所部、居_レ於日之島津、

據安國寺申狀・聖榮自記等、則申狀曰、廣言稱
 八文字民部大夫、為日向國司、居於島津、死
 于承久亂、又自記曰、得佛公御養父八文字民部
 大夫殿、初居島津、公居其址、故號島津殿、
 又一本云、初居島津歟、號島津殿、然今季安、
 按職原抄、大少監典、則所給〔於〕大臣以下
 諸公卿、〔以〕分其俸之官、而應大臣等〔或〕
 時所_レ求、〔以〕任_レ之云、〔據此〕據領家固為大臣、
 則安國等所謂廣言居_レ〔于〕島津、亦〔似領家〕
〔所遺者〕其所_レ請而遣_レ者也、但據三部類、此云民部、
〔作者部類、則作式部〕未_レ知孰是、安國寺在薩川内、〔應下〕為
〔式部之誤〕、

申狀者、莫詳道號、俗姓酒匂氏、稱二郎、〔國老於〕
 怨翁公、〔為〕老名、〔即今御〕家老也、應永四年、公遣
〔義天公〕〔其弟匠作君〕、〔時稱二郎三郎〕聘于博多、〔涉川〕
〔乃大岳公也〕、〔行〕探、二郎從_レ之、〔事〕見參津令、〔山田氏後改〕右
〔藏書、後改〕馬、〔前史〕重_レ致仕為僧、主安國寺、〔當是時〕而薩州
〔英查議〕持久〔改〕用久、〔為守讓代〕〔之攝守護也〕、屢問舊政、〔故其所〕
〔多聞〕對、則是申狀、則其對也、事見〔狀文〕及
 公室由来、於藩最為古書〔云〕、聖榮、姓山田
 氏、名忠尚、稱出羽守、乃

得佛公之七世庶孫也、以應永五年生、〔喜〕好先古
 事、〔聞諸〕道聖、多_レ所著述、則自記是也、道
〔屢訪〕聖、名忠朝、稱山城守、〔或呼〕雍州、亦公六
 世孫久哲君之次子、老更〔號〕道聖、居和泉崎、精
〔續陳等〕公室〔事〕故、聖榮及伊集院頼久〔等〕、就而
〔多聞〕〔聞之〕云、事見自記、後所引用、不悉註
 之、讀者〔觀此〕、可_レ以知_レ其為古書也、〔嘉〕
 是歲六月、〔二條帝〕流出前雲守源光保及子備前守

光宗於薩摩、坐〔謀不利〕也、〔事故〕日本史

應保二年二月、

〔八十七〕二條帝立、忠通公二女育子、為三皇后、乃

九十六條帝之母也、六月十八、忠實公薨、年八十五、

號三知足院殿、而歷二年、為三長寬二年、忠通公

薨、二月十日、年六十八、號三法性寺殿、又超二年、

為三仁安元年、基實公薨、七月二、年三十四、號三六

條殿、當是之時、領三神柱事、則伴兼高也、兼

高既襲三父職、為三齋宮介、有男五人、長名昌兼、

立襲三父職、次名兼盛、無後、次號三伊賀房、次號三

堅者房、次〔號〕兼政、並出為三僧、先是、大僧正

覺圓、補三長吏於三井寺、覺圓、前此六十九、則領家頼通

公第六子也、後又覺忠、自三天台座主、為三井長

吏、亦領家師實公弟也、覺忠年六十、叙于承元中、推此仁

〔莫所考耳〕又〔領家〕師通公之弟為僧、居三井者四人、蓋兼高

日增智、曰永實、曰仁澄、曰覺實、皆忠實公之叔父也、

既因三若有縁、遣三伊賀房及堅者房、往學三教於

三井寺、以天台・眞言為宗、見拾芥抄、而伊賀房然自三應

保二年、至三元安五年、領家忠實公及子忠通公

〔迄〕三孫基實公、相繼三世、薨於其間、故是歲、三

井寺座主、正應寺傳、為三品親王、未詳〔當誰、疑覺忠〕

遣三天台禪慶和尚等、奉三傳教所刻藥師像、見三寺緣記、

云、傳教在唐、獲赤栴檀於震旦、手刻三軀、其一來創三寺於

在比叡山、其一在越前樂山寺、而其一則此也、

島津莊内、館巽一里餘安久村、抑島津莊、肇三乎頼通公、

而如三財部・深川等七百六、益封於忠實公時、見上保

〔則如公、實可謂有功三於莊矣、故為三領家、

雖三所創寺、〕特取三公法號、曰三知足院、〔公所居知足

曰三醫王、寺號三正應、且奉三台教、則縁三公嘗受三戒

於天台仁源、見上康、亦足概知焉、

按三寺說、云、仁安元年、天台禪慶和尚、奉三三井

寺二品親王命、創三寺於此、置三十二坊、則天台觀

山之徒也、而歷三星霜、三百餘年、伽藍既廢、

及三山王祠一耳、降三永正中、〔自文正元年至永正

喜、就而新之、歷三四世、又廢圯矣、至三慶長

十三年、〔自永正元年至慶長 邑主北郷忠能〔乃〕又

新_(改)之、以_(改)文鏡房有政_(改)為_(改)主僧、十七年十月、忠能附_(改)之田租七百四拾石零、而為_(改)真言_(改)、則自_(改)有政_(改)始云、蓋中古廢圯、百四五十年矣、如_(改)券契_(改)亦從逸墜、〔故〕後興廢者、既已失_(改)仁安元年所_(改)創來由、而為_(改)之說、故今寺說、不_(改)親_(改)一言及_(改)領家為_(改)〔之〕檀主事、然〔今〕季安、按_(改)莊官上疏及大系圖等、以_(改)稽_(改)三世、則時方當_(改)近衛莊園、而忠實公等_(改)三世尋堯之時、無_(改)可_(改)疑焉、而寺說曰、

仁安元年、奉_(改)三台教、創_(改)三寺莊內、名〔曰〕_(改)三知足院_(忠實云)之類、如_(改)合_(改)符節、故書如_(改)上、且在莊官上疏所謂、當御莊社繪圖、或造_(改)營彼寺社云〔云〕之寺、亦指_(改)此等、可_(改)併証_(改)一也、

於是之時、基實公既薨、男基通公嗣、是為_(改)領家七世_(時禮)、而年尚幼、〔乃其母白河殿、知_(改)莊園事〕

北政所號白河殿、名曰盛子、乃清盛女、而參議重盛妹也、補任、參議藤原邦觀、東鑑文治三年四月之云、可_(改)併知焉、基房傳云、仁安元年兄基實薨、基房代為_(改)長者攝政、補任、基實妻盛子、靜海子也、基實薨、時綱、與清盛善、時應攝政在園盡縣基房、乃謂清盛曰、勿以在園屬今攝政、在其子基通尚幼、棋鏡莊園基房當盡得之、參議藤原邦綱、與靜海善、謂曰、殿下莊園必不可舉屬之、今攝政也、在昔唯法性寺殿併而領、昔惟忠通時雖併領之、他皆分割、況今基通、於白河殿、雖非所生、而義為母子、其餘皆有所分割也、況故攝政殿子、雖非政所之出、而義為母子、割而領之、何不可之有、靜海大喜、於是、基實莊園第宅古器

子、宜割領之、清盛大喜、於是、基實公莊園第宅、古器文書、多屬基通公、文書、多屬基通母子、基房雖為攝政、所領總與福寺、法成寺、平等院、勸學院、鹿田方上等數所而已已感管、見_(改)上清而白河殿、知莊園等事如初、故基房乃雖居攝政、惟受氏寺領云、則與福寺、盛女盛子、而小松重盛妹也、按補任、此年重盛則參議右兵衛督正三位也、七月十五日、法成寺、平等院、勸學院、鹿田方上等數所此也、事見恩管抄及東鑑文治二年、任權中納言、轉_(改)禪慶之創_(改)寺也、蓋伊賀房慶坊弟、兄右衛門督云、轉_(改)禪慶之創_(改)寺也、蓋伊賀房慶坊弟、兄弟亦還_(改)自_(改)三井、故父兼高、乃創_(改)西生寺於莊內益實、本堂四面、方凡壹間、奠_(改)三彌陀、又置_(改)脇坊六區_(院)等於其門下、明年二年功成、院曰_(改)大曼荼羅、三月二日庚、奠_(改)仁王於本門、一板_{(兼高所記銘、則書_(改)小數百年、造像既朽、其板出露、廣方五寸、疑即整寸、寺主乃取、今在鎮守山王祠中云、以_(改)尋_(改)譽_(改)上人、者房此、為_(改)開山僧、以_(改)兼盛_(改)為_(改)三千手院別當、兼政位至_(改)勾當、事見_(改)安樂_(改)氏系圖、皆為_(改)莊衙、祈_(改)其福_(改)一故也、}

據_(改)梅北氏系圖及弘安元年法橋舜應所_(改)新銘等、而銘則曰、仁安二年、伴兼高為_(改)之檀主、恭為_(改)莊衙_(改)祈_(改)其後福、而及_(改)尋_(改)譽_(改)創_(改)建于此、本堂四面、方凡壹間、後百十二年、為_(改)弘安元年、乃舜應募_(改)兼高〔之〕玄孫右衛門尉助兼及五世孫本鄉辨濟使左衛門太郎兼鄉、俱捐_(改)工料、其年八月、遂復_(改)新

〔北政所號白河殿、名曰盛子、乃清盛女、而參議重盛妹也、補任、參議藤原邦觀、東鑑文治三年四月之云、可併知焉、基房傳云、仁安元年兄基實薨、基房代為長者攝政、補任、基實妻盛子、靜海子也、基實薨、時綱、與清盛善、時應攝政在園盡縣基房、乃謂清盛曰、勿以在園屬今攝政、在其子基通尚幼、棋鏡莊園基房當盡得之、參議藤原邦綱、與靜海善、謂曰、殿下莊園必不可舉屬之、今攝政也、在昔唯法性寺殿併而領、昔惟忠通時雖併領之、他皆分割、況今基通、於白河殿、雖非所生、而義為母子、其餘皆有所分割也、況故攝政殿子、雖非政所之出、而義為母子、割而領之、何不可之有、靜海大喜、於是、基實莊園第宅古器

子、宜割領之、清盛大喜、於是、基實公莊園第宅、古器文書、多屬基通公、文書、多屬基通母子、基房雖為攝政、所領總與福寺、法成寺、平等院、勸學院、鹿田方上等數所而已已感管、見_(改)上清而白河殿、知莊園等事如初、故基房乃雖居攝政、惟受氏寺領云、則與福寺、盛女盛子、而小松重盛妹也、按補任、此年重盛則參議右兵衛督正三位也、七月十五日、法成寺、平等院、勸學院、鹿田方上等數所此也、事見恩管抄及東鑑文治二年、任權中納言、轉_(改)禪慶之創_(改)寺也、蓋伊賀房慶坊弟、兄右衛門督云、轉_(改)禪慶之創_(改)寺也、蓋伊賀房慶坊弟、兄弟亦還_(改)自_(改)三井、故父兼高、乃創_(改)西生寺於莊內益實、本堂四面、方凡壹間、奠_(改)三彌陀、又置_(改)脇坊六區_(院)等於其門下、明年二年功成、院曰_(改)大曼荼羅、三月二日庚、奠_(改)仁王於本門、一板_{(兼高所記銘、則書_(改)小數百年、造像既朽、其板出露、廣方五寸、疑即整寸、寺主乃取、今在鎮守山王祠中云、以_(改)尋_(改)譽_(改)上人、者房此、為_(改)開山僧、以_(改)兼盛_(改)為_(改)三千手院別當、兼政位至_(改)勾當、事見_(改)安樂_(改)氏系圖、皆為_(改)莊衙、祈_(改)其福_(改)一故也、}

據_(改)梅北氏系圖及弘安元年法橋舜應所_(改)新銘等、而銘則曰、仁安二年、伴兼高為_(改)之檀主、恭為_(改)莊衙_(改)祈_(改)其後福、而及_(改)尋_(改)譽_(改)創_(改)建于此、本堂四面、方凡壹間、後百十二年、為_(改)弘安元年、乃舜應募_(改)兼高〔之〕玄孫右衛門尉助兼及五世孫本鄉辨濟使左衛門太郎兼鄉、俱捐_(改)工料、其年八月、遂復_(改)新

之、時以舊堂隘不容衆故、廣其四面、各為三間、既而落成、二十九日、舜應為銘、按舜應亦兼高之五世孫、而系圖載我上房、即此人也、見安樂氏祠（一）法尋譽、為「孫」弟子、但舜應銘、古系圖（二）莊衙御願大曼茶羅院、而莊衙二字、安樂氏所藏古本作「座衛」、字畫相似、恐傳寫誤、據其所謂莊衙御願（三）「之語」、則為領家所建者無可疑焉、然銘所載、不言寺號及山號、只有院號一耳、按明應九年、新納忠武所新文、則曰西生寺大曼茶羅院、亦無有山號焉、而如其載仁安二年尋譽（四）創「之」兼高開基焉、或弘安元年舜應募緣、兼鄉施資之狀、亦與銘合、無可疑也、然寺傳云、小松重盛、寢疾、佛夢之曰、創寺霧海、斯為淨土、重盛敬諾、忽得平癒、乃遣大橋中將、建寺於狹野、因號霧島山西生寺云、後有神童、告尋譽曰、不出三日、山將震崩、宜避寺地、徙三里外、於是、仁安二年、南行七八里、而移四十二坊及六區末院於

今地、今西生寺則在邑主別未幾震裂實如其言、質諸弘安・明應所置古書、不與此合、如上所載、試於本堂、舉其廣狹、以論真贋、則弘安銘云、舊堂四面為方壹間、而廣之造方三間、然寺傳則曰、作七間四面、推是觀之、其諸巧辭誇宏麗者、皆出平後僧無稽而妄偽作焉、固不足辨也、然仁安元年、基實公薨、而男基通公（七）時尚幼、嫡母白河殿（北政所）寡居、而遙聽莊事、如上所叙、且據弘安銘有莊衙御願之語、蓋基實公之疾也、白河殿與其兄重盛（小松）等一議、遣大橋中將者、來勸兼高、創寺於莊、以有告禱、亦非無謂焉、若其然、則寺傳重盛、疑當基實公、傳聞有誤、可以知也、但莊官上疏所謂、當御莊神社之於其社、固有明文、則為今梅北之神柱及宇佐者、明矣、而如其寺、皆略名號、然今季安、推時與事、則亦指此梅北之西生寺及正應寺、從可知焉、據此考之、當近衛公之先世領島津莊、其為領家所建神社、蓋

莫先於此神柱・宇佐之兩社及正應・西生之二寺也、觀夫莊官上疏等、可併証焉耳、

開山尋譽、嘗航于宋、本書唐、推時誤、而其還也、移白梅

樹、來栽寺地、多歷星霜、枝繁着地、如無根

所托、故名無根梅、今在二山王社之後、兼高子孫、

移家其北、一說枝、向北繁、因號梅北氏、於是、地亦改

益貫、名曰梅北云、

梅北氏說、則為兼貞時事、然與梅事大有矛盾

植、必傳聞誤、古梅既枯於寬文以前、更栽稗

梅(在)存其址云、

嘉應二年四月、(八十五高倉帶勅)伊豆人狩野茂光、誅(源為朝於大島)大島流人

源為朝、保元物語、

▽承安五年七月、改元安元、八月十四日(猶書承安、蓋未達也)御在

政所別當執行伴朝臣、別當漆島宿禰、別當執行藤原

朝臣、各一名、皆書花押、不可考、別當藤原朝臣、三名、同上、別當漆島宿

禰、同上、別當伴朝臣、三名、下文居民、使勾當僧安

兼為大隅寄郡百引村辨濟使職以務勸農、徵納莊國之

課役、十二月、御在政所目代散位伴朝臣、別當執行

伴朝臣、別當漆島宿禰、別當執行藤原朝臣、各一名、

皆同、別當藤原朝臣、三名、同上、別當漆島宿禰、一名、別當

伴朝臣、三名、下文部內、使百引村辨濟使勾當僧安

兼、執行一事、按伴朝臣、皆梅北族、藤原朝臣、皆

富山族、而安兼亦富山義良次郎大夫之五弟、稱富山勾當

者也、詳見下註、

〔安元〕二年(距仁安二年)七月、島津御在(可抄所)

下文、以勾當僧安兼為大隅寄郡百引村辨濟使

職、(前此、安兼既補本職、然猶部內未悉服、故安兼乃陳所承、以求出職、初僧安兼、陳三世所承、以求襲職、至是

任遣、乃下文莊衙、令亦識之、

▽載右下文(皆)據都城臣富山氏所世藏書、所謂莊

衙、則萬壽年間、所名莊而置焉、今都城中

鄉△郡元村應其址也、詳見上章、可併考焉、

▽野宮黃門答新井白石、言在園事曰、凡領之者、

悉取其土毛、季安按應、一圓莊也、私置奉行、謂之莊司・莊官・

別當、而勾當亦大抵猶別當云、今閱富山系圖、書

曰富山勾當安兼、猶曰齋藤別當實盛、亦黃門曰、

實盛之先、出自魚名、而其齋藤、乃安藤・近藤之

類、而諸藤之一氏也、本越前人、至實盛時、事小松内府、内府多莊園、乃使實盛為別當於武州長井莊、據此觀之、宜稱長井莊別當藤原實盛、然以姓氏繫其職名、而省莊號、故自古至使人疑云、富山亦氏、則實此例也、今季安按、所謂莊官、蓋泛言官吏、而莊司言其官長、如別當、則言皆會政所與聞莊事者、要之、總是近衛家人、分而言之、曰中郷辨濟使富山次郎大夫藤原義良、或方郷辨濟使左衛門太郎伴朝臣兼郷之類、蓋應是也、後此十年、元曆二年〔七月〕、幕府下令、戒征平將曰、勿劫害日向住人富山義良〔二大夫〕以下鎮西準御家人之屬、事見東鑑、據此、義良當時右族、〔如〕冠鎮西者、可概知焉、而其掌莊衙、〔且〕及梅北、自古竝稱者、亦應〔是〕也、近世元祿十年五月、富山六兵衛、陳世所伝曰、得佛公之就封、亦特遇兩家、猶遇父母、而每有事於神柱及宇佐、輒公親臨之、既而後使富山氏攝守護位、以世與之云、於是乎、迨近衛公

既失御莊、〔亦惟兩家尚居故地、而如富山氏〕尚如富山一世居其地、珍藏若書、

到于今、〔稱御名代、多隨邑土、以與祭者〕亦每有祭事於神柱及宇佐、則自上古、必攝守護位、以世與之云、似有謂焉、

百引、按建久八年圖田帳及建治二年石築地賦、

則有田拾參町、而隸島津御在寄郡小河院七伍五拾餘町之内、但寄郡解、見下建久八年註、

是歲秋、薩之光武、在牛屎院、名主國吉九郎、及嶋津莊官等、按圖田帳、牛屎院有御莊寄郡幸萬五十五町、取牛屎院町、而置辨濟使、此云莊官、疑此也、

〔司〕太秦元光所作貳拾伍町三段之田毛、元光善相撲、屬右近衛府、前此、自府遣番長和氣光里等、為府使焉、以故三年二月、及元光等、以聞于衛府、於是四月、右近衛權中將使右近將曹惟宗清榮等、牒命光里等、從理禁侵、以取國吉所、

稻悉還元光、右大將、按補任、命也、此云右大將、則平宗盛、當權中納言平宗盛明矣、據補任註之所、

據下柁城臣桑波田氏所家藏、安元三年四月文書及建久八年薩摩國圖田帳等、參證載之、又按職原抄、將曹及番長、則皆選於近衛舍人、學用

之、多為例云、

六月十八、相國清盛、流平判官康賴、丹波少將藤原成經、僧都俊寬於鬼界島、道入日向、西至嶋津

法勝寺執行

莊、出三十卷、若長既而皆赴諫於沖小島、八月、

改為治承元年、成經・康賴〔乃〕告禱於熊野、遂

物語

祠諸島、〔未幾〕二年七月、召還〔流人藤原〕成

經・〔平〕康賴、長門本平家物〔二士遇赦回都、俊

而俊寬竟瘦死于島、墓尚在焉、由

寬竟瘦死、墓尚在島、由成經等既回、世人往往

成經等遇赦回都、至世人亦

知海西有疏黃之島云、所謂俊寬足指石及熊野廟、今尚

疏黃、事見落居奉書、又明應八年、怨翁公時、獻室町

島陰雜著、而其名鳥說、愚別有所著、今不復贅焉、見

按嶋津御莊、肇於萬壽、見莊官上疏、然於原

文書嶋津御莊、而存乎今者、季安得親讀

之、則自此安元中下文等始也、後三四年、而

得佛公生於治承三年、然

公之就封也、右幕府頼朝嘗聞薩摩多嶋與津、

而謂

公呼嶋津殿、事出古今戰、又僧文之著歷代歌

亦云、始領三州曰嶋津、繇是、世人或至下間

誤此事謂嶋津稱始自

公領三州、然今季安博稽衆籍、其為國姓、則

雖似然、至論莊號、恐未精覈、則可下觀上

所叙以解其疑上焉也、但古今戰、大島忠恭所

著述云、觀其為書、上肇於國常立、下訖于

天正戰爭、按忠恭稱出羽守、義天公第四子有

久之後、而從

松齡公師于朝鮮、所著有紀行等、如古今戰、

蓋寫古人著書、補入以近世事耳、

管窺愚考卷之上 終

起艸於天保壬辰十月、脱稿乎癸巳二月二十五日

共四冊

伊地知季安家藏

(1) 蜜、恐密、

(2) 下廿一枚黃白問答ノ註コ、ニ入、

(3) 忠平上當補藤原字、

(4) 格字、恐當削、

(5) 者字、似可削、

(6) 柏、疑白訛、

(7) 柏、疑白、

(8) 源氏、蓋源氏物語也、當作源語、

(9) 黃門云々八字註、宜改作野宮中納言定基卿・新井筑後守問

答也、中納言唐名黃門、君美号白石、因名曰黃白問答、三

十七字、分註卷首黃白問答之下、玩古按黃白問答一名新野

問答、

(10) 六枚下ノ忠仁公ノ註コ、ニ入ベシ、

(11) 按知識拙記、師通公不為撰政、故削之、

(12) 此註上ノ六枚忠仁公故事ノ下ニ入レ忠實公九世祖ヲ頼通公六

世祖ニ改ムベシ、

(13) 寡婦如何、夫未死、

(14) 筑後、家藏本作筑前、傍註朱書異本作後、

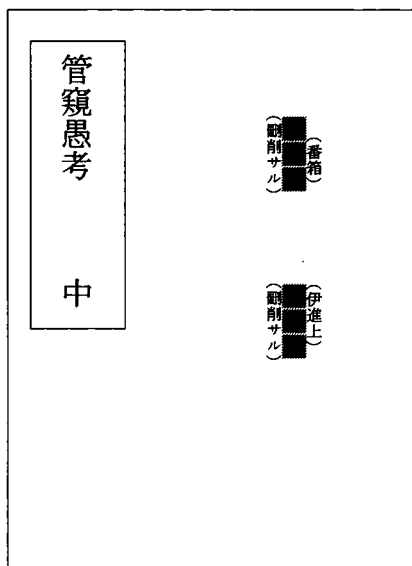
(15) 承曆、家藏本作永曆、

(16) 持久乃義天公ノ第二子、

(17) 兩家、謂富山與梅北也、

管窺愚考 卷之中 稿

(中表紙)



(表紙)

(中表紙裏付箋)
 □□△△此ノ如ク印アルモノハ註ニ二行ニ書入ルベキ印ナリ

管窺愚考卷之中

魔府 潜隠 平季安 謹撰

(朱角印、印文「伊地知氏珍藏」)

○治承三年己亥、領家基通公年甫二十矣、十一月^{〔十七〕}、
 高倉帝^{〔乃〕}以基通公為關白、是歲、我

得佛公生於攝州住吉、謹按、

公本姓源氏、乃右幕府^{賴朝}之庶長子、母比企氏、

曰丹後局、丹後局、其先藤族、父名遠宗、^{一本、遠長、}

稱掃部允、母曰比企尼、初丹後局之生也、長

幕府一年、而至明年幕府生、其母比企尼、^{按時未、尼、迨}

^{後寡居為尼、}乃為之乳母、既而迨^{スレテ}幕府未^ニ成童、

^{有以此號耳、}遙放^中豆州、比企尼縫紉傷^レ別、乃請^ニ稅駕於比企郡、

^{稅駕猶、}及^ニ夫遠宗^ト從^ニ豆州、俱奉膳厨、以竭^レ忠

者二十年于茲矣、丹後局亦隨^ニ父母、仕^ニ于蛭島、

遂得^ニ幸於幕府、而有^レ妊^マ焉、

據三東鑑・武家系圖・酒勾安國寺申狀・山田聖榮

自記・公室譜牒・公室由来・古今戰等、而公室譜

牒、以三丹後局一為三比企能員妹、聖榮自記同之、

然或為三義員娘、公室由来亦作ノ妹、或以三義員

為三局第一語亦出ニ文中、安國寺申狀・古今戰竝為

能員姉、凡諸古書矛盾如ノ是、則必其有ノ誤可ニ以

知一也、故今季安、按三東鑑、則治承五年十月十日、

義員姨母號三比企尼、嘗為三幕府乳母、迨三幕

府(遷于)〔赴三〕豆州、(不忌遠別、本謂所於武州比企郡、所謂請所、按尾民及

肝氏藏書、凡所定租入、自辨請文、不論本年輪因、必輪租、否奪其地、謂之請所、事

比企郡一為三之請所、詳註矣、博識耳、)自三永曆元

是嘉二年九月廳宣、或天正廿一年正月鎌田政近等與肝氏書、及夫掃部允、俱往端忠

※ 頭注、(カキ入)

按寺尾氏所家藏正嘉二年九月廳宣、以入来之塔原為地頭平

重經請所、其略云、宜以所定租、不論水旱損亡、每歲輸之、

如其請文、若逋欠則罷請所、勿敢違矣、又按天正廿一年正

月鎌田政近等與肝付中将書云、有正宮領七十壹石四斗八升

零、在加治木中将請令佃之、不論風旱水損、年輸其租四十

五石、政近等許之、乃呈請文、據此所謂請所亦可併知也」

年一至三治承四年秋、實二十年、於ノ是、今幼君

原文為若公、按顯家兄、(然)之生也、舉三尼之甥義員

無三系圖一應是天也、)為三尼猶子、而使能員妻亦為三幼君乳母一以特報

尼之忠功云、又其明年、養和二年九月三日、政子

之孕也、幕府令ノ帶之、丹後局乃陪ノ膳云、又

能員妹、則有下為三武藏守義信妻一者、出ニ文治四

年、不書其名、而公亦為三能員緣坐、見三建仁

三年、然不詳何屬一稽之武家系圖、能員則繫三

遠宗子、然亦不載下其為三猶子一或有三妹丹後局等

事、應疎漏也、於三遠宗、則稱三掃部允、其如三

豆州、朝夕進ノ食、以忠三於幕府、亦與三東鑑一如

合ニ符契、為三比企尼夫、無ノ可疑焉、而我藩舊

乘、謂三丹後局一為三能員妹、或為三其姉、或為三其

娘、未ノ觀下其獨言能員本比企尼甥而為三尼猶子

者、今據三東鑑書三尼猶子、知三遠宗歿為三寡妻猶

子、以是觀之、能員非三必遠宗親子、應三別有

生父也、又其所ノ書姨母字、今按三字書、為三母之

姉妹、據三比比企尼、則與三能員之母一為三姉妹一明

矣、而參_下諸舊乘為_二能員妹_一之說_上、則比企尼之於_二丹後局_一、亦為_二姨母_一、雖_レ非_レ無_レ據、舊乘所_レ載、於姊妹娘〔間〕、猶未_レ免_レ誤、且東鑑亦不_レ詳_二其屬_一、只為_二緣坐_一、今由_二舊說少_レ所_レ証、以參_二考之_一、則丹後局、應_二必比企尼所_レ生女_一也、而於_二能員_一、當_二養妹_一也、何以言_レ之、丹後局、則以_二八十二_一、薨_二于安貞元年_一、推以逆量、生_二於久安二年_一、而幕府生_二於其明年_一四月、事見_二邦乘_一、據_レ是考_レ之、比企尼之為_レ乳_二母於_一幕府、亦所_レ以由_二乎丹後局_一既生而上_二其乳_一焉也、果如_レ所_レ考、則幕府與_二丹後局_一、諺有_レ之、為_二乳兄弟_一、無_レ可_レ疑焉、於_レ是乎、永曆元年、幕府之放_二豆州_一也、丹後局年十有五隨_二父母_一行、俱上_二食於二十年間_一、無_レ與_二比企尼等_一異_上焉、何以証_レ之、〔近按出水氏所藏舊記、始稱丹後殿、仕於御末方云、又〕觀_二東鑑載_一丹後局陪_二膳於幕府_一、▽或出水氏古簿、載始稱丹後殿仕於御末方之類△可_レ以知_一也、是故、得_二幸於幕府_一、至_二以孕_一公、何疑之有、若非_下

與_二其母尼_一俱仕于御末〔_上〕以進食於朝夕▽之久△_上、何為得_レ幸_レ焉乎、可_レ再觀_レ是以_レ知_レ無_レ疑_レ乎、比企尼與_二遠宗_一生_二丹後局_一而局與_二幕府_一生_甲△公▽於蛭島△也、於是乎、公孽_二幕府_一、傳在世吻、則太閤西征、及_レ藩成亦惟由_レ斯、事見_二其譜_一、又台德廟召_二見貞昌_一、亦語及_レ之、松齡公聞而為_レ榮、出_二其文艸_一、蓋為_二慶長十八年事_一、然先史河野通古之上_二東都_一也、松平安心軒、松浦内藏允等會_二于我邸_一、觀_二藩之古乘_一、而有_レ問焉、曰、何因謂_二太祖_一為_二幕府之胤_一也、願覩_二證簡_一、以聞_二其詳_一、通古對曰、匪_二啻_一、太祖、雖_レ到_二後世_一、未_レ覩_レ獨有_中著_レ文證_一吾子_一者、今人猶然、況於_レ古乎、但夫叙_レ官封_レ國、則所以賞_二有功_一也、暨_二幕府開_二鎌倉_一、未_レ輕授_レ人、然太祖生七歲、乃叙_二左兵衛少尉_一、封_二之數國_一、賜_二

之宗器、非_二幕府子、何以至_レ此乎、凡物至誠、則能動_レ人、稠坐聽者、(非信服)〔無_レ不_レ服_レ之、〕事見_二先

史重英疏、此說為_レ然、若_レ夫北條時政・和田義盛・

畠山重忠・梶原景時之徒、皆當時功臣也、而景時

稱_二平三、重忠稱_二次郎、義盛稱_二小太郎、時政稱_二

四郎、未_二獨叙爵、可_レ觀_レ是亦知_レ其所_レ寵異

公也、然猶_レ▽水戶侯修日本史△荒井白石著藩翰

譜、(皆)至_レ下疑_二

公為_二幕府子、以弘_レ妄說於天下後世、是故季安

慨然博稽_二古籍、坐忘_二愚管、欲_レ演_レ地在昔丹後局

所_レ以得_二幸於幕府一而_レ〔有_レ孕〕(生)

公之根源、以閉_二世妄說、竊紹_レ通古等之意、斯

註_二微意、而歎_レ博識更有_レ正焉爾、

先_レ是、北條時政以_二其女_二妻_二幕府、是為_二夫人政

子、政子聞而怒_レ之、幕府在豆、悅龜前、治居鎌倉、追_二亦猶愛_レ之、政子怒、事出_二東鑑_二

諸攝津、將_レ候_二風潮_一以放_レ日向、

據_二古今戰、而安國申狀則曰、將_レ流_二日向、而出_二

鎌倉、又公室由來、亦將_レ沈_二繪島、故流_二日

向、按時局猶仕_二於蛭島、▽稱丹後殿△然言_二繪

島、或言_二鎌倉、皆追書誤耳、荒井白石讀規_二其

誤、亦應_二此說也、故今季安從_二古今戰、註辯_二誤

爾、但公室由來、此云_二御當家由來、撰者未_レ詳、

今季安觀_二其為_レ書、則說_二僧天祐事_二云、勅號東

堂今福昌寺、此也、按_二勅賜_二天祐佛智法燈禪師、

為_二永正六年八月事、而其居_二福昌、迄_二二十五年、

則此書成_二於永正中_一者明矣、然其篇中、載_二後

世、(事)至_レ如_二少將忠恒公、是必後人所_レ屬_二於慶

長中、非_二皆永正本文也、嘗讀_二伊集院兼誼所_レ寫

本、既有_レ評焉、曰、永正古書、而真贋錯見、粗

述_二其事、標_二識上層、以還_二主人、既而未_レ幾、木

脇祐賢、假_二伊集院久美_二俗稱_二所_レ藏_二古本、卷尾_二錄_二名曰

花押、蓋_二寫_二以亦示_レ愚、愚拍_レ手而嘆曰、有_レ是哉、

愚疑久矣、此實永正本也、乃僞_二前事、以商_二量

之、(愚)余所_二參正、寸毫弗_レ差、永正後事、無_二一驛

之、據_二此考_レ之、

居坊龍巖、一乘、振名乎世、永正五年、迨公

拓利於城府、召為主僧、大今大興寺也、而所著、

有真俗二諦常住記或云、顯政筆記、疑此、酒勾系圖等二云、今

據西由來多言三僧事、且載酒勾次郎居安國寺等、

事七精於他書、則亦應賴政所著也、而如後

事、亦按其人、則長谷場宗純所為、頗庶幾焉、

稱越前守、為人好古、慶長中、著翰游集、又

寫往言集・文明記等、各跋〔其尾〕、據此、所

屬應必宗純之徒也、併註于此、〔未簡〕、據此、所

於是、幕府陰使一脱其弟為兄、能員等奉之以逃、

曰、所生女、則惟汝所為、男則報知、據公室由來、而今戰則曰、

幕府命時政、行至攝州住吉、舍館未定、安國申狀・公

惟如其所為、室由來竝云、住吉俗特忌不淨、古今戰為云、遂跪石、而生男於社下、住吉松原、是

即公也、時日既暮、雨亦滂沱、乃狐火照暗、若自

神祐、

據安國申狀・公室由來等、而皆曰、本藩謂狐

為無名殿、且公室之將有禎祥也、狐必發

聲、而雨亦為瑞、皆首于斯云、古今戰、則其

產也、雨濯不淨云、又安國曰、聞諸黃菴云、

嘗如京、觀遺石、又由來曰、局所〔應〕產石、距住

吉社〔南〕在古池側云、又出水氏所藏古書曰、石

在松原、大旦平云、今聞諸人、距社壇西齋垣側、

而非社南云、按伊東譜、迨寬永末、肥後守祐昌知

邸京師、石猶在社邊、土人相傳、唱島津石、為

公生所、而未設垣焉、祐昌乃聞寬陽公、命工練

以石闌〔云〕、凡此石有石闌、自斯始云、可併

知也、

明且、會領家基通公謁社、聞兒〔二〕而異之、從

者告以其實、

事見邦乘、然安國申狀則曰、住吉神主聞此事、

乃以告御所、而舍之云、今季安按三大系圖、治

承二年、津守長盛補神主、四年叙從四位上、據

此、安國所謂神主、當此長盛明矣、

基通〔公〕乃取公及局、而歸、令鞠於其第、亦見邦乘、

按丹後局逃自_二豆州_一、而生_二（ウツミヤノ）

公於住吉之時、猶未稱局、出水氏〔所藏〕舊

記〔言局事云始稱丹後殿、仕于御末、〕迨後得寵、

〔進〕号曰丹後局、云、是也、又按東鑑、丹後局

陪膳於幕府、事見養和二年_{三月}、凡膳厨

所、俗謂御末、可併觀也、凡局稱局、見于古

書、蓋自斯始、據此考之、前年、幕府嘉尼

忠功、擧甥能員為其猶子、以報功勞、亦見

東鑑、_{見上註治}蓋局、嘗隨_亦母尼、勞於豆州久

矣、故幕府賜以嘉號、猶賞尼例、_{（書記所謂、後}

得寵號丹後局云、應是也）

焉、_{（但當時別又有下曰丹後局者二人、其一則}

〔頭注、㊦ナシ〕

〔百練抄七〕

壽永元年十二月四日、院女房丹後局淨土寺堂供養

為實朝卿御臺所女房、按承元四年、〔初〕實朝卿

納坊門大納言信清之女、為御臺所、於是六月、

坊門殿〔乃〕為之裝、_{（送、乃シム）}使其女房丹後局發京

齋行、道至駿河、為盜所奪、十二日、局至

鎌倉、報以其實、亦見東鑑、是歲

公之母堂丹後局、則年六十五、既應在藩、據

此、母堂雖居京、亦非無其事、既且嫁人、

此云女房、應必補其闕、而同局號者也、又其

一、則為

後鳥羽帝宮女、而生高辻内親王、事見大系圖、

〔按〕質諸日本史、作丹波局、未知孰是、然據

名〔曰〕石、以舞女得寵云、〔未知孰是、帝

之太子為土御門帝、生於建久六年、而

公母堂、時年五十矣、況太子與内親王之於

倫也、為第十二女、則知内親王生猶在其後

而

公母堂亦益老矣、據是觀之、所謂宮女之丹後

局、則非與

公母堂一人、〔亦無疑焉、雖然、世或間惑若

同號者、至

公母堂亦有疑稱局、而仕配所者、故今季安、

粗辯于此、以俟博識更有正焉爾、

※(頭注、㊦ナシ)

「カキ入

治承三年十一月十五日、以二位中将基通卿為関白内大臣
氏長者宣下、見百練抄八」

○四年▽庚子△二月、

帝傳_レ位於 太子、是為_二

又_レ△安徳帝、時在_二襁褓、

七_レ後白河上皇尚聽_二萬機、乃以_二基通公_一為_二攝政、四月、

帝即_レ位、時年三歲、進_二基通公位、陞_二從一位、於_レ是乎、

〔其〕北政所_レ位子亦陞_二從三位、〔按類史云、右大臣藤原良房進
正二位、夫人源深姫叙從三位、事見類史、蓋此例也、乃〕

〔臣良房階正二位、加其家夫人正四位下、源朝臣深姫
從三位、而平位子為從三位、見大系圖、可併知也〕 亦_レ相國

清盛之女、而

帝親母建禮門院諱曰及基通公嫡母白河殿諱曰之妹也、

大系是月、源賴政等、奉_二高倉王、諱以仁、帝伯父、謀
圖、即高倉宮此也

討_レ平族、乃使_レ源行家如_二豆州_一勸_二幕府_一起_レ兵以

討_レ之、幕府應_レ命、興_レ師於伊相、五月、高倉

王及源賴政奔于南都、二十六日、敗死于宇治川、

〔乃〕八月、▽幕府△遣_二時政等_一、擊_二平兼隆_一滅_レ之、

兼隆稱_二山木判官_一、檢非、乃出羽守信兼之子也、信兼見
下元曆二

年、二十日、遂發_二豆州_一、行聚_レ兵略_レ地、九月、源

義仲亦_レ起_二信濃兵_一、應_二幕府兵_一、十月▽幕府△進

入_二鎌倉_一、十二月、開_レ府於大倉、

○五年辛丑二月、相國清盛薨、諸州多_レ附_二鎌倉_一者、

兵威大振、將軍於_レ是乎、能員乃報_二知鎌倉_一、以_二丹

後局_一產_レ而_レ舉_レ男、幕府乃陰招_二諸鎌倉_一、名

公曰_二三郎_一、名說見下建
久四年註令_レ養_二於能員宅_一、

據_二公室由来_一、但年月闕、然據_二東鑑載_三明年三月

丹後局既候_二鎌倉_一、則其招_レ之還_二能員宅_一、應_レ在_二

是歲、故置_二于此_一耳、

七月、詔改_二年號_一為_二養和元年_一、八月、帝以前

筑前守平貞能為肥後守、討鎮西反者、

○二年壬寅三月、政子亦孕、於_レ是九日、幕府令_レ帶

之、丹後局乃陪_レ膳焉、事見
東鑑蓋局從_二豆州_一、久奉_二

食膳_一故也、出永氏舊記、仕
御末云亦是耳既而幕府恐_レ局既陰

生

公事泄_レ於政子、故令_レ出_レ局嫁_二惟宗廣言_一、詳見上永
曆元年註

以畜^{ヤシメ}

公於其京宅^上、在京邊部、由是、

公冒^ニ惟宗氏^一、亦避^ニ嫌疑^ニ也、據三空室由来、亦無年月、今推前註、姑置于此、又

日本史^一註^レ為^レ惟宗^一廣五月、詔改三年號、為^ニ壽永^一言增、冒姓惟宗云、誤耳也

元年、先是高倉王^上奔南都也、延壽寺僧水雲等、送王子、即北陸宮、及源仲綱子於源義仲、至是流僧水雲於薩摩、僧顯眞於土佐、皆坐王子事也

土佐皆坐、送高倉王子及源仲綱子於源義仲事也、

王子乃北陸宮、詳見下文治元年、

○二年癸卯六月、肥後守平貞能還京、定鎮西也、八月、

法皇勅削平族二百余人官爵^一〔日本〕、▽頃京無主、

上皇欲擇王子以立之、初讚岐守重秀^上、護高倉王

子匿于北國、義仲奉之、乃蓄髮加冠、營居於越中宮

崎、因稱北陸宮、又稱木曾宮、又稱遺俗宮、紹運錄所載仁譽、疑此人、至是義仲奏

請立之、卜筮不從、故不立云△前此、島津御莊人伴

信明、襲^ニ別當於陸之入来院、是也此月、信明上解、請

命於領家、見入来院氏藏書、按〔此月、車駕至宰府〕

十一月、

上皇詔罷^ニ基通公職^一、

○三年甲辰正月、復^ニ公攝政^一、二月、勅諸國司停徵兵

糧於公田莊園、三月、幕府下^レ文、令^ニ於九州^一、速

降^ニ鎌倉^一、安^ニ堵故封^一、以討^ニ平族^一、四月、詔改二年

號、為^ニ元曆元年^一、十月、

上皇賜^ニ基通公內舍人近衛等^一、此為^ニ府生^一、凡府生、給^ニ事

○二年乙巳二月、先是、九州多屬平軍、唯豊後否、至

是▽二月△勅^レ奨諭之、▽是歲△

得佛公年七矣、幕府猶愧^ニ三^一

公數^ニ親子^一、與^ニ之基通公^一、據古基通公及^ニ夫人三位^一

諱位子、詳上養

▽公子^レ之、公室由来、作^ニ殿下養君^一、而皆無幕府

陰召^ニ

公於鎌倉、十五日、

公造^ニ鶴岡^一、而見^ニ幕府^一、〔此年幕府使北陸宮入京、玉

是歲事、故後世或疑、公為高倉王子、蓋源會耳、但北陸宮事、見上壽永元年

語、盛衰記、宮高倉王子、從前讚岐守重秀、姓陸北國、源義仲奉之、

養髮加冠、營第于越中宮崎居之、見異本太平記、世稱北陸宮、見

及二年等玉海、又稱木曾宮或遺俗宮、見平家物語、盛衰記、壽永二年、安

德帝走西海、京師無主、法皇讓所立時、義仲頗請立之、卜大凶

故不得立、至是入京云、宮諱闕、疑紹運錄所載仁譽也、隅州肝付郡日新院緣記、則以公為高倉王實子、初

公繼父^{聖榮}自記、惟宗廣言、娶^ニ畠山莊司重忠之姊^一、

蚤卒、再娶丹後局、據市來氏系圖而重忠本蓋為基通公莊(6)官、說在下註於_レ是乎、幕府乃令_レ重忠加_二

公元服、因謂_二重忠為_レ烏帽子親、據聖榮自記、但為三年十三征奥時事、誤也

取其忠字、名曰_二忠久、冒_レ廣言姓、號_二惟宗氏、而

任_二左兵衛少尉、六位諸大夫及待任之、亦見職原抄

按_二大系圖及幕府教書見下文治五年等、_一畠山重忠稱_二

莊司次郎、又按_二愚管抄、云、宇治殿時、其所_レ領

莊園、多塞_二於諸國、所謂_レ宇治殿、則關白賴通公、

而基通公之六世祖也、而今季安、據_二重忠世襲_二莊

司_一於秩父郡△且

公亦鞠_二於基通公第_一而重忠加_中之冠_上、則重忠所_レ司

畠山莊、亦應_二宇治殿遺領_一而〔家〕世隸_二基通公_一

〔者〕(莊園)上也、斯註_レ所_レ疑、亦矣博識更有_レ正焉爾、

先是、故出羽守平信兼、領_二地頭於伊勢之須可御莊

及波出御厨等、此云地頭、非鎌倉所_レ補、而我藩古書所謂本地頭、則與_レ此同也幕府

遣_レ兵伐_二其子兼隆等、既滅_レ之、見上治承四年至_レ是、此日

下文、以公為_二之地頭職、蓋皆太神宮領也、說見下註七月、

日向住人富山義良以下鎮西士人、多_レ應_二鎌倉_一者、

於_レ是二十二日、幕府_レ令、戒_二征平衆、勿_レ侵_二

暴之、義良稱_二二郎大夫、當時右族、冠_二鎮西_一者、

據東鑑載、義良以下鎮西之輩、可_レ併知焉而島津莊司也、說在〔上〕安元二年〔註〕二十

八日、(概)

八十後鳥羽帝即_レ位、時年六矣、而

法皇親聽_二萬機、基通公攝政如_レ故、詳見上永曆元年・養和二年等八月十四日、詔

改_二年號、為_二文治元年、前_レ此、廣言居_二任於島津、

乎公、屢私_二於大江廣元及齋院次官親能領_一頭于三州八幡見下建久八年等、求_レ使_二

公受_二封於僻遠地、出聖榮自記、而三州永為其遺種處、首_二乎此矣、其賢而智、豈讓_レ孫叔敖乎、(本)局(且)

基通公亦與_二夫人三位、講位子、詳治承四年、(又後白河宮等、称高倉三位局、見日本史、帝宮人藤原成子叙從三位、生高倉謂三位家、疑亦此人、併註埃考)所蓋察_二局情、乃使_レ其大

夫下_二文鎌倉_一告_レ授_中

公給官於島津御莊、至_レ是十七日、幕府亦聽_レ之、

乃下_二文御莊、〔文中〕有任領家大夫三名家下文狀云語、蓋指領家北政所三位位者、既見上文、然當時又有高

乃下_二文御莊、〔文中〕有任領家大夫三名家下文狀云語、蓋指領家北政所三位位者、既見上文、然當時又有高

倉三位局者、諱曰成子、法皇宮人、而高倉王母也、註備異聞、△以

△公為三下司職、按職原抄、大臣隔年任豫一人、納言等三年云、公任下司、亦蓋給而浮帖其書、解島津御莊義、官、而分其俸之類耳、其佗每年給目、史一人、以分其俸、

曰、島津御莊者、薩隅日之總稱也、據此、公則為三州總稱、由斯與伴兼保下司和蓋以島津御莊為三州總稱、由斯泉郡類同也、

文一始云、據先史田中國明著宗藤源辯、而得能通昭著西藩野史、則浮帖、在文治二年四月三日下文云、誤也、又此十七日下文、猶書元曆二年、據此、領家下文、在十四日前明矣、故於鎌倉未識有改元、猶應云爾、當是時一也、

公尚末、七歲、初島山重忠、納其徒本田二郎親恒、近常之女、生二女一人、迨加、

公冠、幕府乃命重忠許以其女妻於公、據公室由来、聖業自記等、以故、重忠等為

公謀、乃遣親恒之子貞親、本田家乘則等、先如御莊、詳見下、攝之莊務、徵輸歲租、供給

公百事、且以探聽莊官等之消息也、十月、法皇惡幕府擅兵威、稍乖、朝憲、十八日、上卿經

宗宣、使藤光雅勅源行家、源義經催兵討之、行家、幕府叔父、而義經弟也、時巷說咸以為、出乎基通公

首議奏之、故幕府悲焉、初基通公納清盛之女、

為北政所、即三位、乃建禮門院安德之妹也、由是與幕府不協、而此說起、猶益交惡、乃十一月

二日、〔源〕行家、〔源〕義經赴西國〔史〕、二十五日、勅幕府索捕之、於是、大江廣元為幕府謀、

曰、世未悉靖、諸州賊兵將乘機起、莫如下及、今置守護於國衙地頭於莊園、令以鎮之、幕府大

悅、悉從其策、時會時政既使於京、乃使時政因藤經房以奏請之、

○二年丙午二月、幕府又奏請罷基通公職、以兼實為攝政、兼實乃領家五世忠通公寺殿之第三子、而於基通公、則叔父也、三月朔日、

法皇遂以幕府為六十六州惣追捕使及地頭職、常賦外、計畝、而以時政為七州地頭、幕府乃置守護

課兵糧、於諸州地頭於州之莊園鄉保、據東鑑、鎌倉譜、或作惣、於諸州地頭於州之莊園鄉保、大日本史、〔至〕如

追捕使、兵糧、課五畿・山陰・山陽・南海・西海二十六國段別〔米〕令下以五升、以充之云、所謂寄郡租與此同、詳見下連仁四年△、撫三州民徵之歲租、而如其進退、則不論國衙莊

園、為三幕府所三統領、據下四月三日下文陽名三乎驅三行家。

義經等一實以壓三國司莊官等之威、亦東鑑繇是、天下兵權、

日歸三鎌倉、將軍譜於是之時、幕府乃以

公為三島津御莊惣地頭職、亦令三撫三莊民、以徵三歲租

等、亦據下四月三日下文、(而)其略曰、先日以公補之、而今殿下交代云云、按東鑑、地頭則自三月朔日始、而交代

(為)在二十二日、據此、公拜惣地頭、必在其間、可見矣、故置于此、十二日、

法皇遂罷三基通公攝政、以三兼實、為三攝政及氏長者、初

基通公家世有莊園、則如三島津御莊、是也、後迨三

鳥羽上皇后薨、曰高陽院、忠實父忠實公院殿受三其御莊

五十餘所亦併三家領、而至三基實公薨、其弟基房曰松代為三

攝政、為仁安元年七月事基實公後室白河殿、即寬子、詳割下係三

氏寺一寺社領、(興福寺・法成寺・平等院・勸學院等數所云)歸以為三攝

祿、而於三其佗、(據寬文五年幕府朱印)宗器莊園等、皆傳基通公、(則)

後室領之、如三基實公時、(基實)至三基通公、(公子)亦

〔悉受之迨〕為三攝政、併食三攝祿、(進)▽氏寺領、先

例也△至是、基通公乃致三攝祿、(係氏寺)傳三之兼

實、(如)而佗家領、尚悉領之、(明年三月一日、勸基通公以左

人為隨身兵杖、但無)出仕事見補任)如三白河殿例、先是、兼實亦

及三

崇德帝后薨、曰皇嘉門院、忠通之女、而兼實姉、養和元年薨受三其御領、併三諸攝

祿、以食之、然幕府又欲下經三奏聞、而奪三基通公

家領、以班之兼實、乃使下時政因三經房亦奏請之上、

據東鑑、大系圖前此、本田貞親等之入三御莊一也、徧

布三公命、巡三撫三莊民、徵三之歲租、按下文語及公室由來、參證為文焉、然於三

御莊、則自三上古、隸三近衛氏、如三上所載、而梅

北昌兼兼高之子、或曰當兼高時等、世相承佃三其所三開墾、如三富

山義良等、世司三其莊衛、縱雖三國務、不三輸三貢者、

蓋百三六十年于茲一矣、於是、往往至三拒三其命、以

故、貞親等乃聞三于鎌倉、據莊官上疏、東鑑、公室由來

於是、四月三日、幕府下令島津御莊、曰、殿下

基通、既罷三攝政、右府兼實、代為三攝政、而如御

莊、亦雖三未三至三奏聞而改易其領家、如三諸國諸莊

地頭、則既奉三院宣、所以統領一也、是以、前此、

命

原文、為三之地頭、以撫三莊民、徵三輸歲租、且

公書、諱、

有_二和泉新莊云云_一、而今出水郷、有_下地名_二莊村_一者、大抵據_レ此、推_二時與_レ事、則和泉郡參伍拾町之新立_二御莊_一、亦同_二隅州深川等例_一、必自_二忠實_一公封_二三千戶_一始、而不下_レ與_二季基等所_二開墾_一同、足_レ概知_レ焉、〔詳見_二上公傳_一〕又山門院、蓋有_二領家屋敷_一、則二十七町、辨濟使分、名主島津御莊領家云、是也、抑

公之拜_二下司_一也、尋_二其濫觴_一、則肇_二乎三位家下文矣、季安按_二大系圖_一、所謂_二三位家_一、則應_二必謂_二基通公北政所_一也、名曰_二位子_一、乃平清盛女、而歸_二殿下_一、叙_二從三位_一、〔至_二準三后_一〕當時、〔基通〕為_二從一位_一、而於_二領家_一、無_レ佗〔當_レ之〕、則當_二位子_一明矣、而島山重忠及其徒本田貞親・山門秀忠等、〔或雖_二時政_一、〔其先皆_二出_レ自_二平族_一、與_二三位_一同_二其姓_一、〕然重忠妻_二時政之女_一、政子而與_二幕府_一為_二友婿_一、出_二大系圖_一、且據_二重忠本為_二莊司_一、〔則〕疑_二既殿下莊官_一、而秀忠宗人常胤之於_二重忠_一、亦為_二姑婿_一、於是乎、先史重英_{伊地}、演_二舊

說云、惟宗廣言、娶_二重忠姉_一、有_レ男而卒、再娶_二丹後局_一、見_二市來家乘_一、繇_レ是、廣言及_二丹後局_一謀_二於重忠_一、而薦_二

公於_二幕府_一、

公則_二幕府雖_二固所_レ生_一、幸_二其所_レ薦_一、乃遂舉_レ之、

使_二以授_二官於島津御莊_一、按時廣言既居_二島津_一、聖

策亦云、應_二請_一

公於其地_一以奉_レ焉也、又川上久國亦演_二舊聞_一云、

公封_二數州_一、則由_二乎重忠有_レ所_二首薦_一矣、今參_二衆

說、以稽_二三位家下文_一、則重忠既及_二廣言等_一、有_二

昏媾好、又殿下莊司、而與_二三位_一固同_二其姓_一、且

三位亦因_二重忠方妻_一政子之妹_一與_二幕府_一既為_二友

婿、使_二重忠紹_二介於其間_一以相與成_レ之、如_レ有

謂焉、而重忠又納_二親恒女_一〔所_二與生_一女、既

許_二內為_二

公夫人_一、古書所謂_二島山尼御前_一、是也、以_レ故、

迨_二

公拜_二下司於三州_一、重忠乃遣_二親恒子貞親_一、先

レ公之國、貞親則與^ト夫人母^ヲ為^リ兄弟、故重忠

命^ヲ從^テ行之、見^レ公室由来、先史平田純正亦從^レ之

云、然本田家說、貞親則重忠次子、而為^レ親恒所

レ子、故與^レ夫人^ヲ為^レ兄弟云、重忠系圖無^レ子貞

親、與^レ由来亦殊、恐傳聞誤、而貞親等之入部也、

三州武人、往往拒^レ命、如^レ下文所^レ言、可^レ見

焉、故就^レ領家屋敷所^レ在地、與^レ同姓秀忠等^ニ謀、

而相^レ攸於木牟禮、且營^レ稅駕^ヲ休息^ノ之所、亦足^レ以

概知^レ焉、公室由来、貞親之國、今讀^レ其文、先

レ公三年、入^レ山門院、而城^ニ木牟禮、創^レ感應寺

等云、^レ又有一本、藏山田氏、其本、則本田先

入山門院、建感應寺等、而後一年、

公就封云、此說得之、今[△]季安謹按、

公始就^レ封、則為^レ文治二年、自^レ文治二年、逆量

至^レ元曆元年、為^レ三年、然於^レ其年、

公猶未^レ拜^レ島津莊、據^レ此觀^レ之、由来之文、本

書先^ニ一年、而傳寫者、[〔]以為^レ三字、誤併^ニ二

一[〕]作^レ先三年、故致^レ此誤^一爾、[〔]果^レ一年[〕]、則

當^レ文治元年

公拜^ニ下司於三州之時^ト明矣、而如^レ其築^レ城、則

應^レ必在^レ其明年三月

公拜^ニ總地頭以後八月就^レ封之間^ト也、故書^ニ于此、

但至^レ創^レ寺、恐非^レ其年事、稽^レ諸^ノ寺說、則創^ニ于

建久五年、以^レ僧榮西^一為^レ開山云、今按釋書、

榮西歸^レ自^レ宋、為^レ建久二年事、又按宋人所

撰^レ千拂閣記及千光祠堂記、[〔]紹興四年、以西^ノ所

建^レ千拂閣於紹興四年云、則當建久四年矣、據此寺說實有據、而榮西以其餘

材^一作^レ千拂閣云、實當^ニ建久四年、則寺說所

材^一建於五年明矣、[〔]如[〕]言、為^レ有^レ據焉、据^レ此、由来記、蓋[〔]不^レ著^レ其

年[〕]、只類^レ記之、後世讀者、遂以^レ築^レ城創^レ寺

皆為^レ「先入^レ國時事、恐誤、果爾、乖^レ違下文、

何者則元年八月、」

公拜^ニ下司、自^レ時^レ而後、如^レ貞親亦來[〔]以^レ布^レ命[〕]、

武士國人、多^レ拒^レ命者、明年三月、幕府既聞^ニ

其拒^レ命、進^ス、

公為^レ總地頭、四月、下^レ文特放[〔]其事[〕]、而八

公就封、〔在^(貞親等築城、蓋在其間)其間、貞親等築城、〕以待^(勢)

公至、則理當^(勢)然也、何〔為〕暇〔於〕募役創^(カヘリテ)寺乎、恐時未^(シ)至、故從^(シ)寺說、置^(シ)下建久五年、還、以報

レ公、

公乃^(キキ)之國、八月、就封於山門、二日、入^(シ)木牟禮城、本田次郎貞親・酒勾左衛門尉景貞・猿渡藤四郎

實信等、數十人^(公室由 來十人)從^(レ)之、初

公之生^(シ)於住吉也、暮夜^(アヒユヘルニ)遭^(レ)雨、狐火照^(レ)暗、若^(シ)自

レ神祐、咸以為^(シ)稻荷靈顯、^(既詳 上註)至^(レ)是、

公感^(シ)神德、創^(シ)社於山門、以主祭焉、先^(レ)是、

法皇沒^(シ)入平族故邑在^(シ)諸州者、使^(シ)幕府管^(シ)領之、

謂^(シ)之沒官御領、^(見 東 於 日州、則在 柏杵郡、凡六十 八町)

宇都宮所衆信房、為^(シ)之地頭、於^(シ)薩州、在^(シ)三郎答院

佰拾、入來院^(市比野拾伍町、係 新田宮 肆拾貳町柒段、高 貳拾、)

城常胤^(所 地頭)、應^(シ)佰捌町伍段、否^(シ)不^(シ)合、^(飢 島 村、貳拾町 在上)

村^(下 五郡)、凡肆佰拾壹町貳段、而其參佰柒拾捌町貳

段、除^(シ)社領在^(シ)市比野拾伍町^(領 在 温 自 平氏 覇、隸 田浦拾捌町、而定 其餘、如 本文、)

島津莊衙、謂^(シ)之寄郡、^(解見 下建 久八年註)迨^(シ)幕府領^(レ)之、

以^(シ)千葉介常胤^(圖田張 作地頭)為^(シ)之郡司、常胤乃遣^(シ)紀太

清遠、往為^(シ)二代官、而稟^(シ)幕府、為^(シ)端正人、清遠

之^(シ)任、奉^(シ)職無狀、不^(レ)從^(シ)地頭等命、動^(シ)為^(シ)暴逆、

至^(シ)虐^(シ)莊民、幕府聞^(レ)之、是月三日、下^(シ)文莊官

等、令^(シ)下^(シ)誥^(シ)清遠^(以 禁 止 之、)初小城八郎重通、稱

有^(シ)所^(シ)承、求^(レ)為^(シ)郡司辨濟使於薩之牛屎院、是歲、

幕府使^(シ)

公命^(シ)重通^(以 補 之、)

公居^(シ)總地頭^(故也、據 下 三年 伴兼景 以 無 子 故、 五月下文)

傳^(シ)同姓兼任櫛間院郡司職、^(野邊氏藏 本主系圖)兼任、肝屬族、

而櫛間、在^(シ)日之宮崎郡、亦島津御莊寄郡也、十二

月、幕府以天野遠景為^(シ)筑紫奉行、^(詳 下)

○三年丁未

公年九矣、初平重澄、世^(シ)為^(シ)郡司於薩之伊作郡^(二百町 也)

及日置北郷^(凡 佰町、而 其 柒拾町、重澄所 司 而 餘 參拾 南郷 隸 八幡彌勒寺、小野太郎家綱所 司 也、)

伍拾之外小野、^(凡 拾伍町、重澄所 司 之、而 餘 參拾陸町、蓋 係 阿 多本地頭 平四郎宣澄所 領、至 建久三年十月、萬 壹拾)

揚房辨為之下司、後(至天文二)凡所領貳佰捌拾伍町、至日新公取此地、改曰長吉、

亦島津御莊寄郡、而阿多郡本地頭平四郎宜澄、兼

之地頭、至是、所部民戶凋弊、莊國應輸、不任

兩辨、以故、重澄欲獻地於殿下(即基)、全隸御

莊、以獨公務、使其子孫永襲之下司・郡司・惣公文

等之職、乃三月、裁證書、以請政所、據文治四年立

下文・八年圖田帳・元德元年英時下知狀、五月三日、幕府下

等、詳見下四年十月、建久三年十月、復(大秦元光牛屎院郡司

レ文、罷(ヤシラレ)小城重通職、補見前年、復(大秦元光牛屎院郡司

辨濟使(如故)、先是、幕府以天野遠景(稱藤内、

入道號、為鎮西九州奉行及諸所地頭職、之任九州、事見東鑑、

遣使巡察、然有稱惣追捕使遠景使(而)侵暴

莊家者、蓋(是)時

公居惣地頭、兼莊目代、據下文、而未兼守護、故其

威令、猶未易行、頗為彼等所侵暴、往往如之、

九月九日、幕府及夫人政子、臨觀菊華於比企尼

宅、(而)燕飲焉、比企尼、乃幕府乳母、皆出東鑑、

而蓋

公之外祖母也、說見上註、因陰訴、幕府、以遠景等所

以妨

公威令、於是乎、(此日、幕府)下レ文、罷遠

景使者入島津莊、以

レ公為島津莊押領使、即是薩隅日三州守護職、而

兼惣地頭如初、

按東鑑、守護名、則文治元年廣元上疏書曰守護

護、而二年三月、

法皇補之幕府、則曰補諸國惣追捕使、或書每

レ國置惣追捕使、而林羅山載諸其譜、則書諸國

置守護、據此、惣追捕使與守護、本一職、而

為兩名、可(以)知也、又十二月、東鑑補遠

景、則書鎮西九國奉行人、而此下文、云惣追捕

使遠景、而

公補之、則曰押領使、而未六旬、東鑑書遠景

職、曰鎮西守護人、又建久八年、幕府政所下

文、以

レ公為隅薩兩國家人奉行人、令(以)布號令、酒勾

貞阿、載之目錄、曰隅薩兩國奉行、又建仁三年、

幕府顯家分讓此職、東鑑書之、曰惣守護、時公職亦書大隅薩摩日向等國守護職、然而元德二年十月、英時居探題、聽之訴、亦據下

公為押領使下文、以斷曲直、又康安二年、道鑿公訴幕府書、亦言

太祖之拜領島津在日隅薩也、引此(九月九日)下文、以證其事、曰、日隅薩三州、(則)為島津莊

內、(其明驗、則幕府下文炳焉云)明驗孰炳焉、蓋其所謂炳焉者、指此下文及三元曆二年八月十下文浮帖之類、可併知也、參此衆說、以(考辨疑職原抄)、

則延喜四年六月、檢非違使等追捕群盜、皆關其賞、各有差、事見西宮記、又承和五年二月、檢非違使補看督長六十六人、以遣諸國、亦出續後紀云、且

公為檢非違使、詳見下建久四年註、據此、所謂押領使、蓋使廳即檢非違使也類、而猶惣追捕使、惣追捕使、不下與守護異、亦猶置奧羽按察使或置鎮守府之類、而按東鑑、當時幕府之

置此職也、按東鑑等、當時行家・義經(等)、(既)隱跡通、幕府乃恐彼等復起兵於諸州、

法皇、所以置也、是故、其云追捕使、則為使之追捕彼黨也、押領使亦猶言守護、為使之領其國以壓中國人叛應者也、故幕府補之、書惣追捕使、或書惣守護、遠景則書鎮西奉行、或書鎮西守護、或書惣追捕使、

公則書島津在押領使、或書日隅薩家人奉行、或書日隅薩兩國奉行、或書薩隅日等守護職、據是觀之、其實則皆守護職也、或時筆吏異其稱者、可併知也、而自幕府以下遠景等、皆以守護兼地頭職、事見東鑑、於

公亦以守護兼惣地頭職、猶下幕府兼惣追捕使及地頭職例、則雖後此、幕府賜

公下文、猶書島津在地頭、或文永二年五月相模守時宗贈

道佛公執達狀、比志島氏藏本、一說在山田氏、亦言守護地頭兼帶

守時宗贈

道佛公執達狀、

亦言守護地頭兼帶

守時宗贈

道佛公執達狀、

亦言守護地頭兼帶

之類、亦可証也、「故」今書〔所總〕「此」〔此〕、以埃〔埃〕博識〔博識〕爾、

○四年戊申、

公年十矣、三月、

法皇詔「幕府、徧令於諸地頭等、曰、在邦、從國

司、在莊、從領家、毋擅拒命如私邑焉、〔據東〕

及六年四月〔五月〕前此、幕府遣所衆藤原信房及天〔本〕

野遠景擊鬼界島、〔五〕是月降之、十月、「先是、」島津

莊寄郡伊作及日置北郷等郡司「平」重澄、〔初〕以三其

所領〔初〕歸降領家、於是、基通公以告國司、受三之

廳宣、是月、乃使「其」政所命二司等、立券永

貫〔綠〕新莊、蓋「亦」萬壽例、而所謂掠三公田亦此類

乎、凡貳佰捌拾伍町、〔詳見前〕自是、通和泉郡、

參佰伍〔補〕、為島津莊薩之一圓御領、陸佰參拾伍町、而重

澄猶居北郷下司、阿多四郎宣澄、居本地頭、〔非〕幕

公為之惣地頭、蓋皆如故、〔據〕立券狀・岡田帳・古

○五年己酉、

公年十一矣、〔安國・聖榮二書、是歲並〕先是、幕府聞〔為〕義經遁匿於奥之泰衡家、乃欲帥兵東伐之、二〔恐書〕

月九日、賜

公書、徵御莊兵曰、凡服戎者、汝盡徵發、來會

關東、且充朝謁、期在孟秋、七月、〔公八歲入部、亦願〕必勿後期、

有〔此書〕足〔以〕証矣、閏四月、泰衡殺義經於衣河、

王命也、〔據〕將〔馬〕軍議

七月、

公將兵至鎌倉、十七日、幕府猶惡泰衡、謀往

伐之、命重忠為先鋒、〔據〕東鑑、而參我於是衆咸

請太子〔小字萬壽、後名〕為之總督、太子時幼、政子

不欲其幼將師、〔公室由来、〕初廣言娶重忠姊、蚤

卒、再娶丹後局、而重忠又娶時政女、乃政子妹也、

故局及廣言、豫託重忠、欲以時白於政子使

公亦貴顯、〔據〕先史、〔重英說〕於是、時政既聞有此人、以

語重忠、重忠以為稟白政子、莫善於斯時、乃且

告幕府、幕府尚恐夫人將妬忌之、而命重

忠曰、汝處其宜、〔聖榮〕由是、重忠告政子曰、

所^レ鞠^ニ於宗氏、亦庶子也、〔方〕今殆成立、蓋舉^ニ而代^レ焉乎、政子悅曰、汝言可也、吾且欲^レ見、然豈面謁、何如而可、重忠曰、

公之辭^レ京也、殿下惜^レ別、綻^ニ直垂縫、取^ニ其綴革、留^ニ為^ニ記念、則背綻者、是也、且烏帽子折^レ左為^レ標、注^レ意識^レ之、聖榮自記云、其綻縫、則幕府手綻之、而左折〔源氏例、〔季安今按大日本史賴朝傳註曰、按盛衰記、既出樹穴、赴土肥也、衆皆失兜袴、蓬頭鬚髻、恐人怪之、欲得烏帽、路遇帽匠大太郎就求之、大太郎〕遺製八帽一〔帽〕〔幸遇帽匠、乃命〕

誤左折、賴朝偶得之、大喜曰、從士〔帽〕皆右折、我獨得左折、〔自糞祖〕八幡殿、以來[△]世世將軍、皆著左折、今我〔以亡人〕得〔為〕〔著〕

之、豈非天邪、〔蓋〕盛衰記、〔為賴朝與〕實平・忠氏等七人、〔匿樹穴故、從而為之符、遂有八帽之說、據東鑑、賴朝唯與實平匿山〕〔從之云、故有此說、東鑑則唯實平、從隱山中云、未知孰是、然聖榮所謂、為源氏例云、據八帽說可知也、又安國寺云、特異衣冠、以標別、為中說、見上故不取、又安國寺云、是本為恐衆失敬於公、設之云、各傳所聞、與此小異、今從公室由来、姑〕埃、博識〕〔也〕既而進

公、與^ニ諸幼士齒、朝^ニ于掖庭、政子隔簾、見^レ公、感^ニ其夙成、遂與^ニ重忠請^ニ之於[△]幕府、時

公尚幼、故亦不^レ許、重忠固請、許^レ之、御教書所謂、漸[▽]詳下八月十五日註[△]於是、重忠奉

公、為^ニ先鋒總督、幕府乃縱^ニ橫箸、畫為^ニ十字、以定^ニ旗章、賜^ニ〔之於〕

公、則是源氏所^ニ世紋^ニ二疋龍之變體云、

按^ニ大田道觀詠艸、云、〔康正元年、北條憲定之〕

騎士及^ニ中村重頼〔治部〕少輔關〕於藤澤、為^ニ重頼被^レ斬^レ

首、失^ニ其姓名、騎^ニ栗毛馬、其〔所〕^ニ旗章、則

畫^ニ昇龍於^ニ二龍、以為^レ紋云、我藩儒臣菊地東公所

謂、二疋龍象^ニ上下龍之說、亦蓋証^ニ諸斯乎、

十九日、幕府自將發^ニ鎌倉、八月十二日、次^ニ于國

府、在^ニ多初其東也、告^ニ禱神佛、〔出〕神國故也、

十五日、幕府聞^ニ下軍伍中有^ニ暴掠社者、而軍必

回^レ宿^ニ中國府、將^ニ下以^ニ明旦^ニ移宿^ニ陣原、〔而〕聞^ニ重忠

及北條等所^ニ將兵、無^ニ獨犯^レ律、特嘉^ニ隊^伍整、然猶

重忠、〔則〕幾請^ニ御前、奉^ニ幼子^ニ二行、特不^レ可^レ愆、

必慎^ニ必戒、勿^レ使^ニ從卒^ニ違^ニ吾〔所^レ願〕苟混^ニ暴惡、

其暴掠者、令^レ督^ニ其罪、今日所^レ犯、雖^レ無^レ與^レ之、

明日若犯、特為^ニ遺憾、克欽哉、乃親裁^ニ手書、託^ニ名於盛時、以賜^ニ重忠、諭^ニ以^ニ是事、幼子、書曰^ニ三

郎、乃

公小字也、

原文倭字、自_レ非_二時人_一、未_二遽易_レ讀_一、況於_レ解_レ之乎、初

道鑑公時、守護代酒勾貞阿、撰_下文治至_二文和_一一百六十餘年間、公室所_二世傳_一古書五拾餘通、為_二之目錄_一、而以_二斯十五日及二十日_一見_下、所_レ賜教書二通_一、十五日書二丁、為_二右大將殿倭文親筆、自_レ時而降、逮_二元祿十年_一

大玄公時、大史田中國明_{五右衛門}、博稽_二古語_一、為_二之

註解、三年而成焉、然十三年、林祭酒_{大學頭}、有

訪於

公曰、君侯太祖、為_二右幕府庶長子_一、雖_レ載_二

稗說_一有_レ行_中乎世_上、未_レ知_二其說所_二由本_一也、願

覩_二確據_一、

公乃命_二國明_一、摸_地寫此原本及_所世補_二三州守護_一下

文等、附_二句解及譜略_一、其年十月、使_二國明以示_二

祭酒_一、祭酒讀_レ之、大感悟曰、有_二若所_レ徵_一、則世

傳亦宜哉、眞為_二將種_一、又奚疑乎、明年三月、祭

酒為_レ跋、則書_二右幕府長庶子_一、無_二毫貽_レ疑焉、

公乃別令_レ摸藏_二諸昌平學_一、由_レ是、天下稍_レ至_レ無_下

間_三乎_一、公室所_二自出者_上云、今其解本、間_レ行_二于

世_一、愚亦嘗竊得_レ拜讀之、_實如_二國明_一、「則」博

覽_二多通_一、有_レ功_三乎藩_一、可_レ謂_二良史_一矣、今摘_二其

要_一、一二註_レ焉、所_レ謂_二あかう所三郎_一を、やうく

ニせんニこひたるものゝついでふくしたるなり、舊

註多引_二假名遣_一_{京極黃門所著}及源氏語等_一、以_二註_レ解之_一、

所_レ謂_二三郎者_一、

公小字也、事見_二古今戰_一、指

公明矣、「あかう所、」帚木_ノあこ、爪印_為為_二吾

子_一、加與_レ古通、而字、其韻也、故あかう、則與_二

あこ_一同、為_二幕府指_一

公之詞、眞可_レ謂_二的解_一矣、但所、猶_二方云_一、

愚近讀_二平田氏書_一、神代所_レ謂_二保止_一、則書_二火所_一、

旁注_二保止_一、彼在_二東都_一、今以_二博古_一鳴_二于世_一〔者〕、

故_レ應_二必有_二按據_一、以_レ是觀_レ之、所、則と也、夕顔

應_二必有_二按據_一、以_レ是觀_レ之、所、則と也、夕顔

所謂わかうと、假名遣〔解〕為^ス幼少、則與^レ此同、而安與^レ和通、且公室由来著^ニ此事、亦作^ニ若人、則應^ニ必是^ニ也、を者為^ニ助語、やうく、則以^ニ微字解^ニせん、以^ニ專字註、而上下^ニ、皆為^ニ助語、こひたるもの、註為^レ請者之、而者、則註^ニ指

レ公詞、ついふくしたるなり、註^下為^レ付副也、其意以為

公亦雖^レ幼、重忠^{ヤク}微專^{セシムル}為^レ請若人、為^レ付^{イフ}副於

幕府^ニ之義、今季安按^ニ安國寺申狀・聖榮自記・公

室由来等^一、皆載^ニ是事、據^ニ其所^レ言、稽^ニ諸東鑑^一、

是役九月七日、書^下字佐美平次虜^ニ由利八郎一事上、

有^下召^ニ進御前^ニ之語、養和元年七月・壽永元年七月等、御前字多見東鑑、據^レ此、

上^二、舊註雖^レ為^ニ助語、倭字艸體、ニ^コ相似、疑

應^ニ已也、而其義、則與^ニ御宿^ノ之御^ト同、其下云せ

ん、舊註為^ニ專一義、愚意當^ニ是前^ニ也、蓋盛時稱^ニ

幕府^ニ謂^ニ之御前^一、猶^ニ今俗語^一、却詞似^レ穩、或

指^ニ政子^ニ謂^ニ御前^一、亦猶^ニ巴御前例^一、而義亦與^ニ古

說合、兩皆能通、又ものゝ者、舊註為

レ公、愚以為者^字、必指^ニ重忠、今所^レ引^レ上安國・

聖榮等著^ニ〔是役〕^(此事)、亦竝以

レ公為^ニ大將^一、且重忠為^ニ之副將^一、事見^ニ公室由来^一、

據^レ此、

公為^ニ先鋒總督^一、而幼少故、使^レ重忠付^ニ副〔之〕^一

以^レ麾^中隊下^上者明矣、是以、東鑑惟載^ニ重忠事^一、至

レ脱^三

公為^レ先鋒總督於征奥之役、是則無^レ佗、實^レ公

尚^レ幼〔少〕也、若幕府無^レ裨^ニ御前^一、公然使^ニ

公入^ニ親子數^一、則雖^ニ幼少^一、豈漏^ニ東鑑^一、觀^下夫變^ニ

衣冠、與^ニ諸幼士^一齒、僅示^中異於其班列^上、可^ニ以

察^ニ也、且從^ニ舊註^一、以^レ者^字為

レ公、則與^ニ上^ニを字^ニ所謂^レ氏乎波^一、似^レ不成^レ語、

以^レ愚觀^レ之、蓋幕府意、言於^ニ重忠^一、則微^レ為

レ請^ニ若人^一於御前^一者、而為^レ付^ニ副焉^一、特慎戒^レ師、

勿^ニ必犯^レ令^ニ之義^一、却與^ニ古傳^一似^レ有^ニ通釋^一、抑愚

淺陋、而於^ニ舊註^一、猥容^レ喙、則雖^ニ罪大^一、百一微

疵、不與臆愜者、粗辨于此、亦惟疑思問意也耳、凡此文體、則盛時奉命、原本、盛時名與重忠書、原本、書在司次郎殿也、按盛時、姓平氏、稱三民部丞、右筆、幕府、見東鑑等、前此文治三年、

十月二日、賜廣元書、亦同此例、而有言云、仰盛時、被遣御書於廣元許、是也、然於公室、盛時奉書、雖他亦多、惟斯二者、則自

道鑑公時、世珍襲以為、右大將殿倭文親筆、豈無謂焉乎、コ、ニ、ナ季安謹按、

道鑑公、則

太祖玄孫、而生於其薨後四十三年、文永六年、而二世

道佛公薨、則尚雖幼、年僅四歲、二世夫人西忍君、

薨于正應二年、則年既二十一矣、據是觀之、

道鑑公之去

太祖世、未甚為遠、有聞而知者、可以想也、其代官酒勾貞阿、錄為親筆、如前所舉、

則幕府親書、託名盛時、以故、自時世傳其實、云以為親筆、其必有承、證據莫明

焉、是以、林祭酒亦信古傳、且感幕府之教、論重忠其叮嚀親切、寔出乎愛、（特破之）公幼之自然、（特破之）曰、題、右幕府手

書後云、又按、元久元年十月十日、北條時政、為

幕府、實朝遣重忠之子六郎重保等、如京、迎御

臺所、前此、時政使其女婿朝政、義信子、亦上武藏守、

角第一以衛京師、乃十一月、重保與之鬪於其

第一、牧方朝政聞之、乃相與譖重保父子於時政、

事出、妻母由是、時政令重保父子幽於其國、幽、此云勸當、

二年正月、姑婿常胤、重忠父、重為重忠等、請赦許能妹嫁之、

之、夫重忠之於

太祖也、為（父翁）外舅、而重保亦於

道佛公、時年四矣為舅矣、於是十四日、重忠贈我

藩書、報知其事、曰恐彼等怨、猶未可釋、

事見其書、今其本在藤野氏、亦貞阿目録所謂畠山殿自筆狀、云應必是也、其年六月、時政

遂殺重保及重忠等、七月、奪其餘黨領地、以

班功土、亦出我本宗秩父氏之先亦出自重忠之

宗兄重光、重光稱畠山太郎、年十九卒、生子季

光、季光孤弱、為重忠被養育云、今季安按東鑑、重忠死時年四十二、據此、其始從幕府、

治承四年、當二十七時、假令重光長之二年、亦〔蓋〕

時既逝、可〔見〕矣、推此、〔季光遭重忠難、〕

當二十六七、則如家邑亦被沒入、而漂泊者有

年矣、生子季親、季親信佛、更名尊西、號

因幡房、貞應三年、自元久二年、泰時執權、蓋追

念祖時政信〔殺重忠等既而悔之、〕特學

尊西、使為右筆直於幕府、泰時居職始置〔右筆〕

筆非泰時臣、〔俱是〕仕幕府、而泰時與

太祖夫人、古文書曰、島山既有外兄弟屬、而本田氏所

出也、然重忠嫡妻、則時政女、而泰時

始也、於夫人有嫡母屬、故云爾、且夫人之於尊西、

亦為從祖姑、而

道佛公及忠綱等、皆其所生也、故於尊西、則

有從祖兄弟屬、於是乎、迨

得佛公補守護於越前、使公子忠綱往攝其職、

道佛公亦拜地頭於州之生部・久安・重富等、尊

西子時季、亦據有井筒城於其州、而與公室、

世脩舊好、頗見古書、則文曆二年六月二、泰時復

道佛公書、所謂由君侯有緣於島山殿、特念

親近之語、或山田聖榮所謂、伊地知・福崎・中

馬等之臣於公室、本緣忠綱居越前時事

之類、古人徵文、難遽解、〔亦〕稽諸來籍、

以原終始、足概証耳、但時季、自居井筒城、

始號伊地知氏、而兼季、而季清、世襲右筆、

見古且季清、則與

道義公同隊、而直博多館、見永仁七年事、詳見

隨稱彈正忠、亦與

道鑑公同隊、直焉、詳見聖榮日記、至尊氏世、得罪下

獄、初

公年二十一、喪曾祖母西忍尼、為正應二年事、詳見

尼乃

道佛公夫人、而尼之於

太祖夫人、島山也、親為其婦、據此、季隨於重

忠、為宗後者、如

道鑑公、則聞而識之、似有謂焉、於是乎、其
厄也、

公請_レ寬易國、尊氏許_レ之、亦詳聖榮自記以_レ故、季隨、

康永三年、自_二越前來、臣_三事于藩、乃封_二下大

隅、特加_二寵遇、後三十六年康曆二年正月、伊地知左近將監滅于越前、事見室町記、蓋亦同族也、按本田氏所藏古系圖、季隨父季清之兄、曰民部大夫長清、生男三人、右近將監重清、左近將監親清、又二郎弘清、室町記所謂伊地知左近將監、則此親清、而於季隨從父兄弟也

觀應二年、從_二

齡岳公、師_二于金隈、筑前地既臨_二其危、乃冒_二

公諱、戰死誑_レ敵、令_三家僅福崎能廣稱_主、奉

公以脫_二諸鋒鏃中_一矣、凡鎌倉禮、每歲正月、必

獻_二絜飯、列侯班序、多分_二日行、而元旦、則自_二

時政始、見正治二年元久二年等蓋時政、乃二位尼_子父、

而威權無_レ比焉、故以_二北條氏_一為_二第一、事見東鑑可_レ見矣、

我藩

先君行_二此禮、亦悉倣_二鎌倉、而元旦、必自_二伊地

知氏始、永為_二典例、古籍殘缺、雖鮮所徵、散見乎天正三年、八年上井日記、十年、

十二年、十四年、等年男日記蓋

道鑑公之招_二〔我先〕、則由_二乎_一〔季隨本〕為_二

太祖夫人之宗後焉、故準_二北條_一、以_二伊地知氏_一
為_二第一、亦可_レ見矣、而家世有_レ傳云、幕府賜_二

重忠書、先世多獻_二公室、然今斯二通、十五日、見上、

三十日實賜_二重忠書、而據_二貞阿撰亦在_二觀應後、

則其所承說、亦非_レ不合焉、故叙_二其所_一世

傳、亦併註_レ此、以備_二異聞_一爾、

二十日、幕府入_二玉造郡、圍_二泰衡城、泰衡既委

城去、殘寇盡降、於是、幕府且_レ如_二平泉、而謀

以為、泰衡又收_二散卒、據_二平泉城、其必發出、恐先

鋒重忠等以_二寡兵_一徑進_二九十橋、乃戊尅、發_レ檄、徧

戒_レ之曰、汝等誦_レ檄、各尚運_レ策、非_レ整_二二萬、慎

勿_レ乘_レ勢、宜_二與破_レ之、

此書亦原文倣字、而貞阿所謂、幕府親筆二通

之一也、詳見_二前註、然後上方、則脫失云、而其

所_レ存文及年月日尅、與_二東鑑合、但雖_レ不言_二

公及重忠名氏、實其所_レ論_二先鋒書、而東鑑、則

載_二重忠等各讀_二此書、如_レ合_二符節、亦足以証_二

公為_レ先_二鋒總督於征奧之役_一者也、

九月、幕府遂滅泰衡、二十日、效鬪土功、各行其賞、而重忠封葛西郡、公乃補守護於若狹州、

按安國申狀、

公封若狹、為征奥功、又聖榮自記、以若狹州為越前州、公室由来同之、但賜首途云、竝無年月、今按東鑑、則行征奥賞、多在此日、然不悉著其名姓、蓋

公封若狹、亦應在此時、書矣博識耳、

二十八日、幕府班師、十月、自島津莊從

公征奥者、北郷彌太郎兼秀、請于幕府、求襲辨濟使、時幕府在歸途、不詳本狀、乃三日、使盛時以其解狀併致、公書問中之實否、

公亦在先鋒於其道故也、曰、彼從征奥、厥功可賞、所陳得實、宜令復之、

前所載十五日親筆、則幕府稱

公曰三郎、急遽不覺、呼其小字、誠是親近之

自然、而猶稱其弟既為廷尉、亦呼九郎義經例也、例在東鑑元曆元年二年、而此書、則盛時奉旨、與

公題宗兵衛尉殿、是當時官名、而其略左字說、見下建久四年註、惟宗之省惟、猶下東鑑比企四郎書藤四郎、或作者部類、定覺戴新註宗八左衛門入道言流之例、而宗、則惟宗略、藤亦藤原略也、但此書亦與上親筆能有昭應、足以証公為將帥乎征奥之役者也、

二十四日、幕府還鎌倉、十一月、麿島郡司藤内康友亦迨將飯、幕府使盛時界書復原任、賞其功也、

管窺愚考卷之中終 共四冊 伊地知氏家藏

起艸於天保壬辰之冬、脱稿乎癸巳三月之八日、

(1) 屨、マジハル、ムラガル、字典、說文羊相則也、以義在屋

下、尸屋也、一曰、相出前也、顏氏家訓、典籍錯亂、皆由

後人所屨、廣韻、韻會、初厲切、集韻、初莧切、竝音鎌、

(2) 噓ウ小兒啼聲、

(3) 承元四年、則治承三年之後三十二年、謂之當時、似不_レ的切、

(4) 類史、蓋謂類聚國史、仁壽元年事、則作文德實祿為可、

(5) 此為_二府生_一恐誤、是蓋隨身也、

(6) 為_二在司_一者重忠之父重能也、

(7) 撰錄則謂_二撰政_一也、如_二此本文_一似_レ謂_二撰政之食祿_一、訛歟、

(8) 柏、疑曰、

(9) 詰、恐詰、

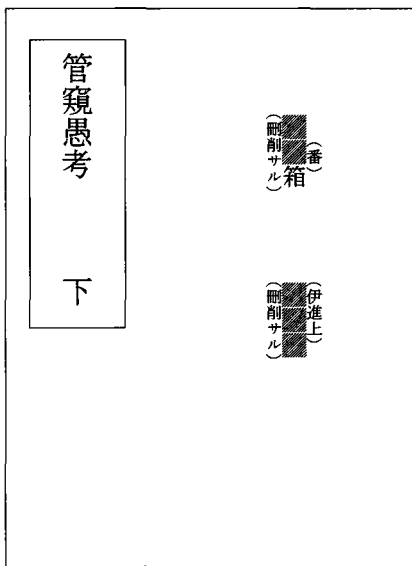
(10) 歸順二字、恐不當、當_レ作_レ致歟、

(11) 太子、當作世子、

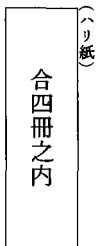
(12) 灌、

(13) 爪、爪印、源語解也、

(表紙)



(中表紙)



管窺愚考 卷之下 稿

(中表紙裏付箋)

「書入之所ハ為目安朱紙ヲ貼シ、又ハ張紙ニ其訳記シ置候得共、尚能ク御注意事願候也、△△□□コノ様ニ印ヲ二ツナラベタル所ヘ註ノ印ト御心得被下度事、」

管窺愚考卷之下

(朱角印、印文「伊地知氏珍藏」)

寔府 潜隠 平季安 謹撰

○建久元年庚戌(付箋)「此冊中句ノ切り様原書ノ丸ハ墨ニテ○此通り朱ノ点ハ○此ノ通り小サク墨ニテナシ置クベシ」

○公年十二矣、三月、領家家實公任ニ右近衛中将、乃(頭注)「補任則為二年二月五日事」

基通公男也、時正五位下、凡以五位任之、惟執柄息不然則否、事見職原抄、初平氏霸

世、使平八成直為地頭辨濟使、領中教仁院上、因號

救二院氏、既而為其弟安樂平九郎為成所奪其職、

至是、為成首謀叛逆、其地皆係島津御荘、一圓領也、

乃五月九日、幕府復使盛時一致

公書、奪為成職、還成直地頭辨濟使、如初、

○二年辛亥、

公年十三矣、四月、勅流佐佐木定綱、於薩摩坐子定

※(頭注、㊦ナシ)

「近聞諸日置人有地名在者云、則所謂一圓莊之遺名也、俟再考」

當此時、**鮫島四郎宗家**亦為**阿多地頭**、領**阿多郡**

久吉凡伯玖拾伍町肆段、而其伯肆拾伍町肆段、在**廳大藏權**

田村原凡拾五町、亦等、凡貳佰拾町肆段、亦**阿多宣澄**

故邑、而係**沒官領**、蓋

公不為之地頭、非**島津御莊**之故也、據建久圖田帳及

證載此、**山田聖樂**所謂、除**鮫島**亦

應誤是事也、詳見建久七年、

○四年癸丑、

公年十五矣、前此、

公在**鎌倉**、(其社年) 至是、**幕府**還自**牧狩**、

第一、**初重忠遣**貞親等、之國攝行

公職、據古今戰、公室由

寔平治、**島津**在衙、尚未悉服、幕府既親下、文、

文治二年四月、或使時政等屢申**敵令**以逾新法、文治五年

年十二月、然在官等、動至具狀因殿下一以訴中鎌倉、

前年、於是乎、蓋基通公等以為在官猶未心服、

公雖夙成尚為成童、遣之靖亂恐未可也、況

法皇之在、世、嘗為

公貌似高倉王、而特恤之、(法皇恤公、古今戰則)

皇崩、在前年十月、應在其(以)前也、又世或疑、公為高

倉王子、而隅州高山日新院緣記、書高倉王實子之類、蓋皆本乎此

時、幕府既為右近衛中將兼征夷大將軍、而基通

公之子家實公、則為右近衛中將、見上元年、

及日向國圖田帳、至是、蓋基通公等薦

公令以原任一事中

後鳥羽帝於其衛府、尋為檢非違使、見新

職、謂之使廳、凡為衛府者、兼帶衛門兵衛尉、見薩隅

按公室由来、云、公之西也、

法皇為

公貌似高倉王、而特恤公、故公朝內裏、

屢承寵恩、又按古今戰云、建久四年、公

反^{カヘルニ}自^ニ鎌倉、訪^ニ基通公第、基通公及群卿、留^レ公令^レ仕^ニ於^ニ内裏、而至^ニ七年、幕府又促^レ之^ニ國、如^ニ其留^レ京^ニ為^ニ二

法皇詔、則必有誤、既辨^ニ上註、應^ニ是^レ

後鳥羽帝時也、凡^ニ公所^ニ叙歷^ニ官、則皆武官、

而莫^レ不^レ管^ニ於^ニ近衛府、抑^ニ公之鞠^ニ於^ニ京^ニ也、元

曆元年、則年甫六矣、其年十月、

法皇賜^ニ基通公近衛等、據^ニ明年六月^ニ公任^ニ左兵

衛少尉、蓋基通公既已舉^レ公、充^ニ諸近衛府生、

而任^ニ少尉、似^レ有^レ謂焉、自^レ時而後、幕府使^ニ

盛時等贈^ニ公書、則題曰^ニ宗兵衛尉殿、多省^ニ左

字、按^ニ百鋪艸、凡^レ讀^ニ左右兵衛等、則左必如^レ字、

而右不^レ讀、只呼^ニ兵衛、為^ニ俗習^ニ云、據^レ此、未

幾、公由^ニ左兵衛少尉、歷^ニ左兵衛尉、任^ニ右兵

衛尉、故省^ニ右字、只書^ニ兵衛尉、可^レ例知^ニ也、但

繫^ニ宗字、則惟宗略、解在^ニ上註、又按^ニ建久八年

圖田帳、日向國權掾等所^ニ報呈、每^ニ島津御莊、則

曰^ニ地頭前右兵衛尉某、〔原〕本亦可^レ証也、又薩

摩國權掾及大隅國判官代等所^ニ報呈、亦於^ニ島津御

莊、則皆曰^ニ地頭衛門兵衛尉、而無^レ觀^ニ建久中

公出^ニ東鑑、則〔其時公〕必不^レ在^ニ鎌倉、亦可^レ知

也、又當^ニ其時、基通公之子家實公、亦為^レ中^ニ將

於^ニ右近衛府、而右兵衛尉、則其屬官、而自^ニ此尉、

多轉^ニ衛門、又為^ニ檢非違使別當^ニ者、必帶^ニ衛門兵

衛督、事見^ニ職原抄、而^ニ公為^ニ檢非違使、以^レ預^ニ

蔡祭、亦見^ニ新後撰、則準^ニ別當帶^レ督、公乃

帶^ニ衛門兵衛尉、似^レ有^レ準據、又^ニ幕府之生也、

為^ニ義朝第三子、故名^ニ三郎、因^ニ公小字曰^ニ三郎、

亦既取^レ之云、而^ニ幕府其幼也、任^ニ右兵衛佐、平治元年

時^年十且此時既為^ニ右近衛太將兼征夷大將軍、公

取^ニ諸父、亦如^ニ例途、據^レ是觀^レ之、古今戰及公室

由来等所^レ載言、則採^レ所^ニ自^レ古世傳說、雖^ニ誤亦

多、至^ニ乎淆櫟而頗難^レ辨、其必有^ニ以所^レ徵^ニ於事

証者、如^レ合^ニ符節、其云^ニ建久四年迄^ニ七年、公

仕^ニ于^ニ大内、則觀^レ夫日向帳書、前右兵衛尉、薩

隅帳載^ニ衛門兵衛尉、及新後撰集載^レ以^レ檢非違使

預中葵祭上之類、足ニ以參証ニ焉、蓋 公則於ニ 幕

府ニ為ニ庶長子、而於ニ家實公ニ亦有ニ兄弟義、故迨ニ

其為ニ大ニ中將於右近衛府、相與舉レ 公、令下以ニ

右兵衛尉ニ仕中于 大内ニ焉耳、其載ニ衛門兵衛尉、

則方ニ 公為ニ檢非違使、必以帶レ之、猶下為ニ其別

當一者、必帶ニ衛門兵衛督ニ例上、在原抄、可ニ併知ニ也、

但據下建久八年六月日向帳書、前右兵衛尉、而薩隅

等書中衛門兵衛尉、則六月以前、既為ニ檢非違使、

亦足ニ概知ニ焉、

公以ニ檢非違使ニ與ニ葵祭、解詳見ニ下註、

凡近衛中少將、則每歲四月有ニ葵祭、中西行之、為ニ

〔單言〕祭則此云、見ニ名迹志、〔付箋〕

〔今世〕兒女子〔所解〕也、必

帝勅レ之、使ニ于賀茂、在ニ洛陽乾、六府諸衛凡近衛・衛門・亦

往警衛者、舊典也、見ニ神社考、山公之仕ニ

王朝レ也、以ニ檢非違使ニ往與ニ其事、蓋亦家實公為ニ

勅使ニ之年也、

事見ニ新後撰集所載惟宗忠景詠歌小序、原文云、

祖父忠久、檢非違使仁祭主太利計留事遠思比天、

加茂乃社仁與美氏奉、利計留、又其歌云、掛天祈

留志留之阿良世與、葵草加佐名流跡波、神茂忘連

之、是也、按ニ作者部類、惟宗忠景為ニ常陸守、乃

周防守忠綱之子、凡所レ為歌十八首、載ニ撰集ニ云、

按ニ公族系圖、忠綱、則 公之二子、而忠景、忠

綱之第三子也、其稱レ公為ニ祖父、亦與ニ系圖合、

無レ可レ疑焉、況新後撰、則正安三年、大納言藤

原為世奉、

後字多上皇勅、至ニ

後二條帝嘉元元年、所ニ撰成ニ焉、尺素往來、為ニ後

可レ謂明證ニ矣、故原ニ其事、書備ニ後考ニ爾、

○五年甲寅、

公年十六矣、本田貞親、拓ニ寺於山門、請ニ僧榮西

為ニ之開山、命曰感應寺、據ニ說、榮西、俗姓賀陽氏、

備中吉備津人、家祖貞政、刺ニ史薩摩、前レ此、〔榮

西〕入レ宋、也、文治三年、將渡天竺、洋遭狂飈、反入溫

州、謁虛菴斂禪師於萬年寺、天台、師見奇之、授以

僧伽梨等、未幾、師自萬年、往主天童、西亦從、居

歲餘、聞師有改作千佛閣之意、請曰、無路報恩、吾

國主近屬、國主、疑他日回國、當致良村以助之、師曰、

唯既△而〔其〕歸〔也、二年〕登△狗留孫、山名在△創△

不敢畏險、遂造狗留孫、山名、在日州飯野邑、創利栖息、曰端山寺、寺傳、榮西回自宋時、所創云、此而日歸、擇材於山林、多伐百圍之木、以運諸海、凡其運輸、巨材難動、西乃令呼己名、夫如其數、輒巨材必經、故今往往運巨材者、尚呼榮西榮西、蓋言乎此、而名迹志、為創建仁時事、恐傳聞誤也、連大船數艘泛致之宋、建久三年、而至也、千夫成集、浮江蔽河、蒙致山中、師大喜曰、吾事濟矣、乃鳩工度材、列楹四十、多用日本所製、餘取其山、凡三年告畢云、其建始於紹熙四年九月甲申、則我朝建久四年也、事見宋學士樓鑰所撰太白名山千佛閣記、及宋虞得所撰千光祠堂記等、千光、即榮西、其略云、太白名山、甲天下、而千佛閣、尤為第一、後世欲過之、其材無及焉、蓋柱樞、日本國僧千光法師所製也、詳見大參樓公閣記、蓋公欽其德也、

端山寺、亦據△以△道德△鳴、詳見釋△書第一△蓋△公亦欽△之△乃入△禪門△號曰△得佛△山田聖榮云、公號得佛、則為西始、事見建長紹明禪師語△〔因〕貞親之創△寺、▽雖起於榮西欲取材、蓋△亦公命云、

〔按西之取材也、匪獨吾藩、前此二年、建久三年、建報恩寺於榮榮香椎社旁、後此一年、建久六年、建聖福寺於博多、蓋皆有緣於取材故也、然後建仁元年、

〔後此九年、建仁三年〕
〔主〕△土御門帝乃△幕府頼家公、特尊△其德、創△寺居

△之、勅曰△建仁寺、〔官至△僧正、號△葉上僧正、
〔建永元年、主東大寺、賜榮表、建保元年、
〔建永元年、主東大寺、賜榮表、建保元年、
〔建永元年、主東大寺、賜榮表、建保元年、
年七十五、寂△于建保三年七月五日、〕諡號△千光

國師、〔此也、〕

○七年丙辰、

公年十八矣、幕府又促

△命、多見前章、可以知焉、乃親筆論
△公曰、不見△其有△親筆、疑後亡耳
〔公〕曰、見△公室由来、聖榮自記等、然今、遙聞御莊其辟△艸
〔公〕曰、見△公室由来、聖榮自記等、然今、遙聞御莊其辟△艸
〔公〕曰、見△公室由来、聖榮自記等、然今、遙聞御莊其辟△艸

衙者、莫△顯△於富山、東鑑及揖宿、汝其就△國、特待△富山、疑是義良、詳其必如△父、遇△梅北、〔兼也、〕亦必如△母、但如△鮫島、別使△地△頭於沒官領、詳〔見〕△至△其佗士人、宜△皆為△汝家人、往欽哉、

按△公室由来、聖榮自記、莊官上疏、玄兼自記、東鑑、揖宿氏文書、古今戰等、參証為△文、而聖榮云、以△三州家人△為△公家人、則明年十二月、幕府下文、以△公為△薩隅家人奉行、應△言△是事也、又言△鮫島事、按〔其〕〔鮫島〕為△地頭於阿多、則為△建久三年事、詳見△其年、據△此、聖榮等所

謂親筆論、△公云云、應△必在△此入部時事也、

謂親筆論、△公云云、應△必在△此入部時事也、

但以阿多忠景事、與之附會、則必聖榮等傳聞誤耳、

當是之時、領家基通公、亦蓋慮莊官等不肖服從異姓人、且既鞠

レ公為所レ子、乃遂賜

公姓藤原氏、令以契子往莅御莊、六月朔日、

聖榮自記、

公發京、八月朔日、聖榮自記、入三部山門、據公室古譜、古今戰、

於是、若夫莊官富山・梅北之屬、雖舊勲於領

家者、亦聞領家既養

レ公為其子、殿下以公為養君、尋賜中之姓、皆相率以事見公室由來、

服事于

公、由是、

公乃命從臣等、營館舍於島津莊衙、謂之祝吉御

所、

御所遺墟、在日州莊內南鄉堀之内、事見聖榮自

記、而其所謂堀内、今為門名、在都城安久村、

一說、在中鄉郡元村云、郡元村、舊名島津、

則安元年間下文所謂、島津莊衙、是地也、解見上萬壽中島津莊註、

十一月、先是、基通公以攝政居散位久矣、至

是二十五日、詔復關白、以兼實退也、先

是釋源空、法然上人、建念佛宗、僧宣阿名說誠、鎌倉淨光明寺主僧、

建保元等、蓋信其法、修專念業、

公亦服之、是歲、創寺於魔島、招宣阿為開山

僧、因號淨光明寺、亦聖榮云、公則信念佛宗、(晨昏)號曰道阿彌陀佛、是也、(勳)魔

島亦島津御莊寄郡、而係

公任所、藤内康友為郡司焉、其置寺、蓋為地

介於山門與莊内之間、故乎、

○八年丁巳、

公年十九矣、先是、幕府置地頭於諸州莊園、

使以巡察焉、詳上文、治元年、而於郡鄉、猶或闕職、故

寺社及國司等、(各所置)群吏、亦於所闕、

動混地頭、頗稱難治、於是四月、幕府有議、

十五日、教書令九州守護人召在廳有識者各報

知其國田數及領主等、五月、守護乃傳令於三州權

椽等^ヲ、據^レ大隅圖田帳、六月、日向薩摩大隅等報^ル呈圖田帳各一通、凡日向總田、捌仟陸拾肆町、而所^レ謂^ル島津御莊、則參仟捌佰參拾柒町、以^レ其中貳仟貳拾町^ニ為^レ一圓莊、

按^レ圖田帳、北鄉參佰町、中鄉佰捌拾町、南中鄉

貳佰町、救仁鄉佰陸拾町、

今志布志鄉、即其地云、有^レ檳榔島、中院通方所^レ著餉抄

云、檳榔毛車所用檳榔、為^レ近衛領鎮、西志摩戶莊土產、亦採^レ於此島者明矣、

財部鄉佰伍拾町、三侯院柒佰町、島津院參佰町、吉田莊參拾町、通

計為^レ一圓莊貳仟貳拾町、皆在^レ諸縣郡、舊本、中

鄉佰八下無^レ十字、不^レ合、疑脫、又島津院之院、

作^レ破字、恐誤也、解見^レ上註、今俗所^レ謂莊內、

亦當時指^レ此一圓莊、後稍地蹙、僅存^レ其名、可^レ

以想^レ也、而萬壽中、宇治殿所^レ置莊衙、亦在^レ此

島津院參佰町之地、因以^レ島津為^レ此莊號、如^レ前

所^レ辨、而島津莊、必薄^レ稅歛、故三州國司等所

領公田、亦多附^レ之、凡附而猶奉^レ國務者、是

為^レ寄郡、蓋寄郡地、必隔^レ島津地、遙聽^レ命於島

津莊衙、故如^レ薩摩大隅、則雖^レ無^レ其中名^ニ島津

地、亦均謂^レ之島津莊寄郡、凡寄郡地、半不^レ輸

貢、見^レ弘安七年下知狀而雖^レ莊務且如^レ國領、兩辨^レ其務、

至^レ一圓莊、則所^レ謂本莊、亦見^レ弘安七年下知狀而惟辨^レ莊

務、無^レ貢^レ國衙、詳見^レ上文治三年三月・四年十

月、可^レ併知^レ焉、又按^レ賦役令、凡封戶者、皆以^レ

課戶^ニ充、調庸全給、至^レ如^レ田租、割為^レ兩分、而

其一入^レ官、其一給^レ主云、據^レ此、寄郡亦似^レ封

戶、然莫^レ知^レ其詳^レ也、抑島津院、三州諸寄郡所

聚為^レ府、故謂^レ之島津本莊、莊官等^ヲ上疏、所^レ謂

島津本莊、或鴨長明無名抄、所^レ載築紫之志麻戶、

或平家所^レ書島津莊等、皆指^レ此地、而弘安七年下

知狀^{〔指宿氏藏本〕}所謂、本莊者、領家一圓之地^云、亦

是也、又諸寄郡、皆所^レ拱本^{〔本〕}焉、故或謂^レ之島津

莊郡本、則天文十四年、島津稻荷上梁文、所^レ書

日州島津御莊郡本、是也、而至^レ近世、省^レ島津

字、只曰^レ郡本、解詳^レ上萬壽中島津莊註、

而所^レ餘、仟捌佰拾柒町、是為^レ寄郡、

亦按^レ圖田帳、新名伍拾町、延喜式、所謂^レ貳亞、疑此也、亞與^レ名通、俗呼^レ二本阿

彌言本名、浮目柴拾町、伊富形拾伍町、大貫拾亦猶是。

貳町、以上在三相杵郡、新納院佰貳拾町、與上新名納院、當時地頭、則掃部頭親能也、至後建宮頸參拾町、久九年二月、公皆領之、詳見上章。

以上在兒湯郡、穆佐院參佰町、救仁院玖拾町、眞幸院參佰貳拾町、以上在三諸縣郡、飢肥北鄉肆

佰町、飢肥南鄉佰拾町、櫛間院參佰町、以上在三宮崎郡、通計如本文、寄郡解既見上註、

皆

公為之地頭、其他所剩、肆仟貳佰拾柒町、而於

其中、貳佰參拾捌町、係三寺領、貳仟佰陸町、係三社

領、仟柒佰捌拾町、係三權門領、陸拾捌町、係三沒官

領、貳拾伍町、係三公領、而所謂寺領、則佰拾伍町、

為三宇佐彌勒寺領、杵杵郡鹽見參拾伍町、富高參拾町、土持太郎信綱為之地頭、宮崎郡船曳伍拾町

法印某為辨濟使、陸拾參町、為三宰府安樂寺領、諸縣郡通計如上文、馬関田

在伍拾町、須江太郎為之地頭、兒湯郡湯宮拾參町、平五地頭、通計如上、陸拾町、為三花藏院

御領、兒湯郡國分寺田貳拾町、法元寺貳拾町、尼寺田拾町、安寧寺田拾町、通計如上、而皆土持太郎宣綱亦地頭焉、按花藏院、為南部一乘院院家、事見折狹柴記、白石折狹柴記、則花藏院、通計寺領、與上正合、所謂社

領、則仟玖佰拾參町、為三宇佐宮領、杵杵郡縣莊佰參拾町、富田莊捌拾町

田島莊玖拾町、故勸藤原左衛門尉為之地頭、岡富莊拾拾町、土持宣綱為辨濟使、多奴木田拾町、宇佐大官司公通宿禰俊家為辨濟使、諸縣郡諸縣莊肆伍拾町、藤原左衛門尉為地頭、畠田別府參拾町、安本司為辨濟使、伊佐保別府參拾町、僧靜蓮為辨濟使、宮崎郡浮田莊參佰町、亦俊家辨濟使、宮崎在參佰町、亦親能地頭、瓜生野別府佰町、大基別府貳拾町、皆貞吉為辨濟使、細江別府貳拾伍町、藤二為辨濟使、長峯別府參拾町、忠助為辨濟使、那珂郡廣原莊佰町、七郎助綱為辨濟使、新名別府捌拾町、亦宣綱為辨濟使、鷹居別府肆拾町、亦藤二辨濟使、竹崎別府肆拾伍町、三郎為辨濟使、渡別府伍拾町、田四郎為辨濟使、兒湯郡調殿拾陸町、亦親能地頭、通計玖拾捌町、為三妻萬宮領、兒湯郡清不台、孰必有誤、水社陸拾

町、亦親能地頭、通計玖拾捌町、為三妻萬宮領、水社陸拾町、國高郡司、那珂郡江田社參拾町、宗遠辨濟使、通計社領、杵杵郡高智尾社捌町、亦宣綱司之、通計如本文、

與上正合、所謂權門領、則仟伍佰貳町、為三八條

女院御領、女院、乃鳥羽法皇之「皇」女、母美福門后也、曰暉子內親王、為後白河帝「之」養母、謂之

之國富莊、宮崎郡加江田捌拾町、延喜式所謂刈田、疑即此地、吉田參拾町、源藤陸町、鏡淵陸拾町、亦平五地頭焉、國富本郷貳

佰肆拾町、今泉參拾町、那珂郡那河貳佰町、田島破肆拾町、此云破、亦疑院之誤、說既見上、袋拾伍町、兒湯郡佐土原伍拾町、倍

木參拾町、新田捌拾町、下富田參拾町、通計仟參拾捌拾伍町、是為三圓莊、魏北郷柴拾町、鹿野田郷伍拾町、通計佰貳拾

町、是為三寄郡、總計如本文、自本郷一下、亦皆宣綱地頭、貳佰

柒拾捌町、為三前齋院御領、兒湯郡平都莊佰町、右馬助廣拾町、重直為之名主、久目田捌町、都於郡佰伍拾町、通計如本文、亦皆重直為之預所、而久目田、係三沒官領、宇都宮所來信房

地頭、都於郡則陸拾捌町、為三沒官御領、杵杵郡三宅郷貳拾町、問世田捌町、通計如上、

貳拾伍町、為三公領、郡曰亦信綱地頭、或為信房云、

拾町、間世田捌町、通計如上、貳拾伍町、為三公領、郡曰右松保、亦總計與上肆仟貳佰貳拾柒町一合、蓋皆非三

宣綱地頭

御莊一也、薩摩總田、肆仟拾町柒段、而島津御莊、則貳仟伍拾壹町陸段、以其中陸佰參拾伍町、本或町作段、為一圓御領、

亦按圖田帳、和泉郡參佰伍拾町、伊作郡貳佰町、日置北郷柒拾町、同南郷之外小野拾五町、通計與上一圓合、而除和泉、皆係沒官領、公地頭焉、既詳上章、

而所餘、仟玖佰伍拾陸町陸段、亦為寄郡、

亦按圖田帳、所謂寄郡、則市來院佰伍拾町、

院司僧、名顯、而公地頭焉、凡郡鄉院、為寄郡者、本多國司領、而所謂公領也、以寄御莊、解見上註、後不註者倣此、滿家院佰參拾町、公地頭焉、河邊院貳佰貳拾町、貳佰拾町係公領、平太道綱為郡司、而拾町係薩摩郡佰陸拾參町、時吉陸拾玖町、在廳道友為之名主、若松伍拾町、崎田五郎、本郡作町、恐傳高誤、而名主也、吉水拾貳町、通計如上、而公地頭焉、又別佰捌拾捌町參段、係寺社領等、各見下註、併此、本郡凡參伍宮里鄉陸拾壹町伍段、紀六太夫正家為郡司、而公地頭焉、別捌町伍段、牛屎院參係寺社領、各見下註、併此、本鄉凡柒拾町也、而陸拾町、永松貳佰肆拾町、太泰元光為之院司、幸萬伍拾舍人康友為名主、光武伍拾町、九郎大夫、山門院佰柒拾伍國吉為名主、通計正合、而公地頭焉、

町陸段、光則佰參拾參町陸段、平秀忠為之院主、辨濟使分貳拾柒町、御莊領家蓋掌之、高橋拾五町、前此是兼入道為名主、時則逝矣、通計正合、而公皆地頭、莫禰焉、別貳拾肆町肆段、係寺社領、併此、本院凡貳佰町、院肆拾町、町、平成光為之院司、土師蒲伍町、小大夫兼保為名主、通計正合、日置南郷參拾陸町、公為之、地頭焉、

頭、加世田別府陸拾町、山田村貳拾町、千與富肆拾町、正合、而公地頭焉、又別拾伍町在村原、係沒官領、以三數島四郎為地頭、併此、凡柒拾伍町、本以公為地頭、一恐是誤也、又貳拾伍町、係社領、知覽院參拾町參段、二郡詳見下註、通計前為貳佰町、

為郡司、而公地頭焉、又別玖町柒段、保府領、見下、併此凡肆拾町、指宿郡參拾柒町柒段、平三忠秀為下司、而公地頭、町下本有內七段三字、恐錯置也、在廳種明為本郡司、而公地頭焉、別貳拾參町、保府領、見下、併此凡伍拾柒町、肆拾柒町、頭焉、小大夫兼保為郡司、而公地頭、

則必脫、谷山郡貳佰町、而為沒官領、其餘拾捌町、伊佐知佐、田、而係府領、皆公地頭焉、通此如此、

伍段、佰玖拾柒町、係公領、前此、平忠純為之郡司、至係、以前內舍人康友為郡司、又柒町伍段、郡本社田、而係府領、通計如上、而公皆地頭焉、別參拾柒町伍段、係寺社領、荒田莊捌拾町、係正八幡領、各見下註、併此、本郡凡參佰貳、伊集院谷口拾肆町、係沒官領、公地頭焉、拾貳町、別陸拾陸町、多係三萬

得、詳見正八幡領、通計寄郡為仟玖佰伍拾陸町陸併此凡佰捌拾町、

一段、
併諸一圓、

公皆地三頭焉、其佗所剩、仟肆佰拾玖町壹段、而於其中、陸伍拾伍町、係寺社領、則伍伍拾肆町肆段、為宰府安樂寺領、

阿多郡伍町、高城郡參拾伍町、薩摩郡貳拾陸町捌段、入来院貳段、

阿多郡參拾柒町伍段、通計陸町伍段、是為國分寺田、而備安靜為之、宮里鄉內天満百田柒町伍段、在聽道友為之、

山門院內老松莊貳拾肆町肆段、本無下司、疑脫漏耳、高城內温田浦拾捌町、係沒官領、千葉介常胤之地頭、總計如上、

玖拾陸町壹段、為宇佐彌勒寺領、阿多郡肆拾肆町捌段、府捌町伍段、薩摩郡伍町捌段、入来院貳町、通計玖拾壹町壹段、

是為五大院田、而備安慶下司焉、阿多郡肆町、高城郡參拾町、參拾町、宮里鄉壹町、通計參拾伍町、是為新田宮領、而備經宗下司焉、

日置莊內北郷參拾町、是為本寺領、小野太郎家綱為之、加世田別府內貳拾伍町、為益山莊、以係社、貳佰貳拾伍町參領、

薩田太郎光澄下司焉、總計與本文合、貳佰貳拾伍町參段、本無參段、不為正八幡宮領、

薩島郡荒田莊捌拾町、合、恐脫、是為一圓領、前掃部頭親能為之地頭、

又佰肆拾伍町參段、為萬得領、通此如上、佗稱萬得、則高城郡拾伍町、草道拾伍町、大河參町伍段、

薩摩郡光當貳拾町、都浦拾町、伊集院上神殿拾捌町、下神殿拾陸町、桑羽田伍町、野田陸町、大田伍町、寺脇捌町、時吉貳拾伍町、

自大田下至時吉、在聽道友皆為名主、末末貳拾伍町、八郎清景為之、院司、續飯田捌町、權太郎兼直為名主、土橋拾參町、

紀四郎時綱為名主、河、侯拾町、僧忠覺為名主、十萬陸町、紀平二元信為名主、飯幸禮參町、松本拾捌町、而草道、大野、都浦、野田、大田、寺脇、通計肆拾柒町伍段、皆註其下、為御在論地、而凡論地學、伍拾柒町伍段、與之不、據此、河侯拾町下、疑脫註、果爾

(然)

併合、而舉其無論者、通計佰柒拾貳町、亦不、阿多郡久吉捌段、伊作莊貳拾貳町伍段貳文、沒官領、而為論地云、蓋伊作與、公爭、又阿多與、較島柒拾玖町貳段、係三府領、知覽院四郎爭、而應云爾也、

忠益下司、穎娃郡貳拾參町、次郎忠康下司、指宿郡玖町參段、又薩摩郡壹町柒段、為中島宮領、郡司忠友為之、

公地三頭焉、又薩摩郡壹町柒段、為中島宮領、郡司忠友為之、

公地三頭焉、又薩摩郡壹町柒段、為中島宮領、郡司忠友為之、

郡本社領、康友下司、而皆、公地三頭焉、通計陸佰伍拾伍町、與、上正合、又陸佰貳拾壹町陸段、係沒官領、

其肆佰拾壹町貳段、參佰柒拾捌町貳段寄郡、而係沒官領、參拾參町、係寺社領、通計正合、既見上文治、

千葉介常胤、為之地頭、貳佰拾陸町肆段、詳上建、

較島四郎宗家為之地頭、而如八幡領、詳見掃部頭親能正治元年出家號、

寂忍、為之地頭焉、又貳佰拾壹町、能承元二年卒、年六十六、

係三國領、即公領、而多寄御莊、猶其所餘、謂之一圓國領、

在薩摩郡等、多混此也、又伍佰陸町伍段、係權門領、亦多混寺社領、而不隸地頭一者、皆是也、

大隅總田、參仟拾柒町伍段壹文、以其中柒佰陸拾町、本陸作五、不為新立莊、

按圖田帳、深河院佰伍拾餘町、財部院佰餘町、多禰島伍佰餘町、通計為柒佰陸拾町、或作柒佰拾伍町、自保延中、新立御莊、不隨國務云、

詳見上保延六年、又建治二年石築地賦、作新莊
柴佰伍拾町、與一本合、未知孰是、

而所餘柴佰拾伍町捌段參丈、為寄郡、

按建武三年二月舊記、田數與之同、而建治二年
賦、則作柴佰伍拾〔町〕捌段、今舉圖田帳所

載、橫河院參拾玖町伍段貳丈、菱刈郡佰參拾捌町

壹段、幕府下文陽三郎房入山村貳拾町、為宮崎宮浮免
重砂、是為郡本、田亦賜三千
兵衛尉、而脫田數、據建治賦補書串良院玖拾町參段貳丈、鹿屋院

捌拾伍町玖段、肝付郡佰參拾町貳段參丈、禰寢北

俣肆拾町伍段肆丈、下大隅郡玖拾伍町玖段、始良

西俣貳拾肆町陸段貳丈、小河院內百引村拾參町肆

丈、小河永利拾貳町陸段肆丈、曾野郡永利貳拾參

町參段參丈、筒野野肆拾捌町伍段壹丈、通計柴佰

陸拾貳町陸段伍丈、不與本文合、建治二年賦、

曾野郡永利貳拾參町參段參丈、則作曾野永利拾

壹町壹段、用松貳町肆段、辨濟使分參町陸段、加

治屋伍町貳段壹丈、通此所計、貳拾貳町參段壹

丈、亦以併前、則為柴佰陸拾壹町陸段參丈、此

亦不合、孰必有誤、今靡由攷焉、
亦併前、皆

公為之地頭、而所剩、仟貳佰玖拾陸町參段、係

正宮領、伍拾陸町壹段、在曾野郡、貳佰柒拾肆町捌段、在小
河院、佰拾參町玖段、在桑東鄉、佰肆拾參町陸段、

在桑西鄉、參佰柒拾壹町、在帖佐鄉、佰拾町玖段半、在蒲生

院、拾捌町貳段、在吉田院、佰貳拾壹町柒段半、在加治木鄉、

肆拾町、在禰寢南俣、陸拾肆町、在栗野院、捌町、在鹿屋院、

伍拾餘町、在始良莊、通計仟參佰柒拾貳町參段、與上不合、孰

必有誤、於其中、伍佰町伍段、則為不輸、前所謂一

圓莊、是也、柴佰玖拾伍町捌段、則為應輸、帳所

謂國方所當辨田、蓋是也、又如帖佐・蒲生等、

為半不輸、亦所謂寄郡也、而掃部頭親能皆地頭

焉、東鑑建仁四年亦云、詳見
追言此事也其諸所掌吏、為三宮方御家人、下建
久九餘皆為國領、而佰陸町半、為三其公田、在捌拾壹町、

捌町伍段半、在小河院、拾伍町伍段、在桑東鄉、壹

參段、為三其不輸、則帳所謂寺田經講田、是也、拾

陸町、為三府社五箇所領、伍町柒段、在曾於郡、捌町肆段、
在桑東鄉、
壹町壹段、在桑西其所掌群吏、為三國方御家人、亦見
建久九

年、閏七月、在廳以上三於鎌倉、
按圖田帳、薩隅日三州、總計田數、壹萬伍仟玖

拾貳町貳段壹丈、而島津御莊總計、柒仟玖佰肆町肆段參丈、以其中參仟肆佰拾伍町為本莊、而其所剩、肆仟肆佰捌拾玖町肆段參丈、為之寄郡、而非御莊者、猶別有柒仟佰捌拾柒町柒段捌丈、與之通計、兩三分三州、則御莊過其半者、參佰伍拾捌町參段許、其地往往散在諸郡、殆吞三州、實至無三州不有御莊、則酒匂得貴道鑑公守護代疏云、以島津莊孕日隅薩、事昭晰下文、又應

永記云、薩隅日孕於御莊、故謂島津御莊三國、又山田聖榮云、島津莊、乃莊內也、以莊內懷三州之類、是也、所謂下文、則指元曆二年八月十七日也幕府使シムル公為下司於島津御莊ヒキヤフ帖其文以為三州總稱者、可見矣、而其為總稱、則幕府意、蓋在乎使シムルニ公ヤ稍統領三州者、亦明矣、聖榮自記有之、云、三州兵強、御家人等尤誇勇悍、是故、幕府使シムルト公恣逞シ武威、以降服之、亦可併証矣、

是歲、

公自山門院、徙居莊內、謂其館舍、曰祝吉御所、詳見前年、

據聖榮自記・公室由来・古今戰・稻荷社記等、

但公就藩、自古諸書、多有兩說、而其一、則為文治二年、又其一、為建久七年、今季安按、皆實說、而似兩有謂、其所謂文治二年、公

始就藩、則據五年九月、幕府賜公書曰宜率莊兵會于關東之文、其既入部、從可証也、

又所謂建久七年入部、則據古今戰等四年迄七年、公仕大内、說與新後撰等有符合、亦足証焉、以是觀之、聖榮自記、文治二年秋、

公就國云、或又先至山門、自其而居島津莊堀內云、或古今戰、先住山門、其後移莊內云、

說、竝雖無年月、其所謂先者、指文治二年、而曰其後者、指建久七年、明矣、何者、一則入部山門、一則入莊內、故公入部、自古相承、兩說竝傳、亦可以知也、但公室由来、本田親恒、先至山門云、則指文治元年、公拜下

是歲、

是歲、

司之時、而公至、則在二年後云、亦指文治

二年、明矣、或由來文、因近衛殿傳、公三州、

就居島津莊云、亦實指建久七年事、參此衆

說、可証焉也、

初、

公之生也、狐火照暗、從者咸以為稻荷所祐、

據安國・聖策二書、故其辭京也、奉而就封、事見天文

文、乃九月、年月據其社傳創社於島津、奠以祀焉、因

號島津稻荷、據文明七年島津稻荷遷宮記山、十二月、

先是、

公以總地頭等入三郡三州、然猶莊公寺社、所各置

職、如三郡司・稅所・田所・執行・政所・預所・下

司・名主・辨濟使・收納使之類、多為御家人、而

附鎌倉者數十百人、於薩州、則覺島郡司藤內康

友、河邊平次郎通平、別府五郎忠明、穎娃次郎忠康、

伊作平四郎實純、據土持仙岩云薩摩太郎忠友、知覽郡司

忠益、一說忠信、益山太郎光純、疑藤田太郎光澄、此高城郡司師高、

在國司道友、牟〔木〕太郎、薩摩太郎忠友、為牟木浦名主見貞應二年下知狀

江田四郎、長谷楊氏本、無此人、今從水引權執印氏及江田氏二本、莫禰郡司成光、

山門郡司秀忠、給黎郡司有道、指宿五郎忠光、南鄉

萬楊坊覺辨、小野太郎家綱、市來郡司家房、滿家郡

司業平、宮里八郎正信、古城記作六郎、萩崎或作萩野三郎、伊

集院郡司時清、和泉小太夫兼保、是為薩摩御家人、

事見隅州、則稅所藤原篤用、領會乃郡重富參拾參町、重

通計貳、田所建部宗房、領會乃郡重富參拾參町、小河

拾參町、院廻村弟子丸伍町參段壹文、曾野郡

司藤原篤守、領會野郡重校貳拾町、小河郡司酒井宗方、注進作宗

高誤、領本院用富肆拾伍、加治木郡司吉平、領加治木公田帖

町、或列官方、淡考、蓋領公田陸拾、領小河院

佐郡司高助、捌町肆段半、執行建部清俊、武元貳町、東

鄉郡司大中臣時房、秋松貳町、河保新太夫藤原篤賴、

領會野郡用松拾伍町、佐多新太夫建部高濤、領桑東鄉武安伍町、禰

謂平高濤、疑誤此、彌三郎太夫近信、或作權

部近延、亦應此人也、領會野郡元禰寢郡司建部清重、舊本

行伍町、小河院元行壹町貳段參佰步、禰寢郡司建部清重、舊本

郡司下字蝕滅、然建部清重、領禰寢郡本參拾町、事見其條、據

此、郡司下雖蝕滅、建部清重、則為之郡司、從可知也、況後

七年建仁三年、幕府以禰寢郡司入道清重法師、為禰寢南院院

年也、今據_二圖田帳、清重之為_三郡司、(且)高清_レ稱建部、皆既在_レ建久八年以前、亦可_レ見矣、於是乎、先史河野通古・伊地知重英等之評、清重、亦既疑_レ非平、木房紀太郎良房、(皆)或作_二新太夫、_一氏、蓋可_レ謂_二皆有_レ見焉、(各)領_二桑東鄉主丸、_一

伍、西鄉郡司則貞、領_二桑西鄉、_一西鄉酒太夫末能、(或作)井末能、此只言_二酒、其路耳、領_二桑西鄉溝部在河幾町、亦是為_三國方御家人、_一國方、即國司領也、政所守平、長太夫清道、

息長姓、源太夫利家、修理所酒井為宗、(領)加治木吉田氏、源太夫利家、修理所酒井為宗、(宮)永柳町、權政所良清、(吉)田氏二世吉、栗野郡司守綱、(領)公田、脇本三郎太夫正平、太郎太夫清直、(滿)生氏祖、六郎太夫高清、矢太郎大夫種之、(元)力、嶋四郎近延、始良平太夫良門、(良)始

惣領、世受得丸、祖曰_二平判官良宗、_一執行_二大夫助平、_一新大夫乃平大監季基之弟也、(並)見_二上章、_一

宗房、(亦)季基弟_二宗清之、_一小平大夫高延、(亦)季基弟_二小平大夫、_一子、(世)承_二末次、_一宗高子、高信乎、敷根次郎延包、(東)鑑為_二帖、_一彌次郎貫首友宗、三郎大夫近直、是為_二宮方御家人、_一宮方、正宮

領諸職也、而幕府既浮_二帖下文、_一解_二島津御莊_レ義、_一為_二薩隅日之總稱、_一(詳)見_二上元曆_レ使_下

公為_二其總地頭_一以位_二此等、_一然非_二御莊_一者、蓋尚往_二往或拒_一

公命_一、動_二至_レ下_一關_二宿衛_一、(內)裏、或略_二賣人_一、或擅殺_レ人、於是三日、幕府令_二政所別當因幡守廣元等_一下文、以

(公)書曰_二左兵衛尉惟宗忠久、據_二為_三薩隅兩州家人奉行、_一日日向圖田帳、則左疑右之誤、使_二以布_レ令守_二護國中、_一

按_二東鑑、_一以_二天野遠景_一為_二鎮西九州奉行人、_一或書_二之鎮西守護人、_一而酒勾貞阿撰_二目錄、_一亦載_二此下文、_一作_二大隅薩摩兩國奉行、_一又御家人等_二大番于京、_一皆隨_二守護人、_一例亦在_二東鑑寶治二年、_一正月二十五日、又鎮西地頭御家人及本所一圓地輩、皆宜_二從_二守護_一立_二軍功、_一事見_二弘安九年卅日、_一執權貞時等與_二道義公_一書、且此下文、有_二宜_レ守_二護國中_一之語、據_二是觀_レ之、_一公為_二大隅薩摩守護職、_一亦在此時、却似_二有_二明證_一焉、山田聖榮所_レ謂、幕府花押下文有_レ之、云_二三國地頭御家人宜_レ為_二公下人、_一亦必本_二乎此、_一明矣、所謂_二下人、_一家人之誤爾、

曰、汝克懋_レ職、勿_レ免_レ無_レ辜、如_二家人等、_一亦勿_二下

誇_レ優恕_二拒_中奉行令_上、既而幕府又令_下。

レ公權執印氏、江田氏藏本、並書_三左衛門尉_一、而長谷場氏藏本、則作_レ衛門兵衛尉、稽_レ諸薩隅田帳、皆與_レ之合矣、據_レ此、長谷場氏本、促_二御家人等_一、必限_二明春_三三月宿_中衛於_レ内裏_一、乃_二二十四日_一、

公移_二文諸郡_一、以詢_二告_一之、據告薩摩御家人書、而告曰、隅御家人書、亦應_二必在_一也。愚末_二之觀_レ耳_一。

○九年戊午、

公年二十矣、既移居_二於日之島津莊衙_一、祝吉御所、匪_三啻_二懷_レ服其莊官等_一、至_レ若_二隅薩諸御家人等_一、亦莫_レ不_レ順_レ焉、觀_二上文移_一、可以知也、於是乎、幕府賜_二

公島津氏、蓋_二本藩以_三島津_一為_二國姓_一、則自_レ斯始也、謹按_二古書_一、公稱_二島津氏_一、愚所_二竊見_一、則自_二本年二月二十二日執達狀_一始、而前年十二月三日下午、則尚題_二惟宗某_一、又其月二十四日文移、亦只書_レ官、而未_レ書_レ氏、如_二上所_レ註、據_レ此、迨_二公居_二於島津本莊_一、始以為_レ氏、可_レ概知_二也、又其始號_二島津氏_一、蓋應_レ在_二乎八年十二月二十四日以前_一、後九年二月二十二日以前_二也、而古今戰所載、

幕府謂_レ公曰_二島津殿_一、亦應_レ言_二此時事_一也、又

按_二聖榮日記_一、云、惟宗廣言、始居_二島津_一、稱_二島津殿_一、公居_二其迹_一、故稱_二島津氏_一、又花押藪云_二

右大将頼朝子繼_二島津家_一、亦承_二聖榮說_一乎、先史田中國明云、自_レ公以前、無_二島津氏_一、今從_二其說_一、粗註_レ考爾、

前_レ是、日之飢肥南郷、佰拾真幸院、參佰貳穆佐院、

參佰薩之滿家院、拾町宮里郷、陸拾壹各置_二之郡司

名田_一、而薩之日置郡南郷、原文無_二郡名_一、據_二比志島氏書補_一、隅之鹿屋

院、捌拾伍各置_二辨濟使名田_一、皆係_二島津莊_一、又日

之柏杵郡新名、伍拾浮目、柒拾兒湯郡新納院、拾貳

亦雖_二同寄郡_一、新名_二以下_一、(ハナリ紙)掃部頭親能為_二之地頭_一、

又惟澄者、領_二地於莊内_一、本無_二地名_一、按_二隅州圖田帳_一、入所謂惟澄、疑而於指_二此人_一乎、而於

レ公、則既雖_レ惣_二地頭_一於島津御莊、猶頗有_レ闕_レ焉、

至_レ是二月二十二日、幕府使_二時政贈_一

公書_二悉以領_レ之、書曰_二島津左衛門尉殿_一、

公號_二島津氏_一、見_二于古書_一、蓋_二于_レ斯始也、初久米乃

次郎家願、事^フ幕府、而無^レ子、故家願請^下以^三所領^一傳^中弟忠重、忠重尚幼、藤内康友領^レ其地、所^レ在末友為^レ名主於牛屎院木崎十五町、皆見^レ前年圖田帳、疑指^レ此地乎、

公任所也、至^レ是九月、復致^三

公書、使^レ按^三察^一之、書曰^三島津云云^一、亦如^三前例^一、蓋居^レ於莊衙^一故也、

○十年己未、

公年二十一矣、正月十三日、幕府^{賴朝薨}、年五十

三、適子賴家嗣、將軍、勅改^三年號^一、為^三正治元年^一、

○二年庚申、

公年二十二矣、往事^三幕府於鎌倉^一、發行年、月無^レ考、二月二

十六日、賴家謁^三鶴岡廟^一、

公東帶從、列於後隊二十人中、事見^三東鑑^一、亦書^三島津左衛門尉^一、蓋^三公載^三東鑑^一、則自^レ斯始也、

○建仁三年癸亥、前年十二月二十五日、基通公停攝政、見補任、

公年二十五矣、先^レ是、幕府^{賴朝}賜^三菱刈六郎重俊

下文、使^三以領^三隅之禰寢南侯四拾町^一、係^三正宮領^一、而重俊蓋^三南侯地頭

也、但掃部頭親、而於^三郡本參拾町^一、以^三建部清重^一為^三之

郡司、如^三佐汰拾町、通上為^三四拾町^一、亦賜^三建部高清下文^一、

使^三以領^レ焉、據^三建久八年圖田帳^一、既而重延蓋代^三重俊^一、蓋重延父兄乎、

補^三地頭於南侯院^一、而重延卒、於^レ是乎、禰寢郡司清

重入道如^三鎌倉^一、求^レ補^三重延嗣^一、乃七月三日、賴

家花押、使^レ時政命^三清重法師^一為^中南侯院地頭職上、

當^三此時^一、

公在^三島津^一、故二十三日、迨^三〔郡司〕(清重)將^レ飯、時政

乃致^三

公書、令^三以識^レ之、居^三家人奉行^一故也、初、賴家

納^三能員之女^一、曰^三若狹局^一、生^三三子^一、一萬、外祖能員、欲^三立^レ之

以假^三其威^一、八月、政子廢^三賴家^一、二十七日、遷^三諸

豆州^一、乃圖^下兩〔分〕日域、傳^中其弟千幡實朝小字、閔西、

三十、一幡閔東、二十、能員聞而弗^レ悅、陰謀^レ滅^三北

條氏^一、政子聞知、以告^三時政^一、乃九月二日、時政使^三

天野遠景等殺^三能員及子宗員等^一、四日、

公亦連坐、罷^三薩隅日等守護職^一、事出^三東鑑^一、

公於^三能員^一、有^三義甥^一、詳見^三治承三年下註^一、時亦在^三島津^一、而

無^レ與^レ焉、十日、政子遂舉^三千幡^一、立^三幕府後^一、恐^三

世且^レ亂、乃時政發^レ書、令^レ復^ニ。

公等原任、十月、時政遣^ニ武藏守朝政^ニ如^レ洛、宿^ニ衛京都、三日、朝政赴^レ之、故又飛^レ檄、徧徵^ニ西州領^ニ邑者、各皆如^レ洛、與護^ニ京都、亦見^ニ東鑑^ニ。

公在^ニ島津、既聞^ニ能員變、又會^ニ檄至、乃將^ニ發行、而心猶懼、於是十九日、挾^レ書、告^ニ禱於隅之衆集院、今清水、曰、方今如^レ洛、無^レ事得^レ還、宜^ニ下作^ニ本堂^ニ、四面以酬^ニ佛恩、既而赴^レ之、至則無^レ事、故公反^レ自^レ洛、遂作^レ之云、

事見^ニ願書、但舊說、則為^レ至^ニ鎌倉、今稽^ニ願文、有^ニ上洛語、則與^ニ東鑑本月三日朝政上洛事、如^レ合^ニ符節、然至^ニ鎌倉云、乖^ニ違願文、恐無稽爾、故從^ニ東鑑、註^ニ埃^ニ博識、且是歲、公年二十五、俗所謂御^ニ厄年、而遭^ニ此厄、據^レ是觀^レ之、今世流俗、值^ニ此年者、必禱^ニ神佛、亦於^ニ西藩、蓋首^ニ于斯^ニ也〔乎〕、先^レ是、

公居^ニ押領使、而如^ニ下大隅郡・鹿屋院・串良院・小

原別府・禰寢院指北俣肆拾町伍段釋文、明矣・肝屬郡内浦或作内之村。

柏原別府等辨濟使租入、此云得分米、猶今所務米、亦係^ニ其所^レ領、

至^レ是十一月、領家政所、更有^レ所^レ議、十日下^レ文、

使^ニ義廣〔按富山系圖、義良弟義行次孫有三郎左衛門而〕、義弘者、疑此人、舊記所謂富山為父、亦此云、皆

運^ニ輪之於京都、栗野神田、橋氏文書、

○四年甲子、

公年二十六矣、正月十八日、御莊政所蓋指島津莊衙、下^レ文、

令^ニ於郡鄉院、如^ニ前年下文、二月、勅改^ニ年號、

為^ニ元久元年、初、

公之地^ニ頭於島津御莊也、遣^ニ代官等、徵^ニ輸歲租、

義解云、與^レ人令^レ佃、至秋輸、其租、為^レ租、即今地子、此云、然莊官等、動^ニ至^ニ與^レ之交爭、

其租、地頭分與、領家分也、以亂^ニ莊務、至^レ是、領家基通公乃

告^ニ于鎌倉、定^ニ地頭入、此云得、曰、於^ニ本莊、則段

別壹斗、

按^ニ田令、凡田長三十步廣十二步、為^レ段、十段為

町、而段租稻二束二把、又義解云、束稻春得^ニ米

伍升、據^レ此、段租稻二束二把、則壹斗壹升、正

三位以上田租亦同^レ之、然本莊段別壹斗云、比^ニ諸

田令、則知減壹升焉、

如寄郡、則段別伍升、當租稱壹束、則弘安九年下知狀所謂、忠宗公所領成校名伍升米亦是也。

而別割薩隅各參拾町、日向肆拾町、正三位田則以許二與之同、

地頭一、為用作田、通為佰町、如其佰町、則段別

壹斛貳斗、至若其他山野狩倉、亦各分其堺、是

為地頭分、乃五月四日、鎌倉執權下文於三州地頭

等、令違是法、據藤野氏所藏鎮西下知狀及比志島氏藏嘉祿二年十二月八日武藏守等下知狀、

地頭米、則於郡司倉、勘其得分、令以給之、

為先例云、見正中二年十月十日英時下知狀、所謂廩稍之類乎、

今季安生乎六百餘歲之下、按建久八年圖田帳、

以違是法、則島津御莊、日向本莊貳仟貳拾町、

以其中肆拾町為用作田、以段別壹石貳斗計

地頭租、此云地頭得分米、為肆佰捌拾石、而所餘本莊、

仟玖佰捌拾町、則以段別壹斗計地頭租、為仟

玖佰捌拾石、又寄郡仟捌佰拾柒町、以段別伍升

計地頭租、為玖佰捌石伍斗、薩摩本莊陸佰參拾

伍町、以其中參拾町為用作田、亦以段別壹石

貳斗計之、則地頭租、為參佰陸拾石、而所餘

陸佰伍町、以段別壹斗計之、則地頭租、為陸

佰伍石、又寄郡仟玖佰伍拾陸町陸段、以段別伍

升計、則地頭租、為玖佰柒拾捌石參斗、大隅本

莊柒佰陸拾町、以其中參拾町為用作田、以段

別壹石貳斗計、則地頭租、為參佰陸拾石、而餘

本莊柒佰參拾町、以段別壹斗計之、地頭租、

為柒佰參拾石、又寄郡柒佰拾伍町捌段參丈、以

段別伍升計之、地頭租、為參佰伍拾柒石玖斗

壹升伍合、凡三州本莊、總計參仟肆佰拾伍町、於

其中、佰町則地頭用作田、而其租為仟貳佰石、

所餘本莊、參仟參佰拾伍町、其租則為參仟參佰

拾伍石、又寄郡總計、肆仟肆佰捌拾玖町肆段參丈、

其租則為貳仟貳佰肆拾肆斛柒斗壹升伍合、凡三

州總計地頭租、則陸仟柒佰伍拾玖斛柒斗壹升伍合

也、但當時、六尺為步、三十六步為畝、參佰陸拾

步為段、參仟陸佰步為町、蓋和銅制也、後降文祿、

京命革制、步增三寸、又降慶長、增之二寸、而以

六尺五寸為步、〔而〕參拾步為畝、則古之一步、

校今之一步、方減伍寸、而今之一畝、校古之一畝、

亦減六步、故隘古畝者、陸分柒厘肆毛零、其積至

段、亦猶減古者、陸步七分肆厘伍毛零、又其至町、

亦減古〔町〕者、陸拾即為柒步肆分伍厘伍毛

零、〔以是計之、如其町段、雖與今異、如公所

食租、大較據右、可以知焉、〕今也、日域廢

郡縣、而立封建制、自是、列國皆世襲侯爵、

故如租法亦家所制、而我藩今租法、則太抵

石別所入參斗五升、及役米貳升、代米壹升、賦

米壹升壹合也、試以古租推今法、所謂陸仟柒

佰伍拾玖斛柒斗壹升伍合、則今稅額壹萬陸仟玖佰

捌拾肆石貳斗捌合伍勺肆撮之入、而似租甚微、

然稽時勢、則當時既王室雖衰、其故家遺俗、

流風善政、猶有存者、幕府霸業、殆乎成亦

難遽變、則東鑑曰、地頭〔奉〕職、勿如私

邑、見文治五年四月若違領家、宜罷其職、亦見五月多

如此類也、且按祿令、正三位食封為百三十戶、

稽賦役令、凡封戶者、皆以課戶充、調庸全給、

而三分田租、其一入官、其一給主云、若夫忠

仁公、詳見上註則

六十五清和帝時、以外祖戚、封三千戶、知足院忠實公、

亦詳上章亦

五十七崇德帝時、封三千戶、皆特恩而所罕有也、

今據壹井氏說、以三十二戶充田一町、計之

町積、則雖三千戶、猶減百町、匪啻本邦、孔

子大司寇祿、亦為今陸仟肆佰陸拾柒石參斗貳升、

可以知古者王制與今懸隔也、據是觀之、

如公所食、則於當時、既知豐博超乎古

制矣、況不但三州地頭租、至若三州守護領及

伊勢・若狹・越前・信濃等、亦於別所食多焉

乎、自時而後、王室稍衰、天下兵權專歸鎌倉、

政柄遷移、出自執權、繼之以元弘亂、而南北

分朝、群雄割據、附勢爭地、強益掠弱、於

九築、則太宰少貳賴尚等、聽尊氏命、略地聚

兵、遙應其師、如日之島津莊及國富莊、亦多

係尊氏國、今按比志島氏藏書、其舉足利氏屬

國也、於日向則曰、國富莊、按建久圖田帳、在三郡、凡千五百二町、宮崎・那珂・兒湯之皆係八條女院御領、曰島津莊、是也、迨其領之、

蓋尊氏遣若林左兵衛尉或作大秀信、以三其屬徒若

林彈正忠年秀・橘内兵衛尉秀信屬也、亦等、居三任於

島津莊惣政所、以掌日之莊事、由是、秀信聲

振、遠近、按是領家政所、領家前此所置、而降、考建武二年、尊氏

割御莊、十二月、教書使島津時久為地頭於新

納院、在兒湯郡、凡三百町、如穆佐院、在諸縣郡、為御臺所湯

沐邑、是月、八代城主伊藤祐廣藤内左衛門尉等、應義貞

軍、劫掠隣近、十三日、進入國富莊、二十四日、

取穆佐院政所、三年正月、島津莊惣政所即指秀

政所址、恐不與、今在內所遺郡本同也、按甲斐重則筆記云、天正六年、我實明公既服日向、而豐肥界、尚未悉服、故父重尚乞兵平之、公褒其功、以重尚為地頭、使領

田代至高知浦二十六村、則有曰志麻戶村、在其中矣、秀

信等所居惣政所、疑後名村、即為其址、亦及本州守

護代榮幽未考、姓氏、等、告急於大宰少貳、二十五日、

少貳乃使羽月元眞四郎右衛門尉等還募兵伐之、據三野田

書及日州大田原、當是時、島津莊領家、則近衛基通公

百姓新助文書、當是時、島津莊領家、則近衛基通公

六世孫關白經忠公也、四年五月、經忠公歸南

帝、觀應元年、畠山直顯攻新納院、亦陷之、二

年二月、尊氏又以島津資久為柏杵院地頭、文

和元年四月、幕府義教書、賜資久宮崎郡等、島

津資忠莊内北郷三百町、前此、直顯取新納

院、祐廣取穆佐院、各據之、至是二十九日、

幕府賜島津族人書、使俱伐之、八月、關白經

忠公薨、是為堀川殿、為尊氏被奪御莊、亦應

在斯時也、故欲復之、而歸南帝、可見

矣、凡島津御莊領家、肇於頼通公、訖乎經忠

公、歷世十三、自萬壽元年、迄文和元年、其

間經歲三百二十九年、而所謂十三公、則宇治關

白頼通公、莊官上疏所謂、宇治關白家、是也、

而京極撰政師實公、而後二條關白師通公、而知足

院忠實公、大隅圖田帳所謂、保延年中建新府

者、按大系圖、則應此公也、而法性寺忠通公、

而六條基實公、而普賢寺基通公、鎌倉幕府下文及

莊官上疏等所謂、島津莊領家、多指此公、而我

得佛公之御契父、是也、而猪隈関白家實公、而

岡屋△關白兼經公、而深心院基平公、而淨妙寺家
基公、建治二年石築地賦所謂、島津莊領家近衛
殿、今推二年世、則當此公、明矣、而岡本左大臣

家平公、永仁五年七月五日、執權與相▽兩守△與三 道
義公山田氏藏、書所謂、島津莊本家、及應長元年十一月

金峯山鐘銘所謂、關白殿下、皆當此公、亦明矣、
而堀川關白經忠公、是也、而公之子曰三三位經家

卿、凡近衛宗後、至此卿絶、而今近衛殿、則出
自家平公弟後淨妙寺經平公、而基嗣公、而道嗣

公、而兼嗣公、而良嗣公、而房嗣公、而教基公、
而政家公、政家公至準三后、文明十三年秋、遣

太醫陳祖田、來使於藩、乃我 圓室公特遇二待
之、十四年春、辭飯京、事見漁唱、桂菴所書則曰

準三宮釣旨、或曰大相國釣命、稽諸系圖、皆
指此公、明矣、而尚通公、永正九年、洛人巢松

贈島津忠朝稱豐、詩并序、勸其如京、曰、伏聞、
君侯上世、分自藤相國、而不游京、〔特〕為

可馬惜、亦當三公時、所謂分自相國、云、

〔此篇甲
午正月
ト九月
ニ兩度
種家公
親筆色
紙形三
十六枚
ノ來歴
ニ付、
別ニ愚
按アレ
ハ重テ

則△追言、基通公賜得佛公姓藤氏事、可見
矣、於是乎、尚通公屢賜 大翁公、書曰書、告

脩舊好、難然、公時三州大亂、至其遜位於大中公、而
大中公、梅岳君與梅岳君、靖三州

亂、八月二十八日、無考、賜 公書、亦促之、間
歲、尚通公以其女妻幕府、義晴為御臺所、

天文五年、御臺所生男、三月十日、是為〔幕府〕義
輝、當是之時、〔我 藩大亂〕、新納忠勝近江守、

奉 大翁公、亦頗振兵威、〔於是〕四月、尚通公
〔親加花押〕、賜忠勝書、〔七日〕其大夫進藤長

美筑後亦奉旨、致之書、亦廿七日曰、遭二世亂劇、如
家領亦為人被奪者、有年于此矣、近妻幕

府、既生儲君、家門昌盛、天下安泰、莫善於
斯、今而不興、殆將衰絕、抑家門之於責邦也、

由緒異佗、故使九澤軒特脩舊好與以謀事、
而〔今季安、稽花押〕、其親所加、則公花押

也、且長美書所謂、禪閣亦指公矣、而植家
公、植家公時、〔我 梅岳君及 大中公、靖三州

亂、亦修舊好、十四年、迨三州多仰、公為中

參考シ
テ再撰
スヘシ
イマダ
精シカ
ラザレ
バ也

與主、乃植家公遣日野資將來於藩、賜（文勳幕府、公

書及守護束帶以賀之、二十年十一月、（植家公

勸（即義輝下賜）賜（以）名世子（勸）、實明公其諱義字、

〔乃〕晦日、幕府〔義輝〕手書許之、（明年）、（二十一年）、

及梅岳君、欲遣使京、聞古市甲斐守（出羽最上人、

嘗游京師辱殿下知、乃使國老伊集院忠朗（大和守）召之

於種子島、時甲斐老矣、故使子實清（稱長門守、代趨

召、於是公遣實清如京使於殿下及一色式部大輔

△六月、實清至京、為公私請叙爵、殿下以聞

幕府、乃十一日、幕府擢公任修理大夫、且賜

世子（實明）諱字、因是二十七日△殿下（亦）賜（世子）、

書▽及太刀一口、賀之、此日、又賜梅岳君及

樺山善久（安藝守）書、且饋君小棧（紙色）三十六丁善久二

十丁、皆言由緒異佗、宜脩舊好之狀、（二十八日、進

治亦致善、七月三日、又賜實清書、特勞之、（九日、半松

善久書、皆前、既而回落△由是、（世子）名曰義

久、而前久公、永祿七年、前久公及父殿下、為

〔大貫二公〕、請（世子）官途於

主七正親町帝、乃三月、宣旨以（公為陸奥守、舉世子）

守、（前此、任）舉（貫明公）任修理大夫、（小字又

乃殿下貶新納忠元（武藏守）書、使豫告之、天正四

年、前久公來〔旅〕寓于藩、貫明公禮待特篤、

而信尹公、信尹公時、豐太閤西征、貫明公與

之成、而及（加籠遇）松齡公、慈眼公、代朝于聚樂、信

尹公皆（寵遇之）文祿三年、信尹公及太閤不

善、▽四月△太閤〔乃〕放諸（坊、津名、其居

之〕交通愈深、於是乎、閔原亂後、殿下為藩

竭力、成乎

神祖、然荒井氏曰、藩之與殿下交通、自前久

公寓於藩始云、殊屬無稽、不足辨也、而信

尋公、而尚嗣公、而基熙公、而家熙公、而家久公、

元祿十三年、基熙公等、因藩之太祖以來交

通既久、欲為家久公聘（中）大玄公翁主（名龜、

使蓮光院先說乎公、公乃諾、十二月、以

聞（綱吉）、

霸府、公許之、寶永二年、嫁立簾中、而未

幾簾中薨、六十是為英光院殿、三年、家熙公復

欲為聘、淨國公翁主、名滿 姫君、亦尋請之、正德二

年、嫁為簾中、五年、簾中生女延君、亦未幾

薨、年七十是為光相院殿、享保五年、延君尋天、

是為涼松院殿、而内前公、内前公納尾侯翁主、

為簾中、則慈徳公所許嫁涼池夫人名房 姫君、姊妹

也、而經熙公、迨今

霸府家齊 納 我、三位公翁主名茂 姫君、為御臺所、經

熙公豫為猶女嫁之、而基前公、基前公、則今

御臺所養兄也、而忠熙公、是即今殿下、而實我

老公溪山 公之女婿也、抑自萬壽中建島津莊、到

于今茲天保四年、得八百有十年、然方中葉經忠

公時、為足利氏被奪其地、如上所叙、而我

得佛公、則自基通公時為下司於島津御莊、尋

為惣地頭、又拜守護、而逝鎌倉、連室町、

歷聚樂、迄東都、莫世不襲封於薩隅日、況

室町時、命大岳公、戮僧義昭於日之福島、幕

府義教褒賞其功、增封琉球、附庸於島津、永

以為宗國矣、自文治元年到于是歲、天保 四年、六

百四十九年、而至今公齊興 公計其世、則二十

七君、其世益親於殿下及

霸府、亦猶如是、實可謂千歲無窮 右幕府遺

種處、而雖萬世享其祀之國也、

管窺愚考卷之下 大尾 共四冊

起艸於天保壬辰冬、脱稿於癸巳三月廿一日、

伊地知氏家藏

(1) 註、即天野遠景云、

(2) 大

(3) 莫不レ管於近衛府云々以下文意不穩、以六衛府混合為

説、六衛府職掌各異、令義解・職原抄等、有明證、

(4) 為世、定家曾孫為氏子也、

(5) 院宣

(6) 以、當作罷、

(7) 建、當作創、

(8) 拾捌之間、疑脫「町」字、

(9) 寔、疑奠、

(10) 世襲侯爵四字不穩、今改「文曰、自是列國、租法不均、

(11) 引「孔子云々之文」似「無用、

(12) 後更名忠嗣、